

新しい風俗文献誌

奇譚クラス



ミッドウエストと
艶容の造形

6月号

奇譚クラス

KITAN CLUB

6

定価 百五十円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



特價
五百元



絢を競う艶姿115ポーズ



限定版特別号 第三弾！

『緊縛写真グラフィ集』

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

画題「縛り人形」

絹川文代
花坂道子

◎豪華な内容とモデル陣◎

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ

絹川文代

荒縄全裸緊縛

大塚啓子

落ちた腰巻九態（野外）

円い乳房

愛川悦子

浴室におびえて九態

愛川悦子

縄の陶酔

絹川文代

恍惚境悦虐の末

絹川文代

いためられた乳房

桜井葉子

耐えられる？

桜井葉子

月経帯の強制二態

大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態

大塚啓子

全裸悦虐態

大塚啓子

白痴美の誘惑

大塚啓子

はねかえす縄

大塚啓子

うろうろ許して！

大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態

大塚啓子

優姿ハタカ縛り

絹川文代

忘却の彼方

絹川文代

股間縛り背正面二態

絹川文代

捕われの麗人二態

絹川文代

湯責め二態

大塚啓子

浴室にて責める四態

大塚啓子

何にをしようと言うの

桜井葉子

新人鬱態集八景

桜井葉子

いじめぬく二態

絹川文代

メンスバンドの猿轡

絹川文代

観念横臥の図二態

絹川文代

変形手足しばり四態

愛川悦子

裸身をさらして六態

愛川悦子

豊満くらべ九態

桜井葉子

亀甲縛り正背面二態

愛川悦子

怨めしき縄目二態

大塚啓子

後手首腰縄四態

大塚啓子

新人緊縛ポーズ集六態

桜井葉子

隅から隅まで四態

愛川悦子

鏡面万華模様（裏と表）

愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ



〓お申込先〓

大阪市阿倍野郵便局

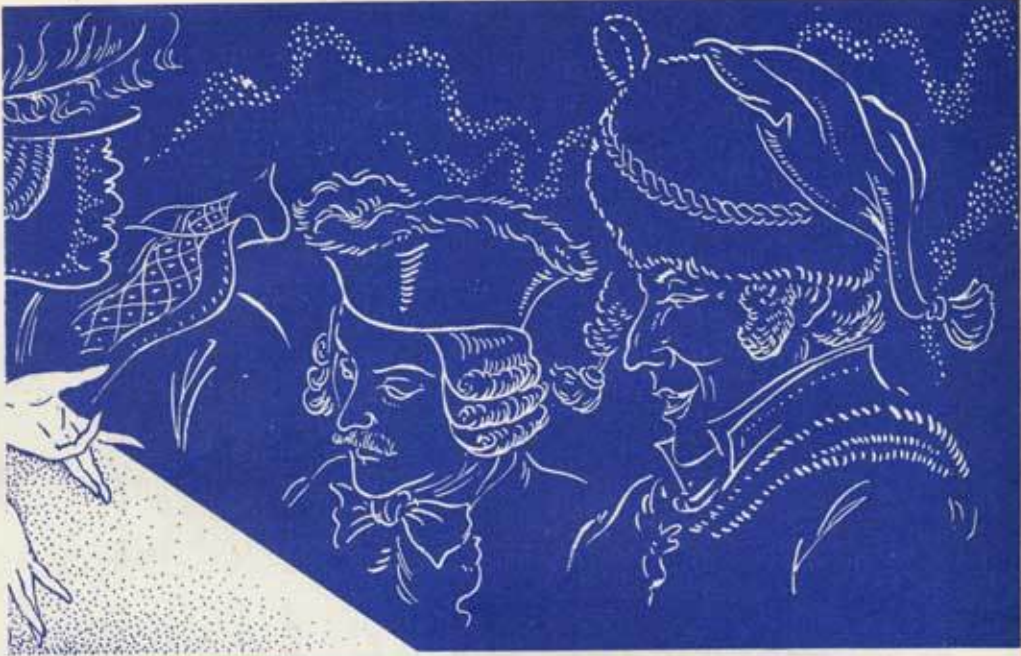
私書函第十四号

天星社

振替口座

大阪五〇〇四二番

限定版特別号
につき一切書店
売りは致しませ
ん。直接発行所
宛お申込み願
います。敬重包
の上急送致し
ます。



奇譚クラブ 六月特大号 目次

(第十五卷第六号)

巻頭色刷口絵「美女力士の激突」…雪崎京人・提供
目次裏「川柳世風俗選」…佐保忍・作 滝れい子・画

巻頭口絵

四馬孝貞画集……………四馬孝貞画
「一本足の案山子」……………硝子製浣腸器
「水槽の生物」……………「不気味な毒虫」
「新妻入浴」……………マゾヒストック画廊…滝れい子・画
「従姉と中学生」(馬乗り跨がり)…
切腹画「従軍看護婦の最期」…滝れい子・画

グラビヤ・フォト・セクション

艶容と清美の造形…構成・辻村 隆
諦 観…大塚啓子 高手小手…梨花悠紀子
影 法 師…東浦ひかる 床にうめく…大塚啓子
装 飾…絹川文代 清 と 美…梨花悠紀子
演劇器の用途…四方清美 白く輝くもの…東浦ひかる
猪 吊 り…梨花悠紀子 光 と 影…絹川文代
黒髪乱舞…大塚啓子 閑 え…前本妙子
首飾連続ポーズ 女性切腹撮影ポーズ
婉婉嬌々…梨花悠紀子 屠 腹…大塚啓子
マゾ・フォト 滑車吊り…梨花悠紀子

妄想の昇華

目下飼育中…東浦ひかる

色貨絵物語「サドメ随日記」…橋啓作 杉原虹児・画 53
奇ク随想エロときつというところ 中谷正夫…62
奇態体験小説「七(まんじ)」…正宗五郎…70
創作 白い山道…栗瀬 長…74
告白 女装遍歴…伊佐正幸…82
映画通信 男性緊縛模様…梶 孫一…89
奇譚三十九夜物語(第六夜) 辻村 隆…92
ファンタジヤ・マゾヒスティカ 山本節夫…106
連載小説「狩獵者」(六)…佐度 槐…114
告白 我が憧れるもの…藤森一成…122

奇クサロン

私のアイデア 125

同好者会合の提唱 マゾ短歌 奇妙な縛り
女王様のうたえる 浣腸と尻打ち
告白「毛糸の誘惑」 通信 或る女装ポーズから
真昼の幻想 少年愛離シリーズ「烙印」
戯れに歌える 馬化狂通信
奴隷密売団 私の描いた絵
女性化した男性の肉体 白いイヤリングに黒い狼轡
映画に現れた男性性シーン 極探フエチ通信
文芸作品に於ける トクホン利用の狼轡
切腹の描写について ハイティーンの陳列
サドコント「羽衣の天女」 私の自縛写真

私は犬のように歩く(愛好者の記録) とやまかつひこ 141

告白「白足袋のこと」 木ノ下明美 143

新稿ある夢想家の手帖から沼 正三 146

美少年緊縛の夢「翼」…佐渡健児 150

浣腸短篇小説「たそがれ」…瀬川良三 155

マゾヒズム天国…田沼醜男 160

著い魔城第二回「特製家具No.303」氷見竜也 166

連載小説「宇宙のどこかで佐治麻造」折伏下男 178

切腹についての考察(腰を切ること六六)宮口孝夫 194

誌評 表情と動き(四方清美編にちやう)須藤律夫 200

偏執の記録 臍窩清掃論…須藤律夫 206

色頁「緊縛フォト撮影の実際」塚本鉄三 213

創作 小間使いのうた…近藤 一 222

ハイキング残酷記…水田真紀子 230

読者通信… 230

川柳当世風俗選

佐保忍作
淹れい子画

ニューフェス 水着姿の拍を

曲げ

小屋がけ

アクロのバット

かぶり

き

アイライン

美しさ悲し

今や

極

まれり

現るしく
肉づきの

出を股いよ

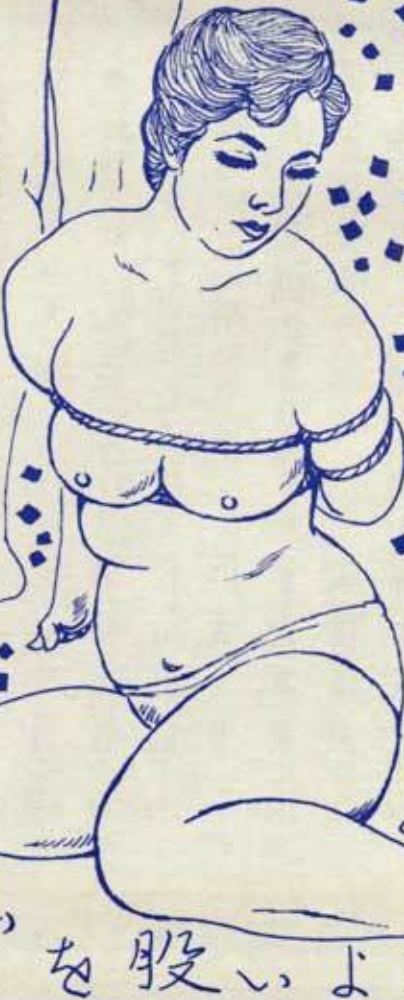
近頃は

女に甘い男増え

お面の

ような

化粧を



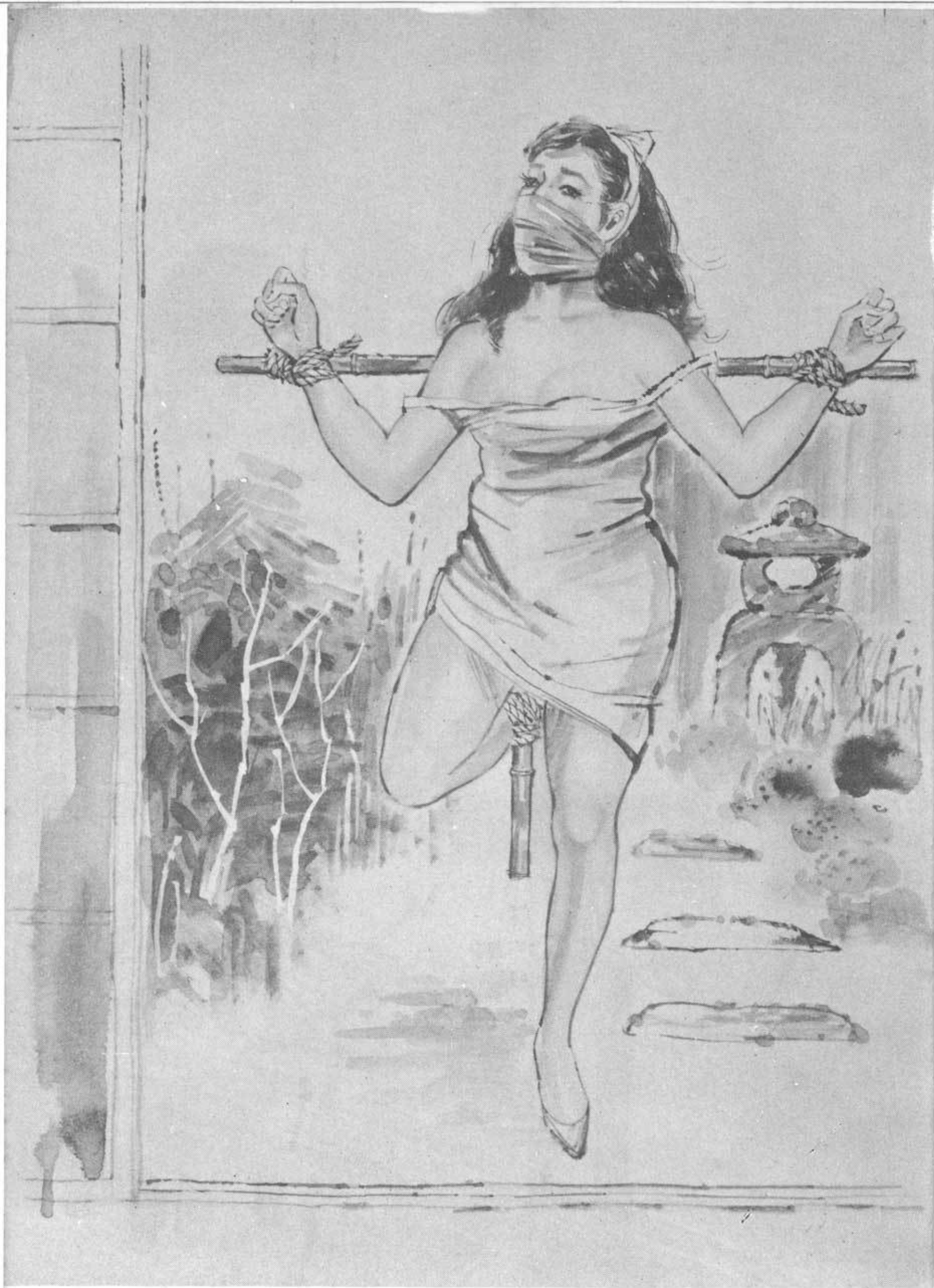
あり
異変

レジャーの
ブーム

お色

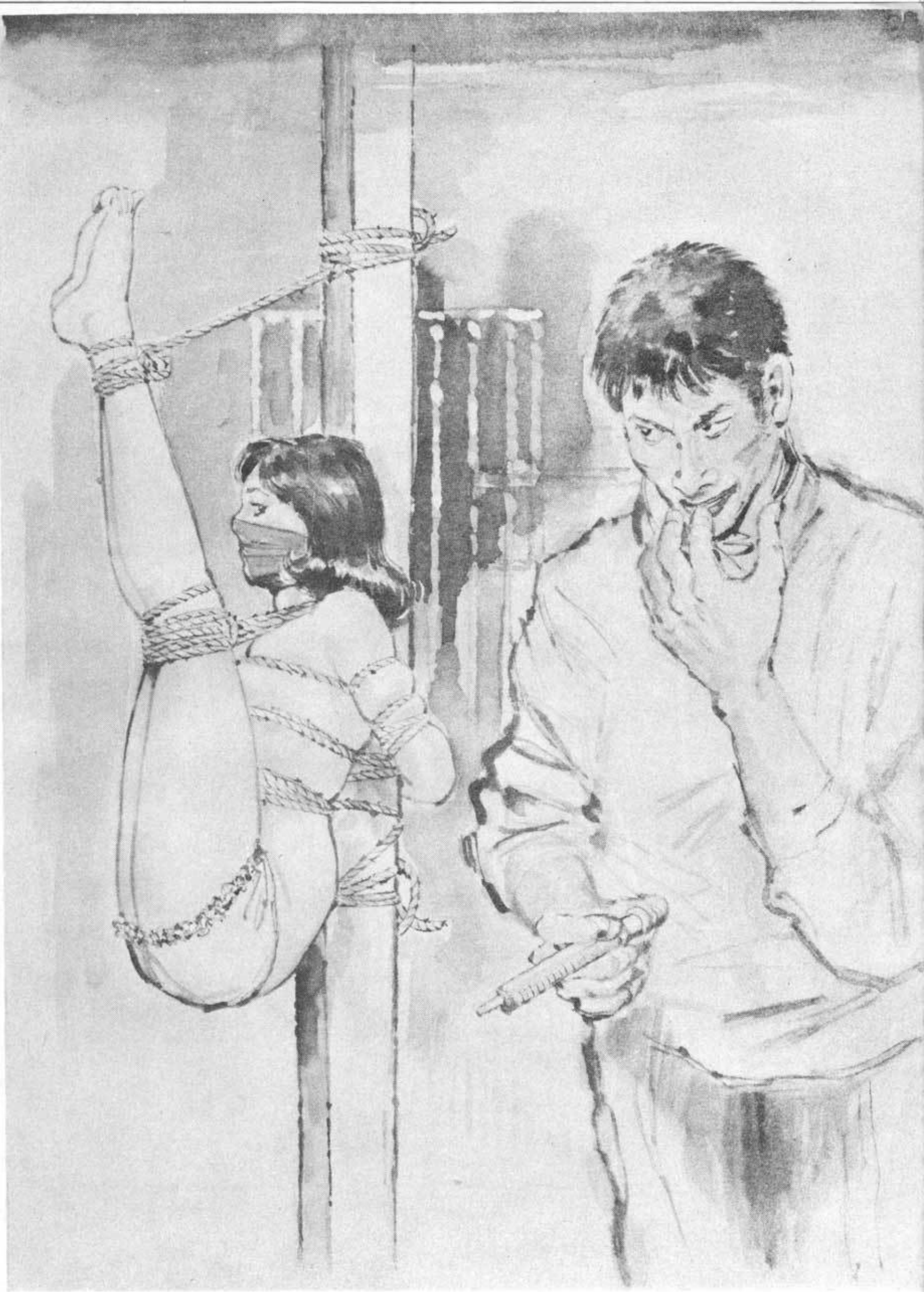
気





一本足の案山子

春の陽ざしの明るい庭にまるでカカシのように一本足で
立たされている哀れな彼女。

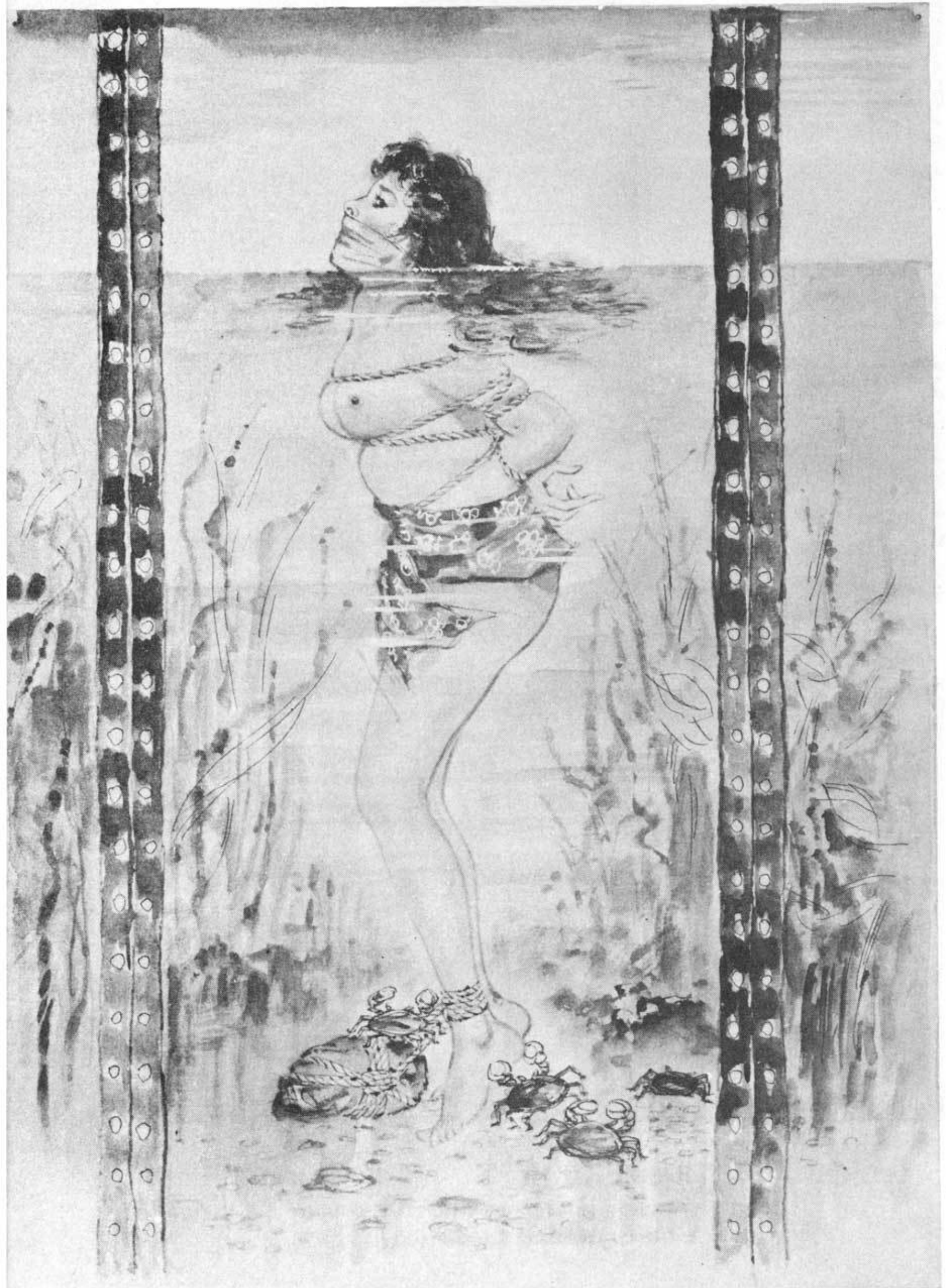


硝子製浣腸器

柱に蟬がとまったような奇妙な恰好で縛られている女に冷たく光る浣腸器が迫ってゆく。

水槽の生物

水槽の底には女体の温か味を求めた蟹が、モゾモゾと足の裏に這い寄ってくる



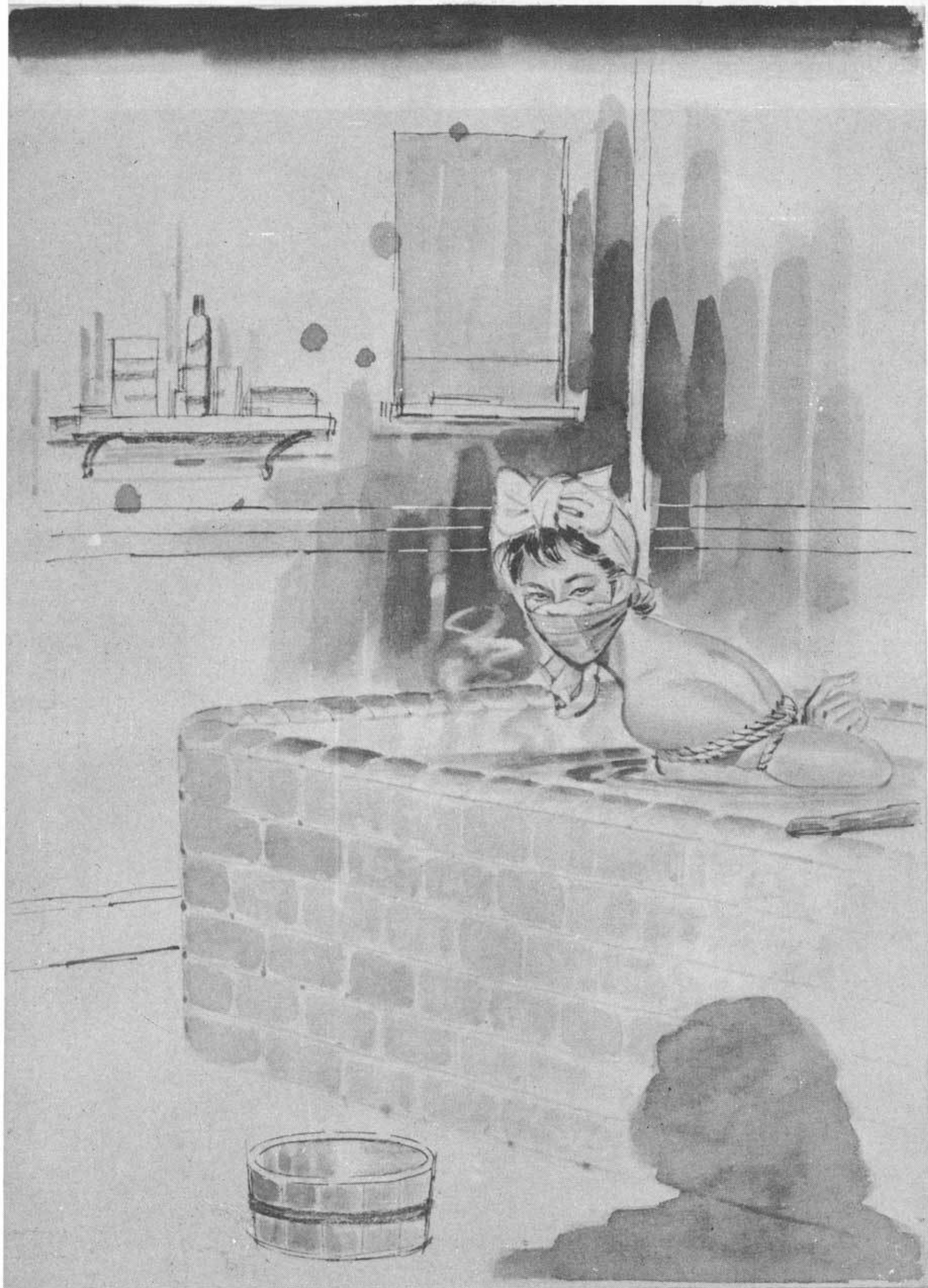


不気味な青虫

背中にのつけられた虫が何人であるか不明であるだけに、
その冷たい感触はたまらなかった。

新妻入浴

新婚何日目であろうか、彼はとうとう待望の美しい新妻を縛り上げ入浴させることに成功した。



馬乗り跨がり

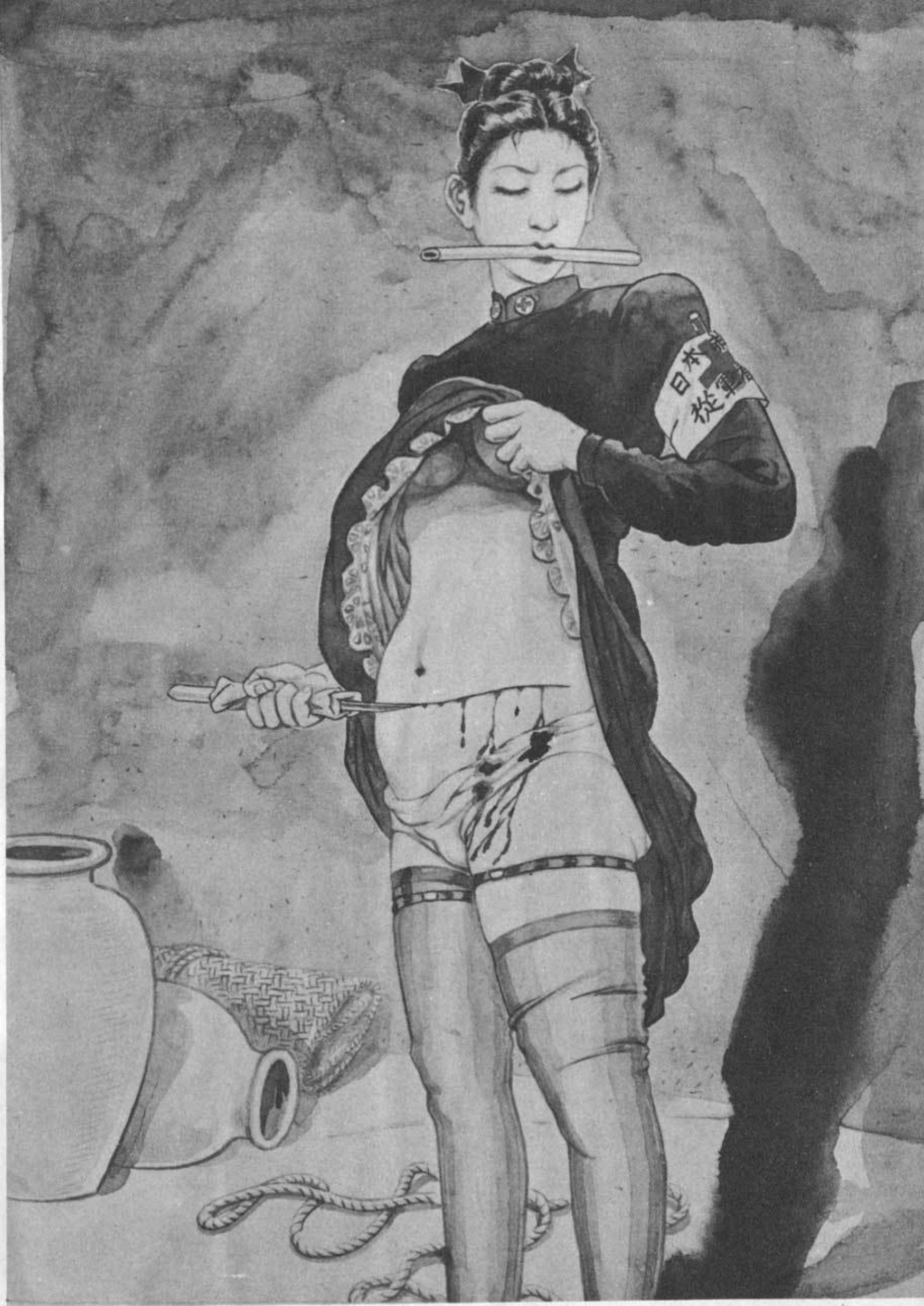
少年の胸の上へボリュームのあるヒップをどっかと乗せる。



従姉と中学生

二十二才のグラマーの従姉と十五才の腕白の美少年の争い。





従軍看護婦の最期

日本の敗戦により真白い腹をくつろげて立腹を切る凄絶な
大和撫子の最期の姿。

艶容と清美の造形

構成 ☆ 辻 村 隆



諦

観

大塚啓子



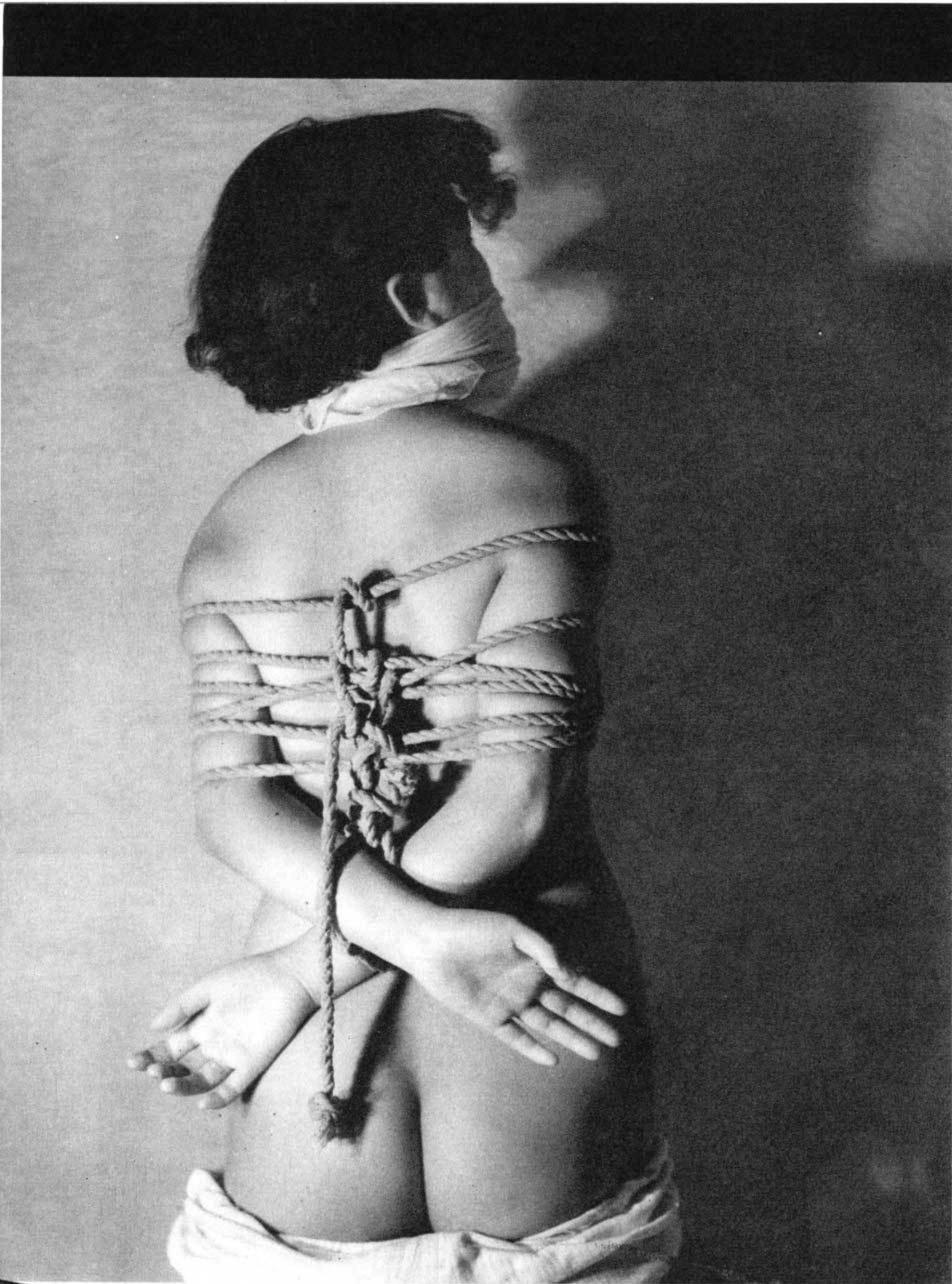
梨花悠紀子

高手小手



影 法 師





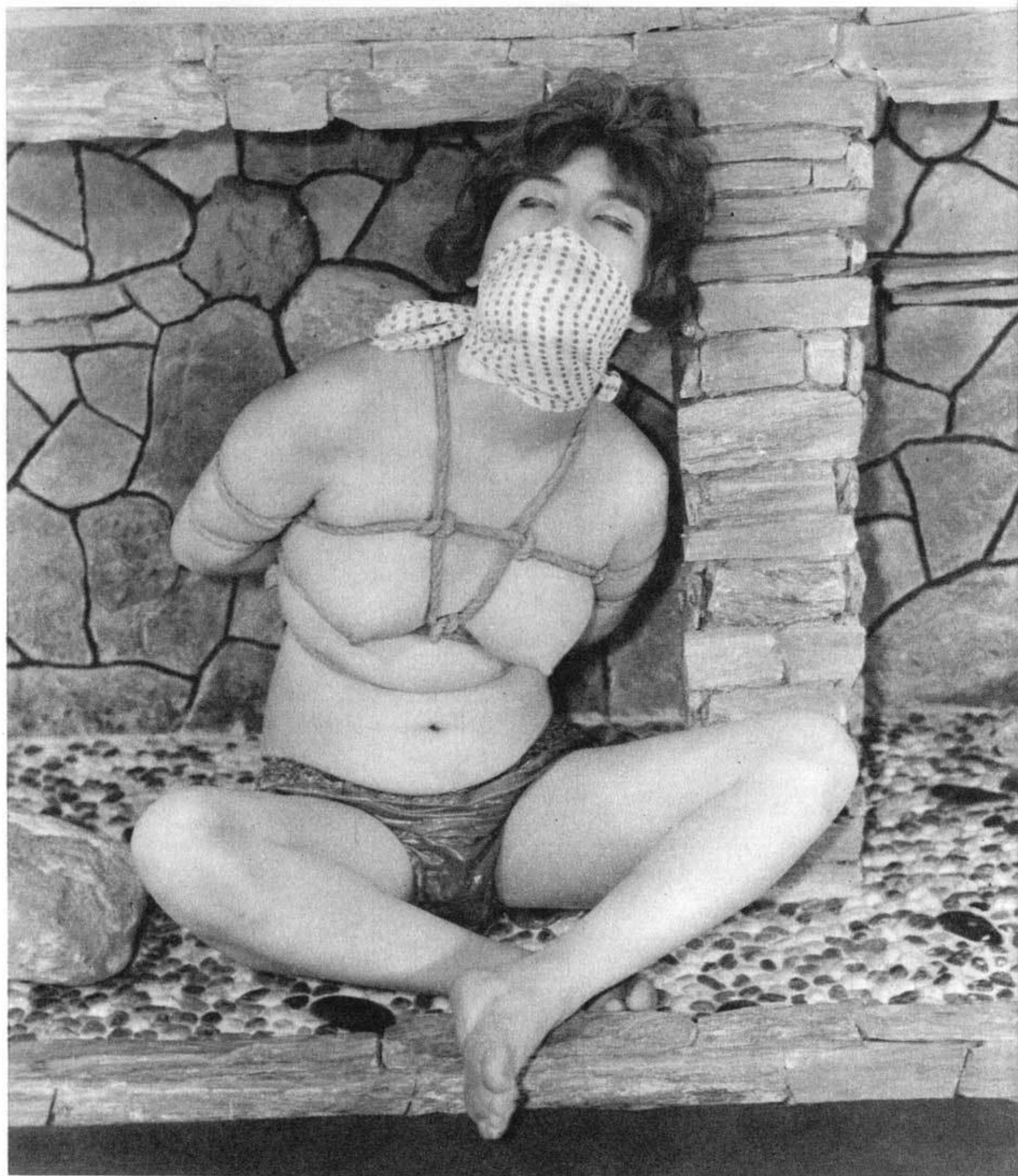


大塚啓子



床にうごめく

装 飾

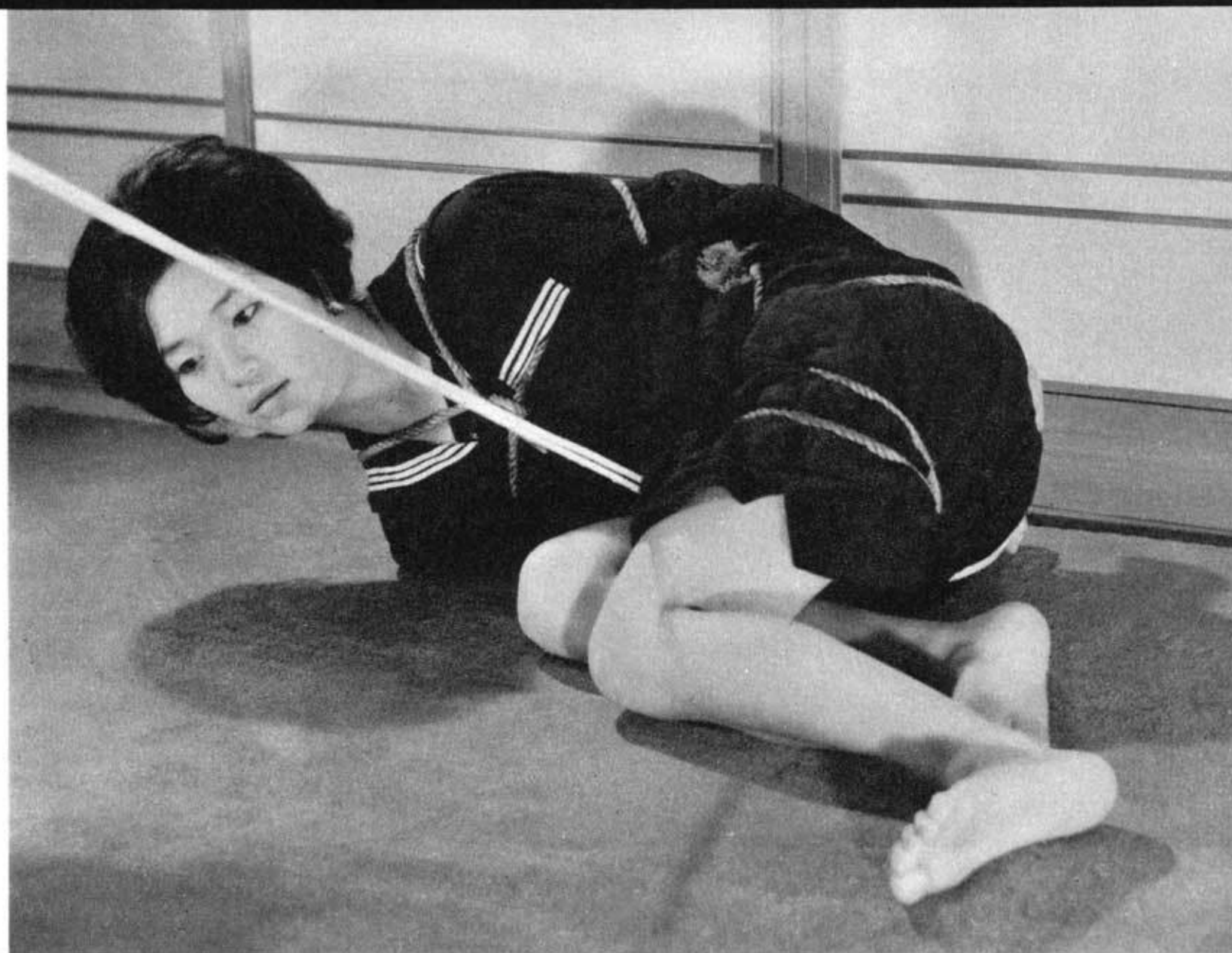








清 と 美



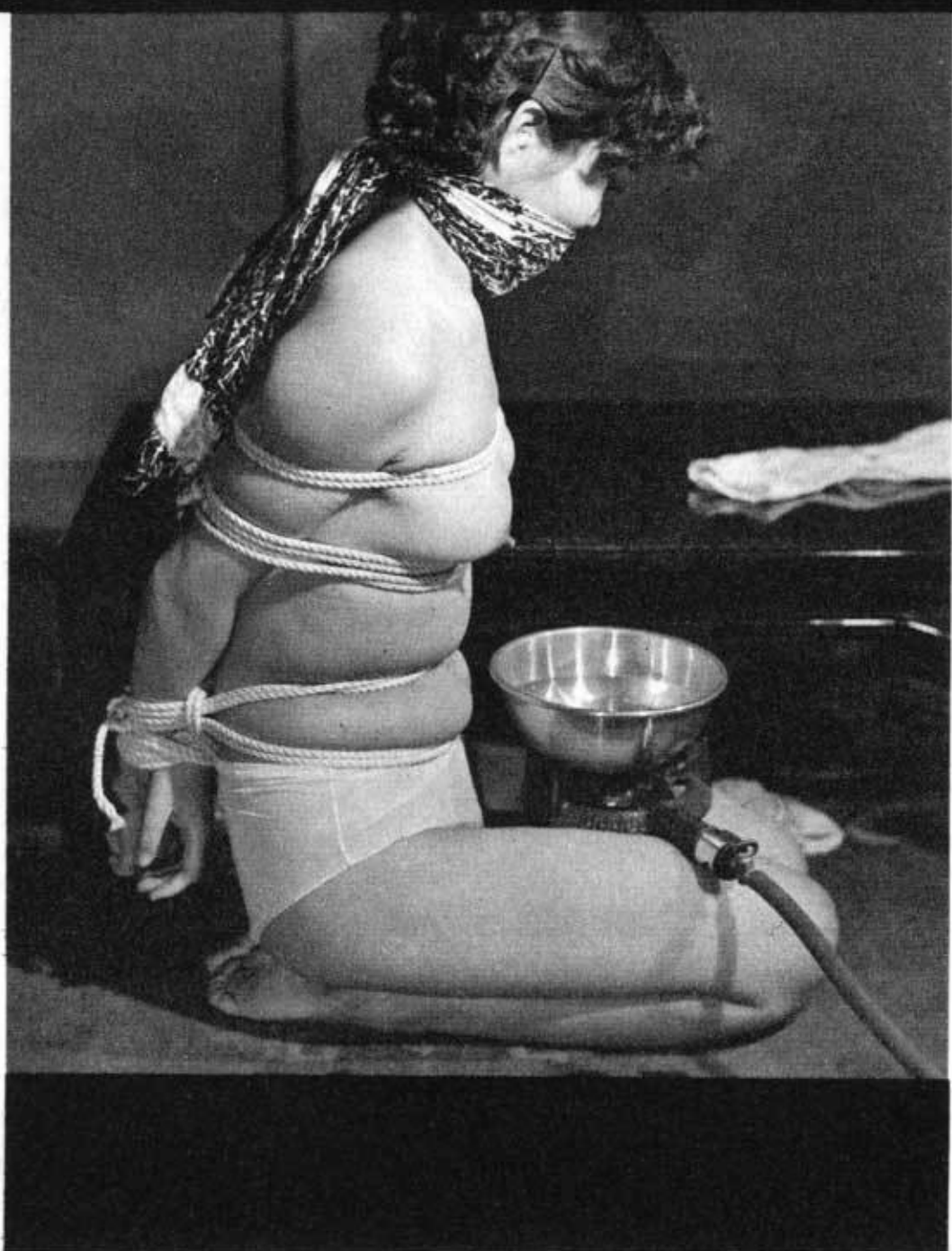
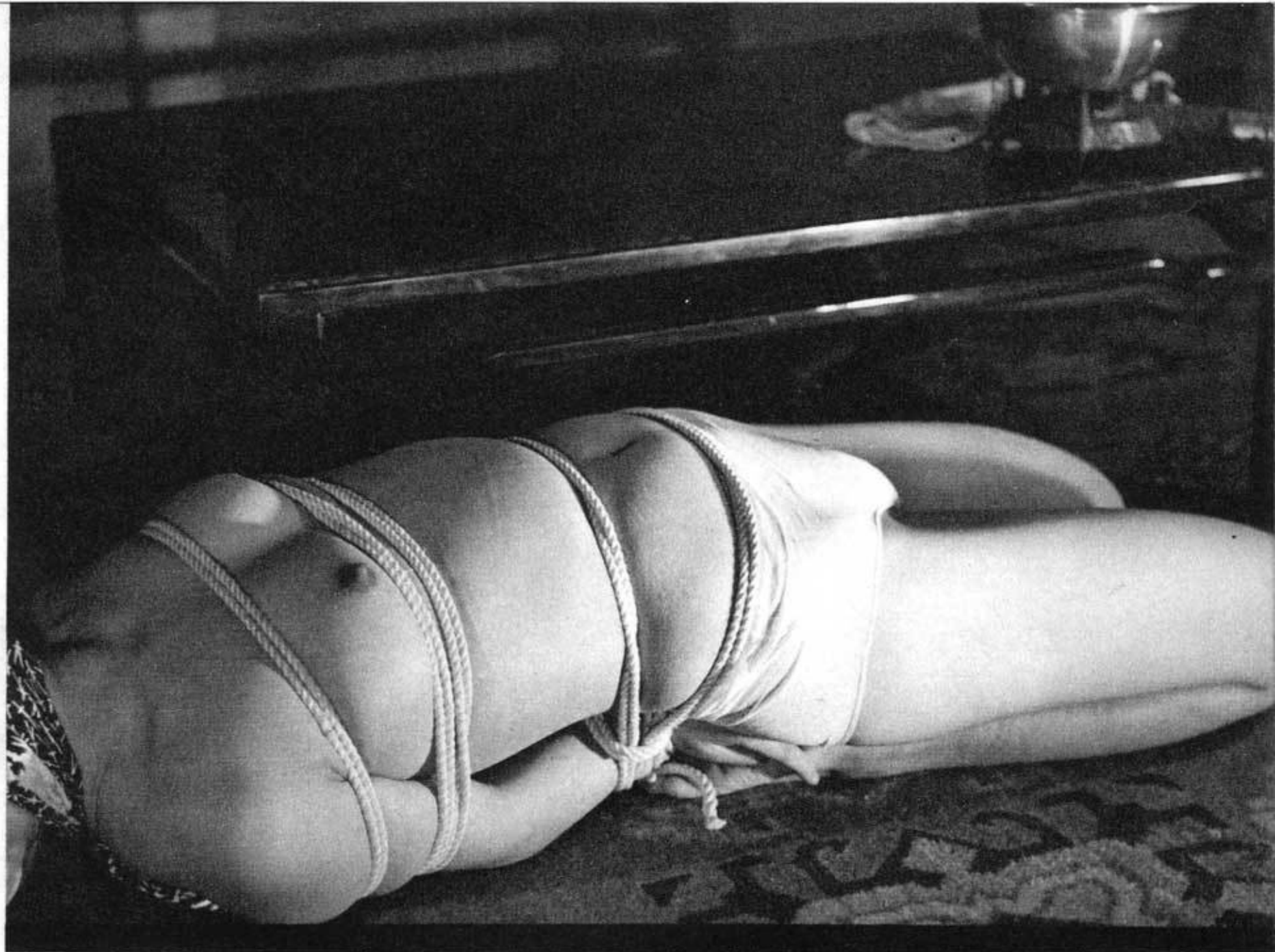
梨花 悠紀子

浣腸器の用途

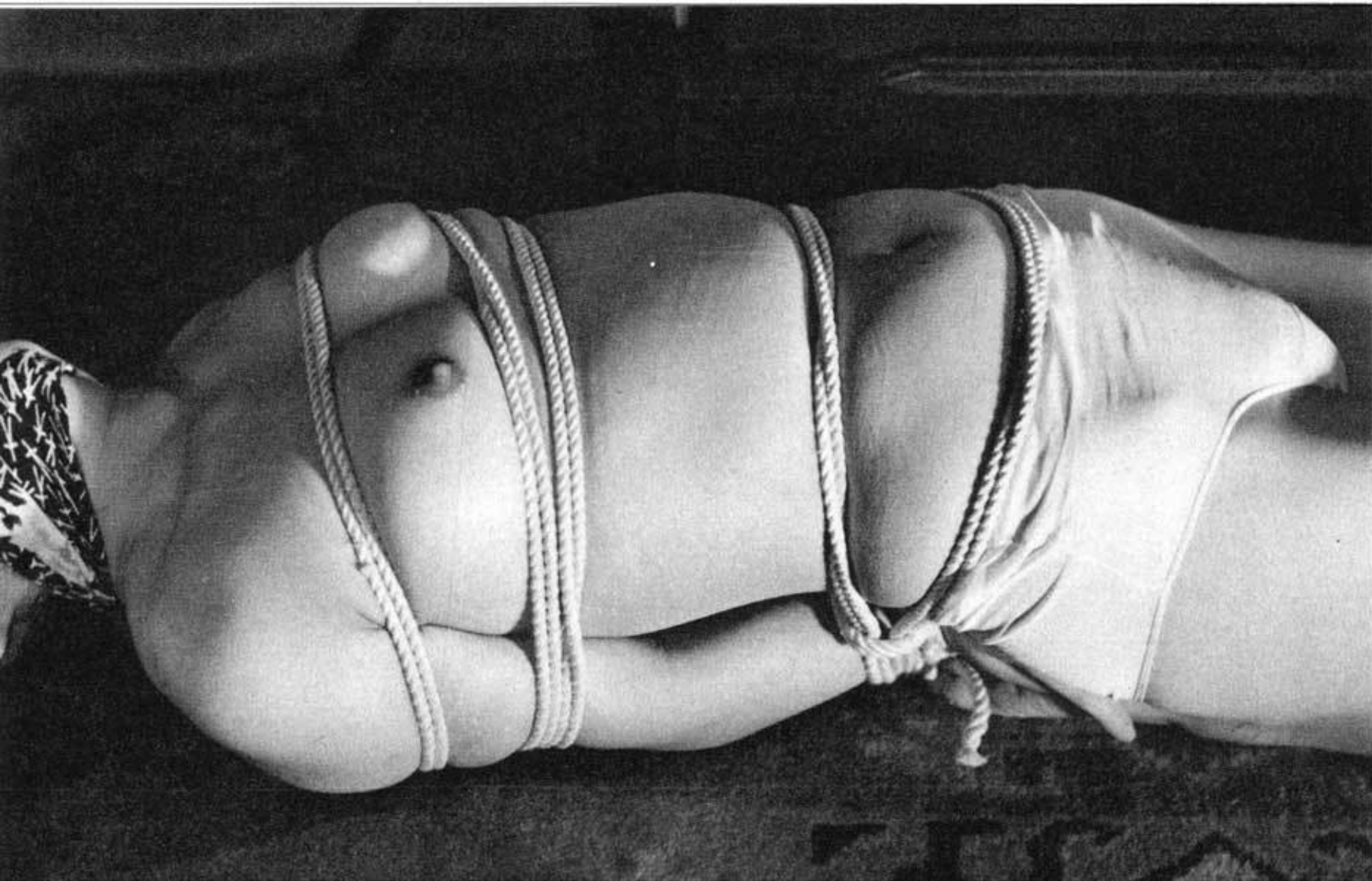




四 方 清 美



東浦ひかる



白く輝くもの



猪
吊
り



光 と 影

絹 川 文 代





黒髪乱舞



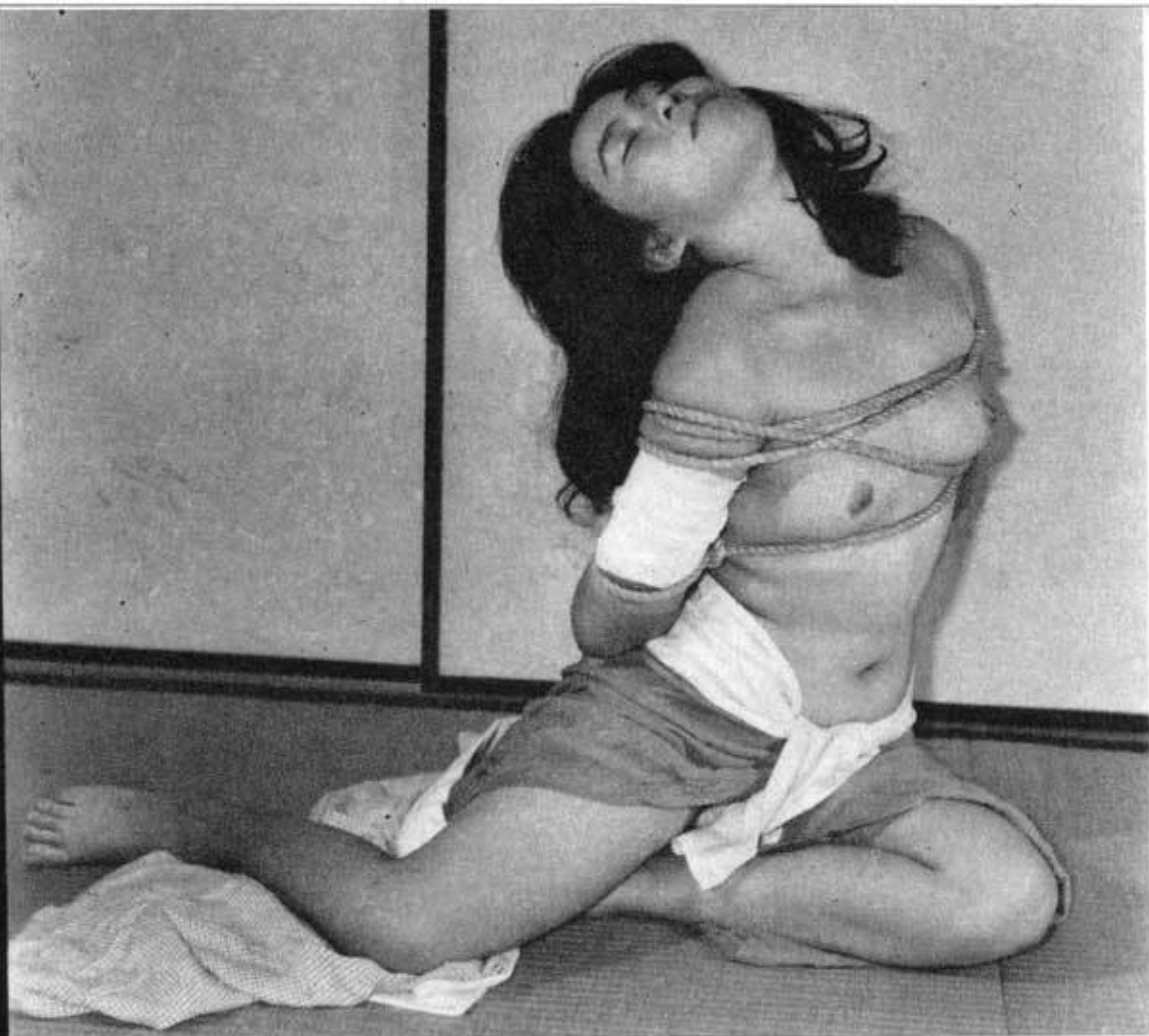
大塚啓子



前
本
妙
子

悶^{もだ}

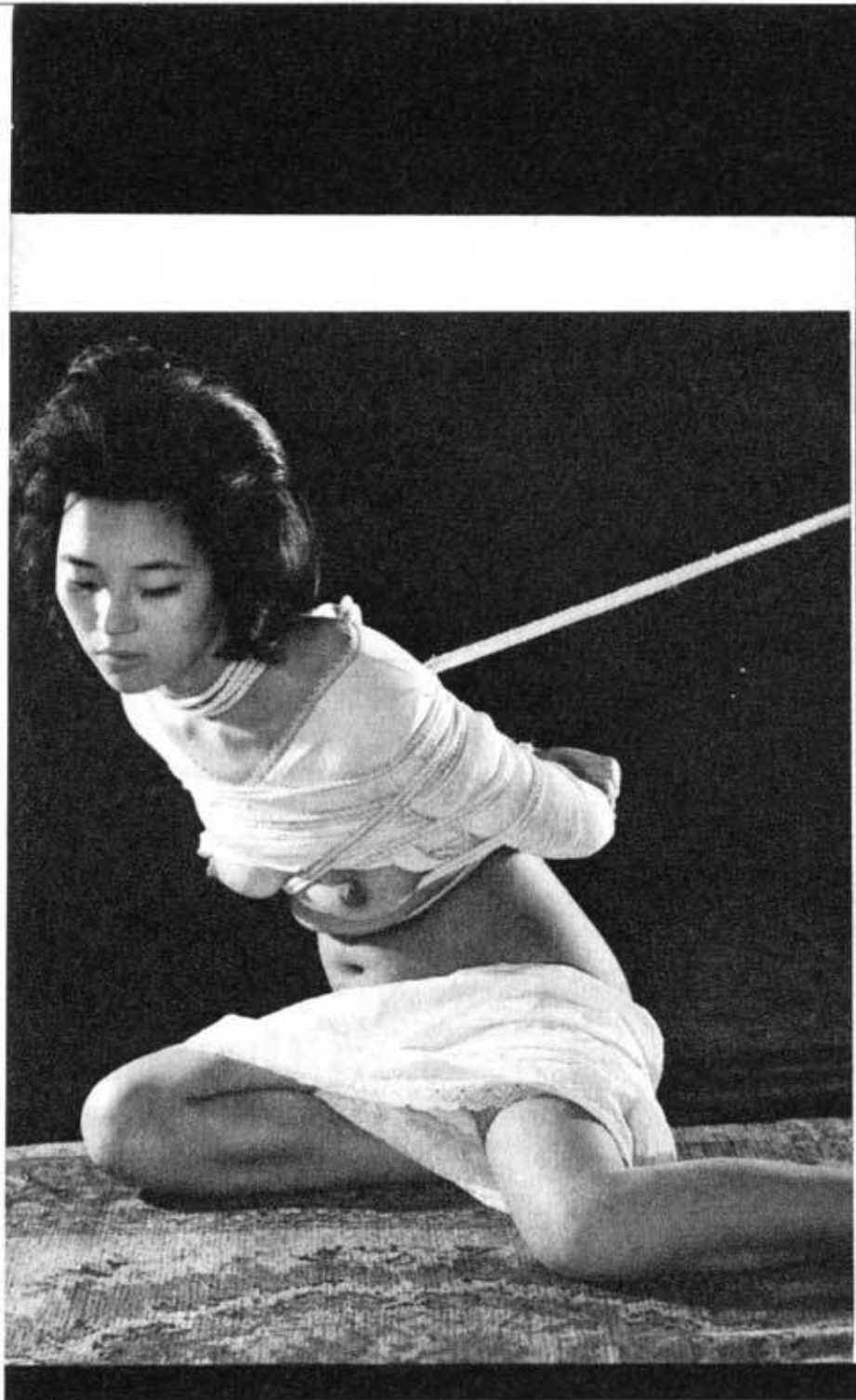
え



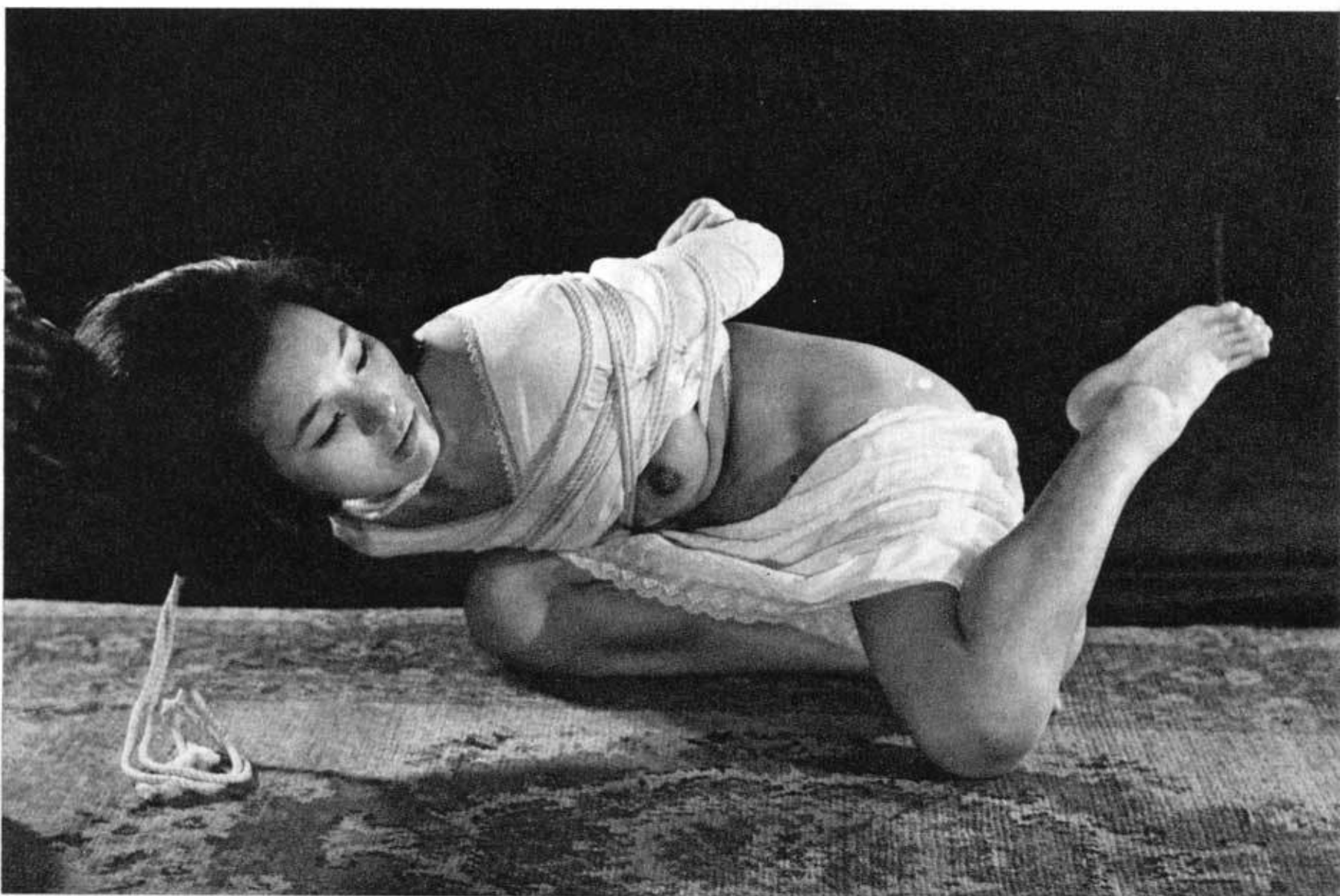


首縄連続ポーズ

婉姿嫋々



梨花悠紀子





屠^と

腹^{ふく}



女体切腹擬態ポーズ

大塚啓子







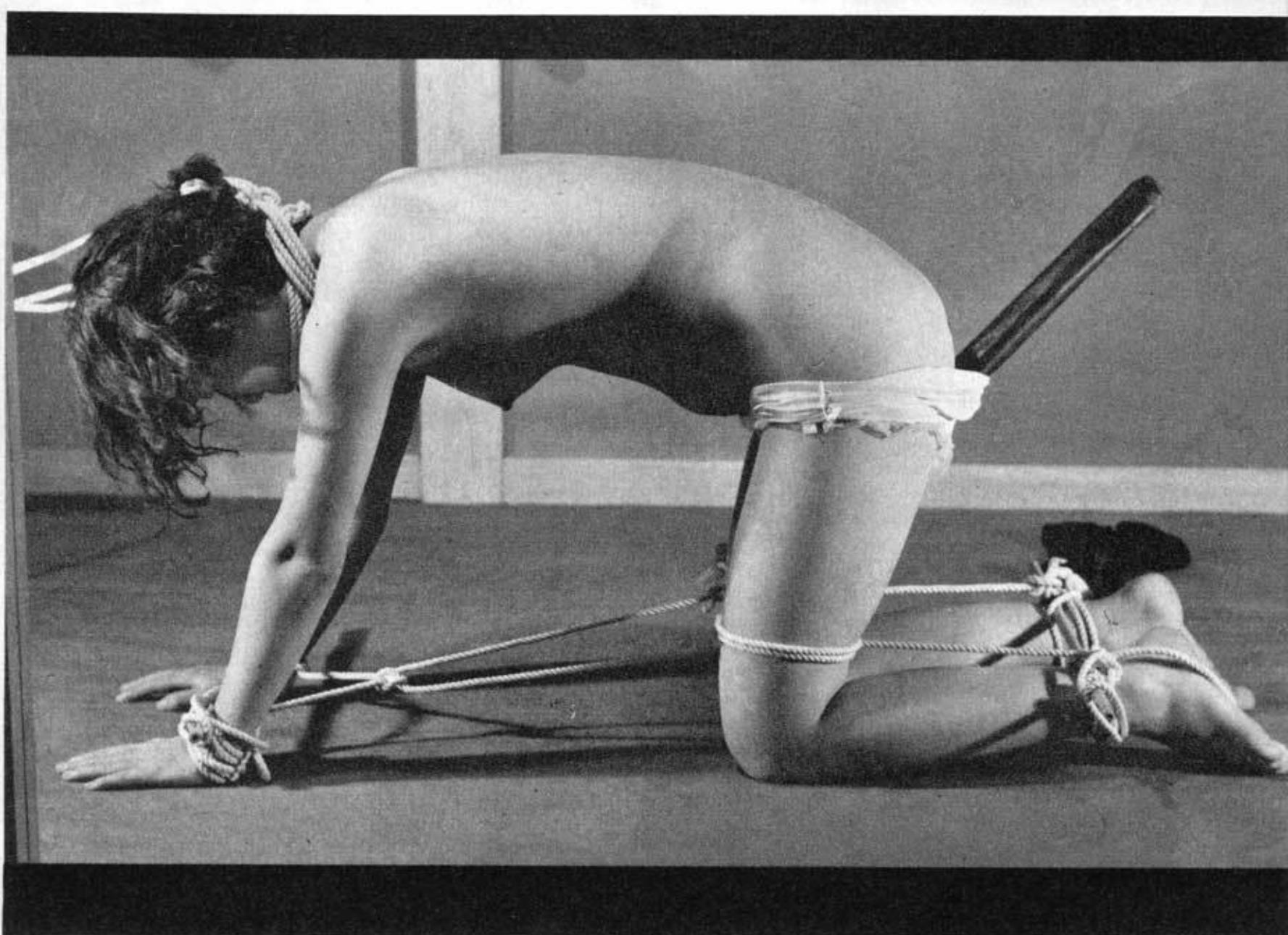
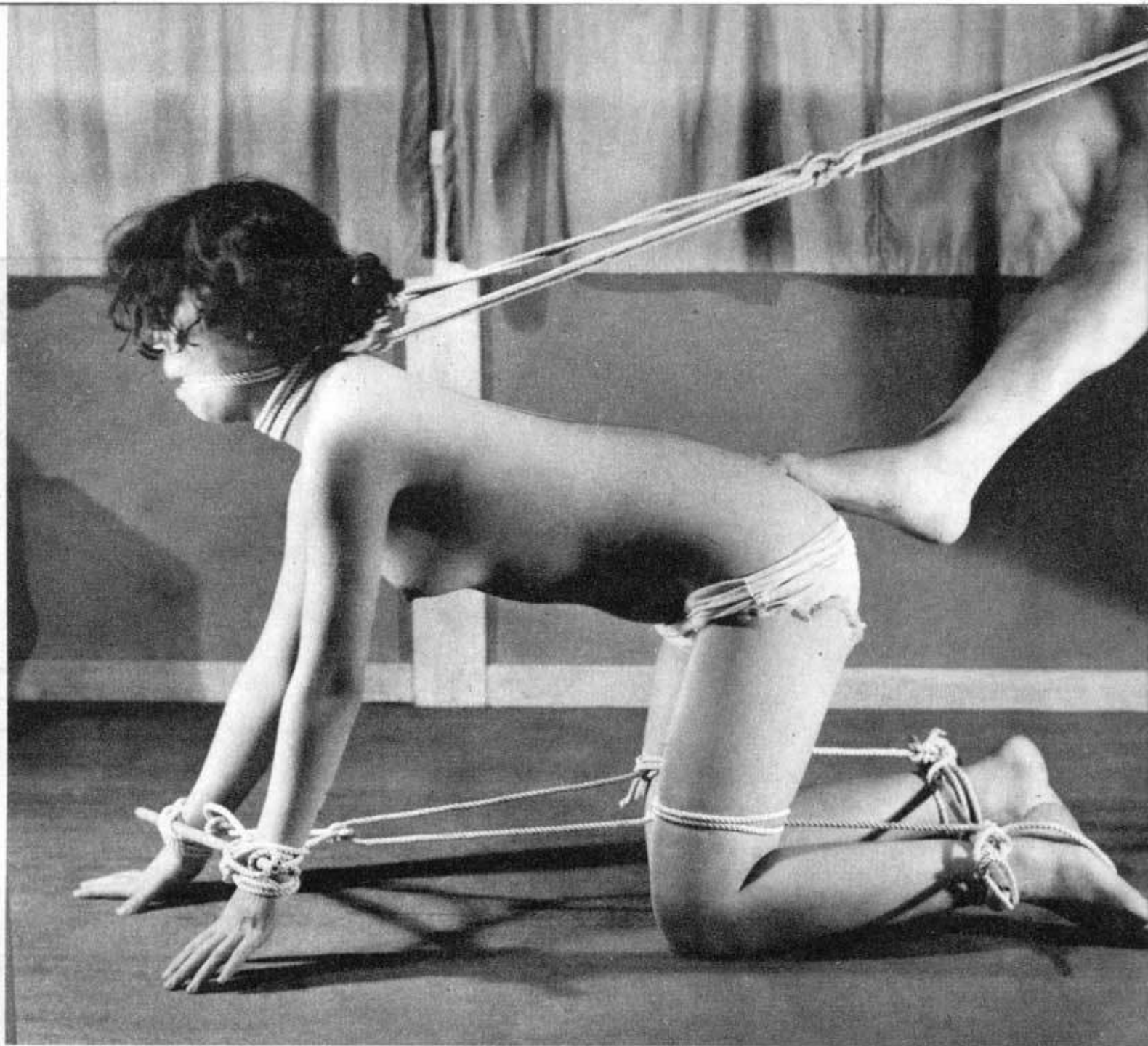
妄 想 の 昇 華







目下飼育中 東浦ひかる



サドメ随行記 楯 啓・作 杉原虹児画



ドア・ガール

“サドメ”嬢は本年二十
一才のBGである。その
彼女のクラス・メートの
内の同好者が、毎月一、
二回寄って、女性ばかり
のラブ・プレイの華を咲
かすと聞いているは、一度で
いいからその態を観せて
欲しいと希うのは、私な
らずとも当然のこととい
えるだろう。

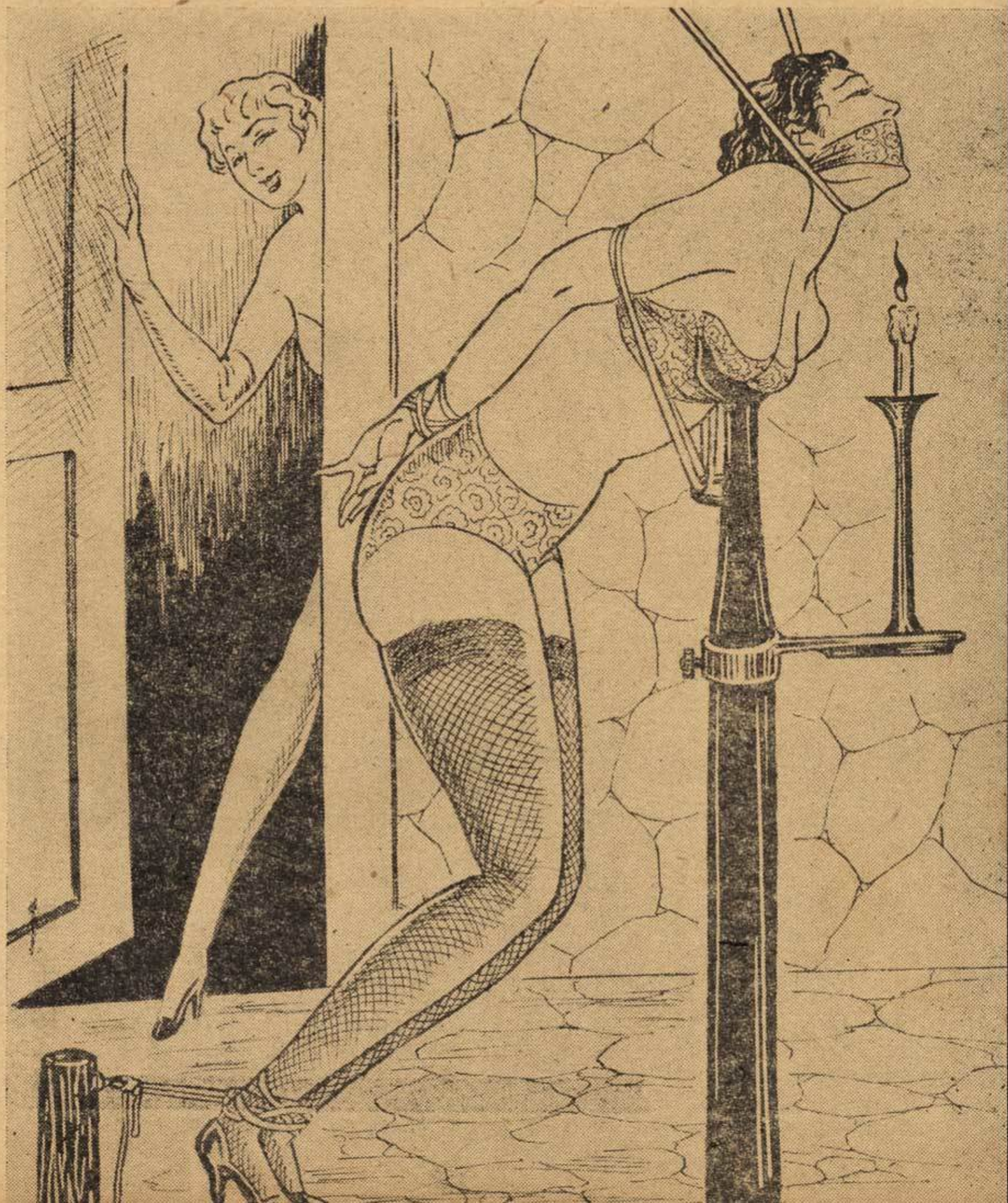
私の執拗な懇願に彼女
は遂に同行を承認してく
れたのだが、入口で早く
も第一の被縛女体に出喰
わして驚いてしまった。

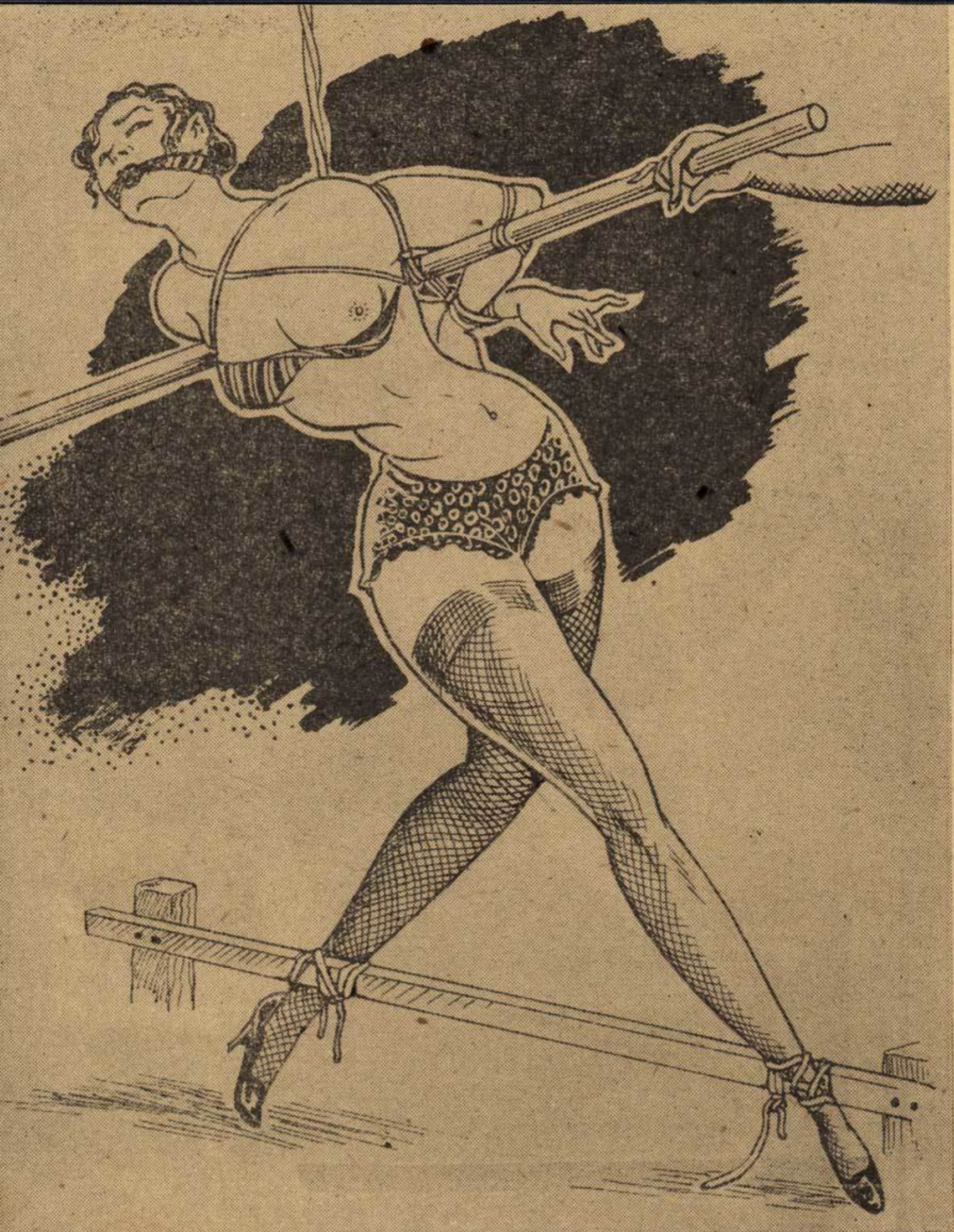
角棒を背に奇妙な縛り
方で吊られた女は、グッ
タリとブラ下っていた。
サドメ嬢が、彼女の頸の
紐を引いた。女の体が大
きく揺れ、どういう仕掛
か、入口の扉が音もなく
開いた。

炎責め

サドメ嬢に導かれて、最初に通った部屋は地下室だった。壁も床も石で畳んだ一室に、第二の被縛体がうごめいていた。床に埋めこまれた鉄柱に倒れかかるようにして、後手に縛られた女が固定されているのだ。鉄柱の先端が、女らしい花模様のブラジャーに深く喰い込んで、胸の豊かさを強調し、背中へ廻して鉄柱に引きつけている白い綿ロープが、フックラとした艶肌に噛みこんで深くくぼみをみせている。

サドメ嬢が、ものもいわずに近よって、天井から下っている紐の輪を手にとると、女の髪を掴んで顔を上向かせ、そのたおやかな顎に掛けた。そして柱についている燭台のローソクに火をつける。女の全身が妖しい起伏をみせて、苦痛にくねり始めた。





挺子捻じ

見とれているのを促がされて、しぶしぶ移った次の小部屋にも、私の魂を奪うものはあった。

長い棒を背中に抱えるようにして後手に緊縛され、両足を八の字に固定された若き美女の姿である。女は入って来た私達の姿を見て長いマツゲを伏せ、少し羞ずかしそうな素振りをみせた。それが、いかにも可憐な愛らしい感じを私に与えた。

サドメ嬢の手が延びて棒の片端にかかると、ぐいぐい押し出す。女の体が信じられない程に捻れた。猿ぐつわの奥で呻くのが聞える。私が思わず「僕にも……」といいかけると、「観るだけの約束よ!」と叱られた。



くの字吊り

次に観せられた女は、既に白肌を脂汗にひからせて喘いでいた。

吊られて、どれ程の時間が経っているのか知らないが、豊かな胸が大きく波をうち、すんなりと伸び切った見事な脚線がひくひくと痙攣し、可愛らしい足指が、苦悶の踊りをみせている。

くびり切れるのでは……と思える程に、胴に深く埋没している吊縄はもちろんだが、うなだれることを許さない鼻の下吊縄が、さぞや苦しいことだろうと思える。

「ヨッチン。いかが？ごきげんは……」サドメ嬢が、見上げながら声をかけてタバコを取り出した。火を点けると自分吸うのではなく、宙に浮く白肌に近ずけた。とたんに始まる妖艶なる宙踊り。

鉄パイプ

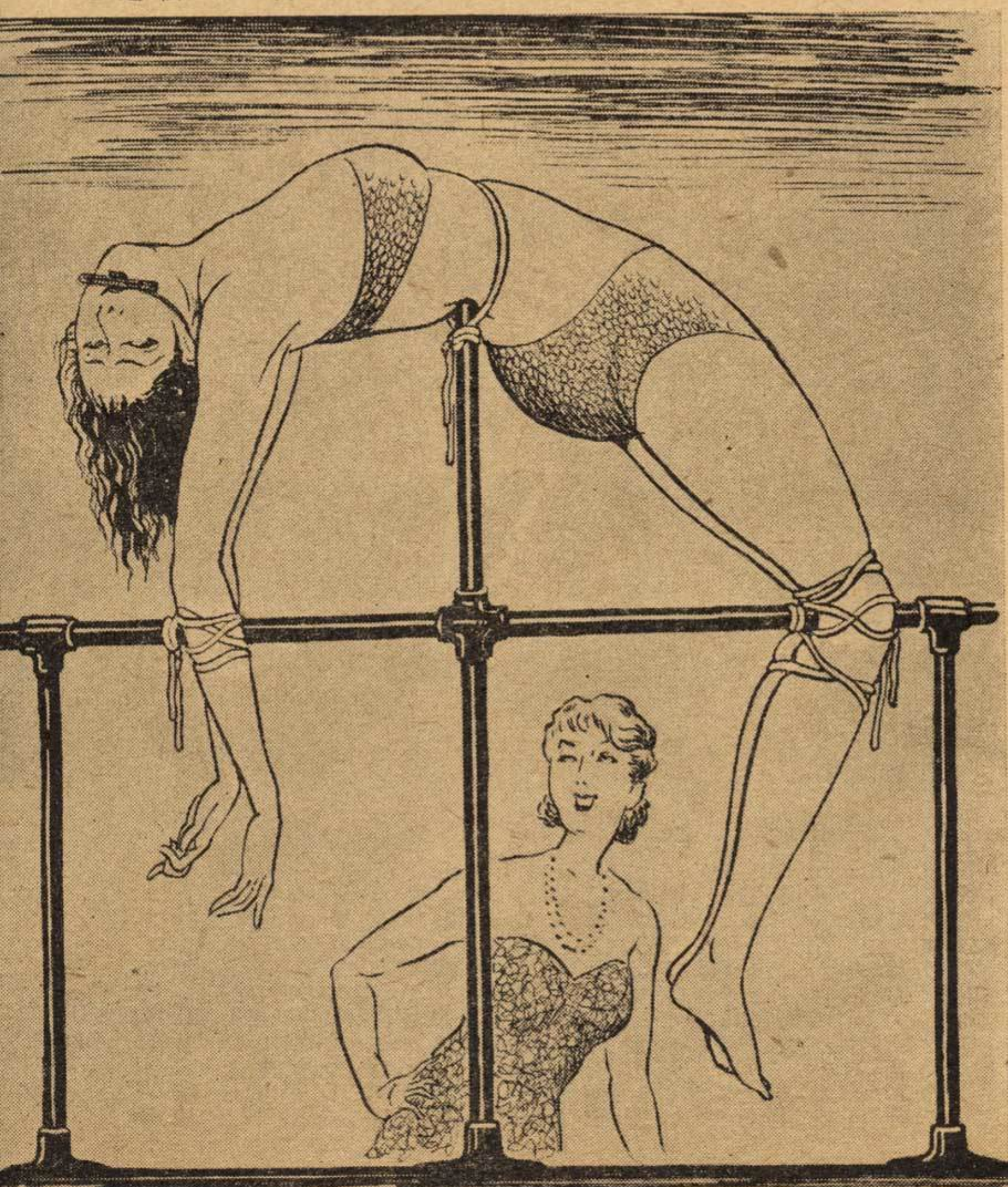
宙に浮く美女の苦悶の様相にため息を吐いた私は、再び、このパイプに架かった被虐体の前に、又もや、うならざるを得なかった。

女は、肩や腰をくねくねとくねらせて、背中の一カ所に集注してつき上げてくる鉄パイプの先端の激痛を他に移そうと試みている。

この苦しみは、絶え間なき痛覚を伴うだけに、一層のものであるうと思う。

「ご覧なさい。両手の縛りかたがそう強くないでしょ。あれはわざと弛くしてあるの。プレイであって拷問じゃないのだから、どうしても耐えられなくなったら手を抜いて自分で縄を解けばいい訳よ。背骨でも痛めちゃあ、あそびの意味がないものね」

サドメ嬢が説明してくれた。私はうわの空で聞きながら、そり返った見事な曲線が、微妙な変化を見せるのに惹きつけられていた。





三ツ又鞭

その部屋の扉を開けると、とたんに“ビシ!”という鞭打ちの音と、噛み殺したような悲鳴が空気をふるわした。鞭を振るう黒衣の女性は、私達の気配にチラと流し眼をくれただけであつた。たぶん今迄見た五人の被縛体は、皆この女性の手によって縛られたものに違いない。

ビシ、ビシ!と小気味よい音をたてる三ツ又の皮鞭を肌にうけて、宙に躍動する伸びやかな肢体の持主は、悲鳴を挙げまいと必死に泳えているようである。

両足首を首輪からの鎖にせかれて屈伸を許されない彼女は、上体を右に左にとくねらせて苦悶美を発散する。

見えない糸に曳かれるように私が近づくとして、サドメ嬢に腕を掴まれた。

針 山

ブツブツばやく私の気持を察してくれたのか、サドメ嬢が調教用の鞭をとって連れて行ってくれたところには、又一人の吊られ女がいた。両手を伸したまま後で縛られ、更に片足を添えて括り上げられている。脇に通した二本のロープで、ズッシリした体重を吊り下げているのだ。足の届くところに台はあるが、それには鋭い針が植っていて足をのせて体を支えるのは難しいだろう。

サドメ嬢の鞭が空を切る。女が苦しげに揺れだした。三振、四振……。

女が頭を左右に振って掌を握った。これが合図らしい。サドメ嬢が大急ぎで、吊り縄を操作して床に降した。



宙 座 り

彼女は透明の腰掛けに坐っているような格好で喘いでいた。猿ぐつわのない朱唇が、ひくひくと震えて、サドメ嬢に命ぜられたその姿勢の苦しさを表現している。

サドメ嬢は、その美しい彼女の痛々しい姿から目を離さずに、同じく魂を奪われて凝視している私に声をかけて来た。

「このヒトでお願いよ。ご満足か、ご不満かは知らないけれど、これであなたは帰って頂戴ネ」

私は勿論、帰りたくない。慌てて、せめて、もう一巡、繰り返して観せて欲しい、と頼みこんだ。

「駄目！男子禁制のここへ来れたというだけでも、有難いと思っていただかなくっちゃあ。ネエ、サッチャん？」そう強くい切ってタバコの煙をサッチャんと呼ばれた被縛の女に吹きかけた。彼女は煙にむせ乍ら薄眼を開けて、ニツと僅かに微笑した。



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装六月特大号

1961年 6 月 号

(第15卷 第6号 通刊第154号)





奇ク随想

……ヒロとどぎつくとつんじと……

中谷正夫

小林孝氏の意見

四月号の読者通信欄に、小林孝氏が興味ある一文を寄せておられます。

それによると、最近の奇クは生ぬるくて、最早、奇クからは何の感動も得られないと歎き、一体エロ雑誌である筈の奇クが、純文学書よりもエロ味を帯びていないと言うのはどうしたことかと詰り、「まさか奇クがエロ雑誌では

ないとはおっしゃらないでしょう。又、愛読者は勿論、一般の人々もそう思ってるのですから、もつとどぎつくすべきと思います。一度や二度、発禁を受けてもつぶれるような貴社ではありませんまい。御一考をお願いします」と述べておられる。(ここで一寸傍道にそれますが、筆者が思うのに、奇クにとって、考え様によっては、耳に逆らう様な比の種の意見を、何時も憚りなく誌上に反映させて来られたところに、実を言う、奇クの自信の程がうかがわれると同時に、奇ク繁栄の一つのカギがあったと思います。此の寛大でリベラルな精神を欠いて、自分に都合の良い記事だけを載せて満足している程度だったら、とても今日の大を成すことは出来なかったでしょう。

しかし、此の問題は、これから私の言おうとすることには直接の関係はないので、これ以上、立ち入りません。

切て、此の小林氏の議論程でなくとも、奇クの表現が生ぬるいか、もっと度ぎつくすべしとか言う苦情や希望は、従来から可成りあった様です。例えば、一寸気付いたものだけでも、小林氏のほか菅良太氏（三五・一一）怒る男氏（三六・四）等々。

これらに対して、奇ク当局側からは、上品すぎるとか、気がねしすぎるとか、原稿を削りすぎるとかいう攻撃は甘んじて受けよう。それによって読者が減るといふならそれも止むを得ない。露骨な描写を売り物にして読者を獲得したところで、決して永続すべき性質のものではあるまい。と至って低い、而もはっきりした姿勢で応じて居られます（三六・四）。

此の小林氏の一文は、初めに申した通り、奇クは生ぬるいと言うことと、奇クはエロ雑誌である筈と言う二つの問題を含むわけですが、此の種の考えは案外、広く行き渡っていると思われまし、今後もあり得ると認められますので、恰度、此の機会に聊か誌上を拝借して私の考えを述べさせていただきたいと思ひます。

奇クはエロ雑誌か

其の場合、奇クが生ぬるいと言う点に就ては後廻しにして、先ず奇クはエロであるかどうかと言う点に就て考えてみましょう。（お断わりしておきますが、私は奇クの編集には何んの関係もない一読者です。それでただ、一人の読者としての感想を、自由な立場から申し述べるに過ぎません。もし奇ク礼讃になつても、奇クから頼まれた訳でもなく、奇ク攻撃になつても、別に恨みがあつてのこと

はありません。）

小林氏の言によると、奇クはエロ雑誌である。まさかエロ雑誌じゃないとはおっしゃいますまい、とある。一体全体、奇クはエロ雑誌であるのか、ないのか。実はそれが問題でしょう。

これを決めるには、矢張り順序から言つて、エロとは何かと言うことから出発しなければなりません。エロの定義と言うものは、何か言語学的にあるのかも知れませんが、ここでは常識的に言つてエロとは人の性欲を刺戟するものとしておきましょう。しかし、エロは猥せつと同じではない。猥せつの様な汚なさは少い、お色気がある。猥せつより範囲が広い、或は軽い、などとも言えましようか。何れにしても、其の中心概念は性的魅力を発散するところにあると思ひます。

エロとはそういうものであるとして、次に、奇クはエロであるかどうか。これは、二つの面からみるのがよいでしょう。一つは、奇クの基本的性格はどうかと言うこと（客観的要件）。もう一つは、これと表裏しますが、読者一般が奇クをどう見ているかと言うこと（主観的要件）。

読者はエロと見るか

説明の便宜上、後の方を先にするとして、結局これを決めるのは、読者一般が奇クの一般的傾向をどう見ているかと言うことに帰着します。一部の読者でなく、個々の作品だけでもない。従つて、今仮りに次の様な例があつたとする。聊かお下劣な譬えで恐れ入りますが、分り易い例として、奇ク何月号かの絹川文代さんの緊縛写真を或る人が見て、性欲の刺戟を感じ、其の写真を見乍らオナニー

をしたと仮定します。其の場合、其の人は、其の作品からエロを感じたことは間違いない。しかし、或る人が或る作品を見てエロと感じても、ただそれだけでは、奇クはエロとは言えない。中央公論に谷崎氏の「鍵」があったからと言って（仮りに鍵はエロとして）、其のまま、中央公論はエロ雑誌だとは誰も言わない。世の中で、彼は善人だとか悪人だとか言う。しかし、善人と言っても必ずしも善いことずくめでもないでしょうし、悪人と言っても年がら年中、悪いこと許りしているものとは限らない。それで要は、奇ク全体の傾向を、読者一般がどう評価するかと言うことです。（私が何故こんな分り切ったことをクドクド言うかと言うと、実は多少、訳があるので、それは所謂アブと呼ばれる世界に対して、世間には此の種の誤解や偏見が案外広く行われているからです。一寸変った性向を持つ人々に対して「彼奴等は変態である」と、ただもうそれだけで、何か特別な人種でもあるかの様に変な目で見る。奇クを持っていられるだけで変つてると見る。一方、又見られる方も見られる方で、自分達が何か全人格的な異端者でもあるかの様に錯覚して、劣等感に陥ったり悩んだりする——と言う様な、全くバカバカしいことが案外、広く行われていると思われるので特に述べた訳です。）

扨て、話しを元に戻して、奇クを全体的に見た場合、恐らく、エロと感じる人は少ないのではないか。これは私一人が独断する訳にも行きませんが、現に此の問題を提起された小林氏自身でさえも、奇クはエロ雑誌であるべき（「当為」）なのに、実際（「存在」）は純文学書よりも、遙かにエロ味が少ないと言っておられる位でしょう。

奇クの本質



それでは、奇クの基本的性格はどうか。基本的性格とは、要するに、奇クの目的とか機能とか、更にそれを達成するための手段とか要するに奇クが何を狙いとし、何を売り物にしているかと言うことです。此の点から観て、奇クはどうなのであるか。

先ず、奇クの目指す目的と、奇クが果している機能とは何か。これは、一口に言うと、人々の心の奥底深く潜む特殊な性情なり性向なりを、奇クの誌面に反映、集結させて行くと言うことであると思ひます。従つて、其の根幹は文献作用であります。勿論、派生的には、それ以外に娯楽作用とか、場合によっては啓蒙作用とか、色々の外の作用もありましょう。しかし、本質は文献作用であります。

緊縛はエロか

次に、奇クは、上記の目的や機能を達成するための主要な手段として緊縛を使っている。では、此の緊縛はエロであるのか、ないのか。

緊縛それ自身は、人間の身体の自由を拘束するだけのことであるから、エロでも何んでもない。ただ、それが若い女性を対象として行われる時は、往々性を連想させると言うことは事実でしょう。これは何故かと言うと、恐らく、緊縛と言う行為が性愛に関係ある戯れとして行われたり、サドとかマゾとか言う心理に関係があることが多いからではないかと思われまゝ。此の点に就て、昨年十一月号で絹川さんが、被縛の心理として「緊縛とセックスとの関係については……直接、肌に縄や紐が触れるということ、又、縛られて行く過程に於ても、そういう縄と肌との接触というものが、女の気持にどういう変化を与えるかということ、御想像いただけると思います。」と言っているし、又、いつか女優の青山京子さんのところに賊が入って、青山さんが手足を縛られたと言う事件があった時、報道記事の中には、其の緊縛の後に何か性的なことが引続いて行われたのではないかと想像を逞くしたものが可成りあった様です。此の様に、緊縛が若い女性に対して加えられた場合、其処に何か性と関係がある様に見られ勝ちのことは事実かも知れない。しかし、それだからと言って、女性緊縛、即エロ、緊縛は常に見る人の性欲を刺戟するもの、と言い切ったら、それは言い過ぎと言うものでしょう。

緊縛が性を刺戟することがあっても、それは、裾の乱れとか、胸のはだけとか、ストリップの姿態とか、身のこなしとか、要するに其の構図、乃至ポーズ等の情景の問題であつて、緊縛行為そのものの為めではないと思います。此の点は、ヌードに似ているかも知れませんが。ヌードはいつもエロになるか、必らずしも然らずでしょう。（因みに、嘗てはヌードそのものがエロと見做され、美術展覧会等でも、裸像は特別室に陳列されたり、局部に紙が貼られたり、布が

巻かれたり、又、接吻行為と言うことも、実は親愛の情の表現と性愛の表現と二通りある訳ですが、これをごっちゃにして、接吻行為はすべて風俗壊乱なりとして御法度になっていた等、今から思えば奇妙な取締りが、広く行われていたことも、そう古いことでもないことは御承知の通りです。）

それで、ここにもう一度繰り返しますと、もし緊縛と言うことがそれ自身、必らず人の性欲を刺戟するものだったら、緊縛を根幹としている奇クはエロ雑誌であるとされても仕方がない。しかし、緊縛が性を連想させることは多いとしても、常に性を刺戟するとは限らない。即ち、緊縛、即エロではない。此の様に見えて来ると、奇クは其の目的からも機能からも手段からも、何れに於てもエロ雑誌と認めることは出来ないと言うことになります。

扱て、以上に色々述べた様に、奇クは其の基本的性格から言つても、読者一般の見るところから言つても、エロ雑誌と言うことは出来ない。確かに、一風変つてゐるし、一寸見るとエロ的と誤解を受け易い面があることは事実であるとしても、少くとも世般一般に氾濫している所謂エロを売り物にしているエロ雑誌とは、性格を異にすると言わざるを得ない次第が良く分ります。

度ぎつくすることの可否

奇クの内容はもっと度ぎつくすべきであると言う主張があることは、初めに述べました。此の奇クをもっと度ぎつくと言う人は、其の心の底に、前記の小林氏の様にはっきり主張するかどうかは別として、奇クはエロ雑誌であるべきと言う観念が潜んで居るのではないかと思います。自己の其の理想像（？）に比べると、どうも現実



の奇クは生ぬるく見えて仕方がない。それで、もっと理想に近付け度い。そこで、もっと度ぎつくと言う苦情が出て来る訳でしょう。今、私達が、A子さんは美しいとか、B子さんの方がもっと美しいとか言う場合、私達の心の奥底には、無意識ではあるがヴィナスがあつて、そのヴィナスに近いもの程美しいと言っている訳でしょう。もし其の尺度がなかったら、基準がないし、従つて比較も出来ないわけです。

それで、奇クに対しても、エロ誌と見て居る人は、もっと度ぎつくとやうし、地道な文献誌と見て居る人は、此の位でまあまあと思つて居るでしょうし、或いは、中には、今でさえ物によつては刺戟が強過ぎる、即ち小説などの中には往々これでもかこれでもかと刺戟を求めて居る様なことに対して、バカ氣たことと感じている人すらある訳です。

それでは、此の表現の基準を何処に置くかと言うことは、これは結局、直接的には前に述べた奇クの基本的性格に照して奇ク当局者

が判断する外ない訳ですが、間接的には読者の意向も反映される。そして、これには小林氏や菅氏の様な意向もあるし、一月号の市川国彦氏の様に此の程度で良しとするもの。同じ一月号の林寿夫氏の様に現在の読者層はピラミッドの八合目の切り口であり、もっと度ぎつくすれば、読者層は九合目の切り口となつて減つて了うだろうとの意見、三月号の東一郎氏の様に「……はあくどくなりすぎて、ヘドが出そう……。どぎつさの限度ということを書き手も考えて欲しいもの……」との意向もある訳です。

これは、どの意見がどうと言うことも憚ること乍ら、此の問題に就て一般的に考えなくてはならないことは、此の世界には、麻薬的要素と言うか、刺戟を強くすればする程限りが無いと言う傾向があることです。それで今、刺戟を強くすれば、当座は満足出来ても、又暫く経つと必らず生ぬるいという不満が出て来る。此のことは目に見える様です。

それで、腹八分目に病なし、満つればかくる、歡樂窮つて哀愁多し、極樂は行きつく迄が極樂等、昔からある色々の言葉も、此の辺のことを戒しめたものに違いありません。

言 論 の 自 由

もっと度ぎつくということに就て、更に切實な問題は、取締りとの関係です。

一体に、此の頃の日本程すべてに自由を享受している国はないと言われます。自由の本家と言われるフランスでさえ、最近では言論出版に対する弾圧がひどく、スイス方面から抗議も出ている位です。此の正月に、正宗白鳥氏と池島信平氏との新聞紙上の対談で、

池島氏が、明治、大正、昭和を通じて今迄どの時代が一番良かったですかと聞いたのに対して、正宗氏は、「今でしょうね。こんな面白い世の中にはないのじゃないか。こんなに言論の自由がある時代——今が一番いいな。いつ迄続くか分らないが……」と答えている。

ところで、御承知の通り、此の頃では正宗氏の危ぶんだ通り、風向きが変って来ました。一連のテロ事件を契機として、言論出版の節度と言うことが喧ましく言われ出して来たことは、池田首相の国会答弁とか小泉信三氏、坂田志保女史等の所論とか一々挙げる迄もなく、御承知の通りです。他方、風俗関係では、これより前から、チャタレー裁判の有罪判決、近くはサドの悪徳の栄えの起訴、更にチャタレー事件の担当検事だった中込氏の様に、刑法の猥せつだけでなく、グロや無慙も取締れる法律をつくることを力説して居る人達も居るのである。（以前は、出版法で風俗壊乱の名の下に、広範に取締りが行われた）

取　締　り

兎に角、段々荒れ模様になって来て居るのです。此の様な時機に行き過ぎをやることは危い。飛んで火に入る夏の虫になり兼ねない。待ち構える人々にとっては「待ってました」と言うことにもなりましょう。美味しそうだと思って、パクツと喰い付くと、中に釣針があつて、身体ごとスーッと持って行かれて了うかも知れないし出口の方がボタンと閉つて了うかも知らない。余程、広く、前後左右に気を配って行動しなくてはいけない時機だと思います。目先だけでは危い。

それから、此の取締りに関連して注意しなくてはならないこと

を付け加えますと、細かな部分で引っ掛かることです。先程から私は雑誌の評価は基本的な性格や傾向によって決まるもので、仮りに個々の作品や部分に行き過ぎがあつても、大勢に影響はないと言う意味のことを申しました。処が、取締りの関係では、個々の作品どころか、その又部分が槍玉に挙げられて了う。チャタレーに、猥せつの箇所が十二カ所あったと言う工合です。其の場合、奇クの基本的性格は真面目な文献誌であるとか、読者はエロ誌とは見ていないとか言う事実は勿論、主張出来るし、有力な弁護資料にもなりましようが、それだけでは決め手にならない。それで、編集当局としてはたから見ると必要以上と思われる程、神経質にならざるを得ないのだろうと想像します。（作品が、文学的には全体の美的価値に重きを置くのに反して、法律家が個々の部分を全体から切り離して法的評価を加える傾向が強いことに就いては、批判もあるところで、一昨年イギリスで制定された猥せつ出版物法は、作品を全体として評価することを命じている。更にもう一つ注目すべき点は、アメリカ



カのウォーレン最高裁長官の意見によると、或る表現が猥せつか否かを決めるのには、其の表現そのものの性質によってだけではなくそれが配布される具体的な状況―少数部数で、煽情的な宣伝もなしに配布されているか否か等の点―と結合させて判断さるべきであるとされていることもありすが、何分、日本では考え方が万事遅れてズレていますから。）

それで、度ぎつく度ぎつくと責められる編集側は、駄々っ子の母親と言うか、或いはチフス患者の附添人の様なもので、食べさせてやり度いが、食べさせると死んで了う。心を鬼にしなければ勤まらない。これを昔風に言えば、忠ならんと欲すれば孝ならず、進退ここに窮まれり―と言う程でもないでしょうが、それに近いところかも知れません。

大変、奇クを弁護した形になってしまいました。それでは私は奇クの現状に首ったけかと聞かれたら、勿論「否」です。不満も注文も山程あります。例えば、読者通信欄其の他に、読者の側から色々の注文や希望が載っている。それ等の中には、殊に写真のアイデアに就ては、現在の奇クの枠内でも実現出来そうなのも可成りあると思われるのに、余り実現を見ていないで、依然として有り来たりの緊縛姿が羅列されている（様に見える）ことなど、従って恐らく希望提出者は相当数、失望しているだろうことなど、其の他、様々。しかし、余り欲張って、一度に弁護したり、注文したりでは、二兎とも逃げられて了うので、注文は又機会があったらと言うだけです。

菅良太氏の苦情

初めに述べた通り、菅氏から、一再ならず何故、自分の原稿を掲

載しないかと言う苦情が奇ク側に寄せられた由。氏の気持は、私にも充分、分ります。これは氏に限らず、誰でも原稿を送るからには掲載を希望するからで、其の為には、時間と労力をかけるし、更に場合により、物によっては、関係の資料を探す為に、古本屋を漁ることも図書館に出掛けることさえあるでしょうし、何れにしても色々と苦心して、それなりに精魂を傾けておられるに相違ない。それが一向に陽の目を見ないとあっては、菅氏ならずとも、がっかりするのは当たり前でしょう。

凡そ、掲載されない原稿には、二種類あると思います。一つは稚拙で掲載レベルに達しないもの。もう一つは、力量的には一応レベルに達しているが、題材とか表現とかからみて、奇クに適さず、枠からハミ出すもの。そして、私が想像するのに、菅氏のは恐らく後者だろうと思います。其の場合、何故、没にするかと奇ク側に申し入れることは勿論自由で、何等、差し支えある筈ありませんが、扱て編集当事者側としては、此の種の申し入れを受けても、当惑すると言うのが実情ではないでしょうか。これが世間一般の雑誌だったら、（特別に雑誌側から依頼した原稿なら別ですが）此の種の申し入れは恐らく初めから黙殺されて了ってテンデ相手にされないでしょうが、兎に角、奇クでは此の種の苦情も活字になって誌上に出ると言うところに、実は奇クの良さがあると思うのです。

結局のところ、編集側としては沢山集った原稿を、夫々の題材と表現とに就て、作品の価値、其の面白さ、奇クの性格、読者の嗜好（その題材が読者の多数に喜ばれるものであるか、或いは極く一握りの嗜好に過ぎないか）スペース、原稿同志の振り合い、それから取締り関係、其の他、色々の角度から比較検討して、それ等の中か



ら奇クに相應しいと認めるものを載せて行く。題材としては載せた
いが、表現の点から其の儘では載せ兼ねるもの、例えば二月号所載
の井上正子氏の「埋もれた日記」の様なものは編集者の注によると
十数回も読み返えし、削除、改訂を加えた上に掲載に踏み切ると言
う程の手数と労力をかけることすら行われる。

それで、私としては、寄稿者は、自分の原稿をポストに入れて了
ったら、あとは、編集者側の見識と判断に一任する外ないものと思
っています。

尤も、先頃の読者通信欄に、誰方かの次の様な苦情が載ったのを
見かけたことがあります。それは、「掲載予定欄」に自分の名が出
ていたので楽しみにしていたが、其の後、一向に出ないので諦めて
いるとありました。

これは恐らく誌面の都合で掲載が延び延びになっているだけのこ
とでしょうが、苟も一度予告あったものに就ては余程の事情でもな
い限り、編集側の責任と信用にかけても、成る可く早く掲載さるべ

きものと信じます。此の様な場合なら、確かに此の苦情の方が尤も
でしょう。

あ　と　が　き

以上、奇クはエロ誌ではないと言うこと、内容を軽々に度ぎつく
出来ないと言うこと、それから、寄稿者等、一部の不満はあっても
題材や表現からみて掲載困難なものもあろうこと等に就いて、聊か
私見を述べました。

思えば終戦この方、沢山の雑誌が現われては消えました。妖奇、
猟奇、風俗草紙、風俗科学、千一夜……あまとりあ、犯罪科学、人間
探究……等々一々名前を挙げ切れな位沢山の雑誌が出ましたが、
其の全部が全部と言ってよい位、うたかたの様に消えてしまいました。
それでは、それ等が皆んな潰れて了った原因は一体、何処にあるの
か。

惟うに、其の中の極く一部のものは、誌面が一握りの専門家の高
踏的な論議の遊び場所になって、一般読者の心と離れて了ったこと
に因りました。そして、他の大多数のものに就ては、度ぎつい描
写と表現で飽くなきエロとグロとを追っ掛けたところに、没落と破
滅の原因があったと言う外はありません。

其の中に在って、何故、独り奇譚クラブだけが、十数年の生命を
保った許りでなく、尚、発展を続けているのか、賢明な読者には、
その解答は自ら明らかなるところでありましょう。

(おわり)

×

×

×

×

奇態体験小説

まんじ



美^ビ
妖^{ヨウ}

正宗五郎

昭和十三年――。

当時、小学三年生だった私は、官吏の父親に伴われ、陥落後間もない中国の主都、南京市内にある瀟洒なベランダのついた煉瓦造りの洋館に移り住んだ。

移ってきた当初一、二カ月の中は、万事につき勝手が分らず家に引籠ってばかりいたが、爽やかな五月の甘い風がアカシヤの白い花を揺する頃になると、その頃まだ一つしかなかった日本人小学校へ洋車^{ヤンヂョ}（人力車）で通学していた私は、学校が終ると官邸のガラスをはめ込んだ高い塀の外へ遊びに出ることも多くなった。

附近には邦人の家も少く遊び友達とてもなかったので、殆ど一人で魚釣、草摘み、ビー玉遊び等して過した。そんな遊びにも飽きてしまうと、家の前の太い門柱にもたれて石畳の上を天秤を担ってやかましい売声を立てて通る物売や、着ぶくれした纏足姿の老婆、市場へ通う驢馬の群、餌を漁る黒い豚、ガアガア鳴きさわぐ放し飼いの鷺鳥や鶏等を、物珍しく眺めるのが常だった。

やがて夏休みになると、待ちかねて一里程先にある飛行場へ蟬取りに出かけた。戸外は焦げつく様な午後の日射だったが、白い登

山帽に半袖半ズボンという軽装の私は、初めての遠出に胸をはずませて小走りに目的地へ向った。蟬の沢山鳴いている合歡木^{カクキ}の並木は適当な日蔭を歩道に落していたが、誠に具合が悪いことには、立入禁止の飛行場の周囲に張りめぐらされた金網の垣の高さが邪魔になつて、竹竿の先につけた袋が蟬のとまってい

る合歡木の小枝まで届かなかった。運動靴を爪先立てて腕一杯に竿を伸してみしたが、どうしても届かないとわかると、私は蟬をとることを断念して空を仰いだ。しみるような蒼い空に白い雲がよぎって、緑の若葉を震わせて燃え立っている合歡木^{カクキ}の朱房がうっとり目に映った。と突然「わはっ、はっ、はあっ」と弾ける様な笑い声が私の背後で起った。車道のアスファルトが溶けて今迄犬の子一匹通らない炎天下の静寂さだったので、私は驚いて顧った。多分、飛行場から出てきたのだろう。カーキ色の防暑服に身を固めた恰幅のよい中年の紳士がその処に立っていた。太いロイド眼鏡越しの目が人なつくく、咽喉仏が見える程の天真爛漫な笑い声に、つつり込まれて私も笑う仕末だった。男はうまく竿を操って私の狙っていた熊蟬を捕えてくれた。こうして私は福田さんを知った。気さ

くは彼は非常に子供好きで、住いは私の家と飛行場との中間にある夾竹桃に包まれた小じんまりとした洋館で、私はそれから、ちよいちよい彼の家へ遊びに行くようになった。

彼は軍関係の請負師で四十過ぎの働き盛りというのに身寄りもなく、ひっそりとした邸の中には中国人の阿媽(女中)が雑事を取りしきっていた。鹿兒島弁の難解な言葉が初めのうちはわかりにくかったが、漸く片言に覚え出した中国語同様に次第にわかってきたしいつも留守勝だった父以上に親しみが持て、誘われるまゝに毎日のように遊びに出かけたものだ。

福田さんは、その名前の示す通り福々しい太鼓腹スタイルで容貌といったら、その頃の漫画本でお馴染の「蛸の八ちゃん」そっくりの丸い頭で酒に酔ったような柔和な顔を常に綻らせていた。きちんと取片付いた部屋の中には遊び道具、絵本一冊あったわけでもないのに、私は夏休みの宿題をすますと足繁く夾竹桃の門を潜って福田さんを訪ねた。

そんな私を喜んで迎えた福田さんは、応接間の床から牛蒡抜きに抱きあげ、私の頬っぺたや鼻の頭になんかヤニ臭い口を押しつけるのが常だった。近所には外人が多かったので

此の様な親愛なキスは子供心にも別に不思議に思わなかったが、一緒にバスに入った時には、しっかりと息の詰まる程胸の中に抱え込まれて驚いた。それでも福田さんのもじゃもじゃした胸毛の方が珍しく指先で摘んできやつきやつとふざけたものだった。

その中、一、二年、経つ中には南京の街にも邦人の移住する者が多くなり、近くに学校友達も出来たので、自然、子供同志で遊ぶようになり、いつの間にか福田邸への足も次第に遠のいてしまった。それでも、正月とか新学期とかには遊びに行つて挨拶したら、御祝を頂いたり映画へ連れて行って貰ったりしたが厳格な父の躰がうるさかったので、夜分、訪ねたりすることはなかった。

それは五年生の時であった。年の暮になると宴会があつて父から帰りが遅くなると云われていたので、灯がともってから何となくつまらなくなつて急に淋しさがこみあげてくると久しぶりに福田さんの明るい笑い声が無性に恋しくなつた。家人には内緒でこっそりと家を出た。凍りついた夜道を小犬のように走って福田邸へ駆け込んだ。せいぜい息を切らしながら勝手知った潜戸を開けて、そっと家の中へ滑り込んだ。いつも取次に出てくる阿

媽の室にも人氣がなく、静まりかえつた廊下が不気味だったが、浴場のガラス戸には灯りが映っていたし、見なれた応接室に入ると温かいシャンデリヤの光に浮かんだ角テーブルの上に空になった老酒の罎や、食後の家鴨の炒肉、油揚げの鯉料理の鉢皿が片付けられて並んでいたのだったから、何の躊躇もなく奥の寢室のノブを引いたのだった。

その時、中を覗いた私の驚き！

思いがけなく眩しい部屋の照明に照らし出されて赤い毛氈の床に乱雑に投げだされている、みかけない黒ビロードの外套。散らかっている緑色の布沓。それよりも、もっと度肝をぬかれたのは鮮明なカーテンを引いた黒檀の豪華な寝台に敷かれた、生けるが如き猛々しい虎の皮の敷物の上に見た、華麗な貴の色絵図だった。

それは二十数星霜を経た今日に於ても、瞼を閉じると鮮やかに目に残り、記憶に甦ってくる異様な光景であった。

ストーブから立ち上るむせかえる暖気に入りまじり、咽喉のいがらくなるような阿片の煙に包まれ、はたと棒立ちになった私の目を射たものは、素晴らしい刺繍で縁を縫取った浅黄色の滑らかな縞子服の上から、白い細引で

三巻、撫肩細腰の華車な体が折れる程きびしく後手に縛り上げられ、後向に床の上にスリッパを履いて仁王立になっている福田さんの折檻を受けて倒れていた、まだうら若い花の様に無残な中国婦人の姿だった。



既に同じ色の紬の庫子（ズボン）を足首迄脱ぎ降され、すんなりと恰好のよい脚がベツドの上をくねくねと動いて、膝迄下げたピンク色の嬌しい絹のパンツから覗いた茹王子を思わす白くてすべすべした二つの丘は、すで

にどれだけ答うたれたものか、赤いみみず服れの線が見え痛々しく血走っていて私は思わず息を呑んだ。

背後の気配に顧った福田さんとは見れば、真赤に充血した顔から湯気が立って、はだけたガウンから胸毛があらわれ、いつものような柔和な振りは跡方もなく、眼鏡の奥からギラギラと光る眼は惨忍で、ふりかぶった毛深い腕には革を編んで作った鞭がかざされ、片手には縄尻の端を握って酒臭い息を荒々しく洩しているのだった。

私はこの凄い福田さんの権幕と爛々と光る双の眼に見据えられると意気地なくも金縛りになって動くことも出来ず、呆っ氣にとられ福田さんの悪鬼のような化身振りを見守っているだけだったが、ベッド上で縄目の体をたおやかに起した人物が意外にも明るい表情で色白の紅い唇から、小鳥の囀る様な若々しい中国語が流れ出るのを聞いた。

「日本、小孩、好々的！」

あとは何と言ったか、私の中国語の知識では判断できなかった。すると、殺気立っていた福田さんの腕から革鞭がポロリと床に落ち、嘘のように和やかな顔つきに戻った。

素早く美しい中国人の縛しめを解いて、手

首の縄目を労わっている案配だった。緑の黒髪を豊かに盛り上げた白い簪が身動きするたびに灯を吸って銀色に光り、抜けるような白さを見せた襟足の美しさ。今迄見た事も聞いた事もない凄艶な中国美人の醸し出す妖しい雰囲気には私はすっかり気を奪われて一言も発せず、それから二人に手を取られて学生服のまま、ベッドの虎の皮の上へ寝かされると、急に怯えたように立ち上ろうとしたが、金の



腕輪をはめた細いしなやかな腕が、私の両腕にからむと、ふんと香料が匂って私の意識が朦朧とするのだった。

切長の黒い瞳が驚く程間近に迫ってまぶしく、私は身動きを止めてじっと目をつむった。私には此の若い中国人が何の為に福田さんかそんな非道い目に合わされているのか、又言うに言えぬ妙な官能的な態度が理解できないのだった。

やがて、パチリと音がしてスイッチが切れ一瞬、真の闇に視覚が奪われたが、私は素早く身を起して手探ぐりで落ちていた帽子を拾うと、今は「さようなら」も言わずに黙ってこの不可解な寝室の扉を押し廊下へ出た。微薫の中に微かな人の気配のする闇に向って無言の訣別を告げると、私は二度と此の恐ろしい福田邸に近寄らなかつた。

しかし、その後もあの晩の奇怪な光景が忘れられなかつた。その折の美小人が果して女だったのか男だったのか、あの晩の幻想的な雰囲気には咲いた紅粧細眉の美妖は、果して何者だろうかという不審は日一日と強くなるばかりだった。

その疑問がやっと氷解したのは、翌春の旧正月に父に連れられて繁華街にある中華大戲院へ馬車^{マイチヨ}で京劇を観に行った時だった。京劇特有のかしましい銅羅や胡弓の賑やかな伴奏に幕が開いて、舞台上に現われた牡丹の精の様に美しい花旦^{ホアタン}(若女形)が即ちこれだったからである。

(第一話終り)

創　作

白　い　山　道

栗

瀬

長

「上り列車と交換のため三分間、停車致します」駅のアナウンスが寒々とした山間の小駅のホームに、けだるいように響く。もうトップリと暮れたホームには殆ど人影もない。何という駅か、私は駅名を確かめる気もしなかった。「間もなく上りが入ってくる。今ホームへ降りて上りに乗れば東京に帰れる。そうだ、帰った方がいい。行くべきではないのだ」私は立ち上った。こんな山の中に今頃降りる奴があるのか、そうした車内の人々の視線を感じながら、静かにデッキに降り立った時、シューッという蒸気の音と共に上り列車が到

着した。駅のアナウンスが忙がしく上下の発車を告げるや、待ち兼ねたように下りは気笛を一きわ高くならし、静かに動き出した。デッキに佇立したまま、矢張り私は黙って上りを見送ったのである。「やはり帰れなかった」駅を離れるや、忽ち入ったトンネルの音に、私は改めてどうすることも出来ない、意志と慾情の複雑な交錯を感じるのであった。元の席に戻る勇氣もなく、私は隣りの車輛に入って窓際に座を占めた。何となく熱っぽい。それは肉体的な熱ではなく、明らかに感情から来るものと分っていたが、私は冷を求めて、

額を窓ガラスに押し当てた。不図、車外を見れば一面の夜の幕の向うに、もう雪をいただいた山であろうか、白くボーツと霞んでいる。ジッと見つめる私には、何時しかそれが、真白い女体に、いやもつとはつきりと、恵子のふっくらと盛り上った乳房に見えてくるのであった。沢であろうか、ガレであろうか、雪の中に一条二条、黒ずんで見えるそれが、何と恵子の乳房にかけられた縄目に思えて、思わず私は眼を閉じ、激しく頭を振るのであった。ああいけない、妄想を去らしめんとすればする程、過去のしびれるような思い出が脳裡を

かすめ、同時にこれから起り得べき事態と混乱して来るのであった。あと一時間もすればM温泉に着く。もう交換になる上りもない。ああ、私は矢張り運命の糸にたぐられるままに、Mに行くのであろう。

今から五年前にさかのぼる。S市の高校を卒業した私は一年の浪人の後、憧れのT大に入学した。高校の時からバレエをやっていた私は入学と同時にバレエ部に勧誘され、さしたる部員も居ないT大では、すぐ正式部員に登録された。夏休み、帰郷した私は、懇願されて隣の町にあるO女子高校のバレエ部をコーチすることとなった。はち切れるような女子高校生十数名に囲まれた時、その健康美から発散する若い乙女達の体臭に、ともすれば圧倒される様であった。そこで、それをはね返すべく私はミスの罰則を考案した。それはシッパ——何とたわいもない罰則であろう。それが何と乙女達を喜ばせた事か。うまくストップしたと言ってはさわぎ、ミスしたといっは私の軽いシッパにキャーキャー騒ぎ廻る彼女達の中に一人、この吉田恵子が居たのだ。彼女だけは、私のシッパに対して、ツンとした態度で応じた。一寸小憎らしい奴と感

じて、次のミスの時には一寸力を入れてみた。ジッと私を見据える眼に、私は困惑を感じつつも、何かほのかな快感を感じた事であった。

次の日、又次の日、ここで私は吉田恵子のミスが次第に多くなる事がはじめて分ったのである。私は意識してシッパに力をこめた。自分の指が痛くなる程に——。力を入れれば

入れる程、恵子の眼に異様な輝きを感じ、又それが私の胸を躍らせるのに気がついた時には、もう恵子が私にとって忘れられない存在となっていたのである。バレエのコーチか、恵子への嗜虐か、毎日が倒錯して行つた。

秋になって、東京へ戻っても、恵子の事が忘れられず、責めてみたい欲望が湧き起ってくるのをどうする事も出来なかった。

秋も深まった頃、田舎の学校では、農繁休暇が一週間程組まれる事がある。丁度、大学でも文化祭等の行事で講義も少いのを幸い、田舎での法事という事にして、私は数日、帰省した。O女子高校の農繁休暇の時を見計らって——。

私は何気ない顔でO高校を訪れたが、農家でない連中は、休暇中も学校へ集ってバレエの練習は続けていた。突然のコーチの出現に彼女等の歓喜する中で、恵子一人、ジッと私

を見つめる眼に異様な輝きを感じ、ああ帰つて来てよかった、いや帰るべきではなかったかとの迷いを感じずには居られなかった。でも練習の合間をみて、そつと恵子を翌日の午後、裏山へのきのこ狩りにさそい出すのに造作はなかった。待っていたものの如くに彼女が応じたのが、私にはかえって物足りない様な気がするのであった。

口さがない田舎の事、でも今は刈り入れに追われて山に入る者も殆どない事を知っている私は、冬にならなければ使われない、炭焼き小屋を待ち合せ場所に指定した。黙って領いた彼女も、一人の男性と、然も人気なき山に入る事は或は躊躇するかも知れない懼れは多分に感じながらも、私はほのかな期待に胸をはずませながら、ひそかにタオルと細引を一本用意して山を登った。

落葉にはまだ間もある此頃、下草は適当に枯れはじめ、誰にも見とがめられる事なく山に入るには絶好であった。約束の時間より一時間も早く炭焼き小屋に到着した私は、早速小屋を点検した。今年の春から放置された小屋はすっかり荒れ果ててはいるものの、茅の囲いも屋根もまだしっかりととして、一寸手を入れれば今年の冬も充分その用に足りるであろ

う。炊飯のあとの燃え木の残りがいかにもわびしい。私は外に立てかけてある茅を二、三束はぐして敷いた。そっと腰を下してみる。なか／＼居心地がよい。ひそかなる悪の楽しみ、そうしたものがゾクツと背筋を走る。

外に出て一服する頃、下の小径を上ってくる赤いネッカチーフ、紺のストラックス姿の吉田恵子の姿を認めて、思わず私は立ち上った。

「おそくなつてすみません。先生、何か御用？」

先生と呼ばれて私は赤くなつた。

「いいや別に。ゆっくり話がしてみたくなただけさ。でも、よく来られたね」

思い出しても冷汗の出るような台詞である。

「そうね、別に何でもないわ。夕方までに帰れば、どうって事ないでしょ」

私の側に腰を下しながら、それでも多分に警戒している事は



きちんと膝の上に手を組んで体を固くしている事でも明瞭に感ぜられる。学生生活、スポーツ、政治社会問題、若い私達に、然も彼女

武

等の懂れる東京の学生生活を営んでいる私にとって、彼女に満足を与え得る話題には事欠かなかったし、智的な彼女から得られる質問解答も、田舎の女高生には稀に見る叡智が感ぜられたのも、県会議員の家庭に育った環境のよさからかも知れない。

次第に打ちとけては来たものの、はじめての語らいに、然も人気なき山の炭焼小屋では一寸道具立てが勝ち過ぎた様に思われて、私はなか／＼切り出す勇気が出ない所へ、誘うかのような彼女の発言であった。

「先生のシッペ痛いわねえ」

「そんなに痛いかい」

「痛いわよ、でも何だか素敵だな」

「じゃ、もっと痛めてもいいかな」

「先生になら、——（一寸間があつてから）」

「もっといじめられてもいいわ」

言葉の終りがだんだん細くなって、うつむいた顔の耳のあたりが、ポツと赤らむのを私は見のがさなかった。

「よし、じゃ少しいじめてやろうか。どうだ中へ入らないか」

「えッ、小屋の中へ？」

「そう、だが誓って言うよ。僕もT大の学生だ、君を傷つけるような破廉恥な真似はしな

い。信じてくれるだろうな」

「ええ、いいわ。でも、一寸こわいな」

先に立って小屋に入る時、破廉恥な真似はせぬと私は口の中で反芻し、同時に勇気が湧いてくるのを感じた。

「僕の命令をきくか。いやだったらいやと言ひ給え。そしたら止める。山を下りよう」

「ききます。でも、何するの？」

先生

「いいから心配しなさんな。君を縛る。いいか、分ったか」

「縛る？ どうして、何で？」

「この細引き」

「まあ、こわい。いやだわ、そんなこと」

「いやなら止める。でも君は今、僕の命令を聞くと云ったろう。前言を取り消すなら今だ。最後の決断を聞きたい。いやならよす。僕も男だ。君に無理強いはいしたくない」

「いいです」

ゴクンと唾を飲み込む音が聞えるようだった。

「よし。手荒な真似はしないから安心し給え。」



ではストラックス、セーター、シュミーズを取り給え」

最初からこの要求は無理と思え、口にしながら私は顔がほてってくるのを、我ながら勢い込んで一息に命ずれば、その勢に恐れをなしたか、黙って、ブラジャーとパンティー一つになる恵子であった。

真白な肉体、もう一人前に成熟した胸の隆起、ヒップの盛り上り、生れてはじめてみる女体に、私はくらくとするとするのを敢えて平静を装うのに、大変な努力を感じたのであった。さすがに花恥づかしき乙女、約束に従うとはいえ、両腕を堅く胸元に押さえ、手は固く握

って口元に、両膝を合せて、少しでも肉体を露出しないように佇む姿は、いじらしいとも何とも形容し得なかった。

「両手を後へ廻して」

もう観念したのか、素直に背中に廻した両手を縛ると、残った細引を胸へ廻し、二つの隆起をX字形に二重に縛り上げた。

「どう、痛くないかい」

「ええ、少し」

消え入るような声ながら、思いなしか、眼がうつとりと物を言っているようであった。

「うつ伏せになって」

足首を縛ると、もうそこには意志の力では如何ともなし難い一個の女体がうつ伏しているのみであった。グッと突き出したヒップ。鞭を待っているとしたか私の眼にはうつらなかつた。私は腰のバンドを抜き取った。

「アッ、先生、何するの？。私をぶつの？」

「そうだ。シッペより少し痛いかも知れない」
言いざま、私は第一の一打ちを軽く尻に当たてた。

「痛いッ」

その声が案外、大きかったのに驚き「びっくりするじゃないか、大きな声を出して。そうそう猿轡をしとこう」

「いや、猿轡なんて。こわいわ」

「命令だ。今度は大きな声を出しても大丈夫」
手早く用意のタオルで口を覆う。潤むような眼が下からジッと私を見上げ、恥づかしさにかすかに腰の辺りがうごめく。その微動に私の血がうずいて、第二の皮バンドが打ち下された。

「ウウツム」

第三のバンド！

「ムムツ、クツ」

彼女の眼から涙が一滴、二滴。ひるんだ私ではあったが、ここで止めては、苦痛のみ残って、と思い、第四、第五の鞭をふり下した。

「クーツ」といった悲鳴に似た叫びが猿轡の下から起ると共に、彼女は放心したように顔を茅にうづめた。若しや失神でもしては、と私は青くなつて紐をほどきにかかった。ジッとされるままになっている彼女の眼は涙にうるんで、燃える様に私を見つめているではないか。ああよかった、私はホッとすると同時に、強く抱きしめたい衝動を、一心に押さえるのが精一杯であった。

「早く洋服を着なさい」

一言いって私は外に出て、煙草に火を点けた。小屋を出て来た彼女の頬は上気して真赤

であった。

「先生」そう言ったきり、彼女は一礼すると黙って静かに山を下りはじめた。

翌日、私は何もなかった様な顔で東京に戻ったものの、生れてはじめての体験は、夜毎毎日、頭から去るものではなかった。以来、休暇の時は勿論、そうでない時でさえ、何か用事にかこつけては帰省のチャンスを探まえて吉田恵子に誘いかけるのであった。或時は思い出の山の炭焼き小屋で、或時は家人の留守をねらって私の家の土蔵の中で、或は山の側道から分け入った雑木林の奥深く、誠に田舎は人目を避けるに恰好な場所は少なくなかった。

こうして私の縛りの嗜好に、彼女も次第に順応してゆくのであろうか、私の誘いを一度として拒む事はなかった。そしてそれは、何時しかほのかな愛情に昇華してゆくのも、亦当然の事であった。猿轡の下、手足を縛られて身動きならぬ彼女の耳元に、或日、私はそっとささやいた。

「僕もあと一年で大学を出る。社会人となつた時には、君と結婚したい。お互に興味を同じくしながら、こんなに人目を忍ぶなんて――

――。ね、結婚したら、お互に自由なんだ。僕達の生活は、きつと素晴らしいものになるよ」

返事をする事に敢えて困惑を感じさせないために、私は猿轡をはずさなかった。彼女は黙って頷くと共に、眼が幸福そうにうるむのを私は見のがさなかった。私は続けた。

「でもその時まで、僕達は清く美しくありたい。僕の考え方は古いかも知れない。でも世の中の飢えた者達の様な行動は取りたくない。勿論、縛りは性衝動の一種と心理学者はいう。否定はしない。でも僕は、縛りに最高の女性美を見出すと同時に、抑圧された男女の心理を、愛すれば愛するだけに赤裸々に表現したに過ぎないと思う。だからといって、今早急に男女の愛情の表現という最後の点に迄進む必要はないと思うし、お互にその人格を尊重すればする程、婚姻という一つの神聖なポイントの時迄、清くありたいと思うんだが。どう、勝手な空念仏かしら、君どう思う？」

彼女の眼が喜びに輝いたかと思うと、うっすらと涙が滲み、あわててそれをぬぐおうとするかのように、緊縛された手を顔の方に動かすのであった。

「駄目、駄目、大人しくするんだよ。僕がふ

いてあげる。ね、こうして——」

私ははじめて、彼女の眼にそっと口付けしたのであった。

私は無事、大学を卒業した。首席には程遠くはあったけれども、まずまずの成績で。そしてT電機に就職、まず平穩無事な社会への門出であった。勿論、彼女も喜んでくれた。女子高校を卒業して、K市なるB短大へ進んだ恵子は、もう一人前の女性に成人し、スポーツに鍛えられた体は、胸と腰にポリウームを加える事によって、人目をひくに充分な体軀であつた。

明後日は新社員として入生の門出の第一歩を踏み出すという日の夜、既にお互の両親の暗黙の了解の出来ている私達。私は彼女を離れる私の部屋に招いた。そして改めて二人の誓いを示すように、きびしい縄目と、はげしいプレイが展開されたのだった。彼女はかすかな呻き声を、それも理性故に懸命に押し殺して私の責めを甘受した。苦痛にゆがむ彼女の美しい顔は、今でも私の網膜に焼きついて離れない。

こうして社会に出た私は、日日接するはち

切れそうな会社の若い女子事務員を見るにつけ、恵子の事が常に思い出されるのであった。桜も散り、若葉も過ぎ、鬱陶しい梅雨が上ると夏である。コンクリートとアスファルトに照り返す夏の東京は誠に住みにくい。学生時代には夏休みは田舎の生活、はじめて過す東京の夏は苦痛以外の何ものでもなかった。でも頻繁なる恵子との文通に、慰められ力づけられて、会社の事務にも馴れ、やっと秋を迎えようとする頃から、ふっとり彼女の便りが途絶えたのである。私からの何度の呼びかけに対しても。

或る日、私は必親展と書かれた部厚い差出人不明の手紙を受取った。言わずと知れた彼女からのものである。今ここにその手紙の全文を披露する余白はない。要約するならば、長らく県会議員の要職にあり、同時に手広く肥料問屋をやっていた父親の死と、それにともなう急激な事業不振、幼い弟妹をかかえて彼女は、某地方財閥の長男に、実家への事業資金援助を条件に、半ば無理やりに婚姻を強いられたのであった。如何にも彼女らしい理性に満ちた筆致の底に、忘れられない縄への愛着を通じて、私へのほのかな慕情の文字を見る時、私は単に愛人を奪われた憤りよりも、

心の通える妻となるべき人を失った悲しみがより強く襲ってくるのであった。取り乱すまいとの彼女の努力が滲んでいる手紙だけに、私も理性的に現実を直視したい、私達はこの嗜好を通じて知り合った美しい交際であつたと、何度も自分に言い聞かせるのであった。

忘れようとして忘れられない、山の炭焼小屋での、土蔵での、彼女の、縄に、鞭にうごめく白い体の美しさ、それが夜毎、日毎、私をさいなむ中、何時しか秋も深まり、東京にも初雪を見る頃となった或る日、私は彼女からの便りを受取った。それは何と驚くべき告白であり誘惑であつた事か。

腫物にさわるように大事にしてくれる夫。しかし縄と鞭に親しんだ者にとって、それが何とあき足らない毎日である事か想像してほしい。今、夫の出張中、経済的に何不自由ないだけに、M温泉のY館に一人で来ている。即刻、来て呉れとの意味の長文の手紙であつた。私は迷った。少くとも人の妻、勿論、私達には人の知らない秘密はあるにせよ、少くとも世人に憚るような動物的行爲は避けるにしている。果してそれは道徳的に許さるべき性質のものであろうか。

行くべきか行かざるべきか、その解答を求めつつ列車は早くもM駅に静かにすべり込んだ。見えざる糸に手繰られるように駅頭に降り立った私。ルビコンの河を渡ったように、大きく冷い冬の山の空気をすい込んだ私はまたハイヤーに歩みよった。

僅かに八カ月見ぬ間に、肩の辺り、腰の辺りにただよえる人妻の香りに、私は我と我が眼を疑った。

「僕も会いたかった。でも随分、迷ったよ。何度、汽車を降りようかと思った。でも君の力の方が強かったね。だが、今夜限りだよ。この性癖はすてなければいけない。僕は少くとも最高の教育を受けてきた。深みにはまってお互に人生を誤るような事をしてはいけない。いい友達だった、いや今後とも美しい友達として交際してゆくために、今夜こそ最後の夜として思い切り君を責めてあげよう。いいかい、分ったね」

武
こうしてY館の離れに、女中達を遠ざけた深夜に私達の記念すべき悦虐の幕は切って落されたのである。

ハッ、ハッという荒い彼女の息づかいが深閑としたこの離れの壁にこだまする。背中に組み合わせて緊縛した両手の縄じりを首から頭に廻すと、頭ががっくりと後に引かれて、うなじの白さが一きわ印象的である。人妻だ、傷つけてはならない。そう思いながらも、久々の責に、



思わず力が入り、尻打ち、抓り、くすぐり、窒息責と、責具がないだけに、新たな方法をとる事は出来ないまでも、可能な範囲のあらゆる方法で責め上げたのである。猿轡の下で苦しそうな呻き、自ら望んだ責ではありながら、連続、断続する痛みを、少しでも避けんとして身を振るその姿は、今でも私の脳裡に焼き付いて離れない。

彼女の最も嫌がる擦り責が、足の裏からはじまって、脇の下、そして脇腹と進むにしたがい、彼女の体が痙攣する様に感じ、あわてて私はいましめを解いたのであった。ぐったりと疲れて、翌朝まで滾々と眠り続ける彼女を見つめながら、私はいいい知れぬ空しさに、一夜まんじりともし得なかった。人妻との一夜。人は何と想像しようが、私達には犯すべからざる一線を劃しているのがせめてもの慰めとはいえ、果してこの行動は罪悪ではないだろうか。何れにせよこれが最後、もう再び会ってはいけない。深みに入ることによって、お互が傷つけられない中に――。

短いような長いような一夜が明けた。彼女の目覚めるような気はいに、私はあわてて熟睡しているようなふりをした。私に気づかれまいと細心の注意をしながら身仕度をととの

えた彼女は、もう今朝は別人のように言葉少い人妻であった。

「一緒に出たらかえって怪しまれますわ。私一足お先に失礼致しますから、玄関迄送って下さいね」

彼女の出たあと、私は独り青畳の上に寝ころんで、窓からみえる山の緑と、空ゆく雲をながめるともなく見つめていた。

もう汽車にのったかもしれない。不図、壁の列車時刻表に目をやると、丁度、下りが殆どない時間、とすれば彼女の乗る列車はあと三十分後であると分った時、私は矢も楯もたまらなくなったのである。もう再び縄を掛ける事もないであろう、その人を一目見送りた、あわただしくハイヤーを命ぜられて訝る女中達を尻目に駅に駆けつけるのであった。ハイヤーが山の九折を殆どブレーキを踏み続けながら、やっと駅前の商店街に差しかけた頃、私は駅構内に入ってくるらしい列車の気笛を聞いた。

「間に合いますよ、旦那、大丈夫。」

のびるようにウィンドを見つめる私の目に今改札口を通過してゆく恵子の後姿が。そして入場券を買うのもどかしく、改札口をとび込んだ時、列車の窓からジッとこちらを見

つめる彼女を発見した。

「来て下さると思って居りました。お別れ致しますわ。長い間いろ／＼有難うございました。忘れよう／＼と忘れることはできませんけど、私が居りましては貴方の将来にも障りますわ。随分、古風ないい方かも知れませんが、忘れるように努力致します。縄のない生活なんてどんなに寂しいか。貴方、いいえ先生がそれさえ偲んで下されば私、本当に満足でございます。先生も、間もなく御結婚でしょう、よい奥様を……あまり虐めないで差し上げて下さいませ。オホホ……」

発車のベルが鳴り終って、彼女の頬には、一条光るものがあつたが、ハンカチを当てようとすでもなく、ジッと私の方を見つめるのであった。

「さようなら、お元気で」

「さようなら。」

一瞬、離別の時の言葉は味気ない。茫然と佇立して去りゆく列車を見送る私の耳に、駅の拡声機は

「上り列車は二十分程延着の見込みでございます」

と興ざめにわめき立てるのであった。

(完)

告

白

女 装 遍 歴

伊 佐 正 幸

私は今よりはるか昔の昭和十二年、東京の大井町から横浜の現在の所に移りました。その頃は、あちらこちらに田や畠があり、私の家の裏にも広い空地があつて雑草が茂っているし、まだ田舎でした。

横浜へ来て、二年目の八月頃と記憶しておりますが、私の家の裏の空地に旅回りの芝居の一座が、かゝりました。舞台だけは丸太で組み、客席は藁を敷き、周囲を古幕や古トタンで囲んだお粗末なものです。楽屋が狭いらしく、この空地にある大工の仕事を借りて

楽屋にしています。楽屋に張った幕も穴があいていたり破れているので、中は丸見えです。これが客寄せの一つで、みんな珍らしいので覗きにゆきます。私も見にゆきました。

股旅ものをやるのか、やくざ姿の男や、女形は、真紅の腰巻一つになって、お化粧の最中です。化粧がすむと、島田のカツラをかぶり、派手な着物を着て、次第に美しい娘に変わっていく有様を、珍らしいので喰入るように見つめていました。

やがて出番らしく、娘は舞台の方へ、草原

を横切ってゆきます。私は、男がどんな風に娘役をやるのか興味が湧いてきて、今度は表から堂々と木戸銭を払って中に入ると、客は相当に入っています。

舞台では、やくざの男が娘を手籠めにしようとして迫っています。娘は必死にもがくうちに、帯は解け裾は乱れて、真赤な蹴出しも露わに逃れるが、つかまってしまい、男は尚も挑みかゝります。娘はそうはさせまいとしますが、力尽き、気を失って、その場へ倒れます。まくれた裾から、なまめかしい赤い腰



巻、その濃艶さに、私は思わずゴク
ンと、唾を呑みこみました。

チョンと析が入って、この一幕は
終わりましたが、女形のなよなよとし
た、身のこなし、自然に滲み出る色
気に、よくも女になりきったものだ
と、驚き且つ感心しました。

翌日も陽が暮れると、太鼓の音が
私の心を駆りたてます。私はソワソ
ワと、落ついていられません。昨
夜、見た腰巻の赤い魅力に惹きつけ
られ、楽屋を覗きにゆき、女形の扮
装がすむまで見届けて、今度は客席
で観劇します。こんなことをして、
一週間の興行中、毎晩、欠かさず観
ました。

私はそれ以来、赤い腰巻の虜とな
ってしまい、道を歩いていても向う
から若い女の人が来ると、顔を見る
よりも先ず裾に眼がゆき、赤い蹴出
しがチラリとでも見えると、胸が躍
るのです。それから、和服の女の
人を見れば、腰巻に眼がつくように
なりました。

通勤の往き帰りに、車内から沿線の家に翻る赤、ピンクの腰巻を眺める楽しみを覚えしました。けれども腰巻への執心は深まるばかりで、他人のものをしているくらいでは我慢しきれなくなり、自分の腰へ巻いてみたくなりましたが、パンツやズロースなら売ってもいいですが、腰巻は売っていいそうにありません。それなら自分で作ろうと、赤い人絹の大巾ものを買ってきて、母に見つからないように、留守をみてはコツコツと幾日もかゝって、やっと縫いあげました。丈も巾も十分に、眼の覚めるような赤い腰巻を、ひろげてみて嬉しくなりました。

母が買物に出た留守に、早速、腰に巻いてみます。誰も見ていないのに、胸がドキドキするやら、恥ずかしいよう気持でした。生れて初めて、腰巻を締めたあの時の気持の良さは、今も忘れられません。

こうして母の留守の、わずかな間の楽しみではもの足らなく、表を歩きたくなって、腰巻を締め白い緋のきものを着ると、腰から下が薄赤く、きものに腰巻の色が透けています。この姿で近所は歩けません。なるべく遠くへゆき、人通りの少い道を歩きます。よそ

の家のガラス戸に写る自分を見ますと、腰から下がはっきりピンク色になっています。

暑い日中を歩き回るので、汗で腰巻が足にからみ、きものは前がはだけて、裾から赤いものがチラチラ出るので、前を合わせながら歩きました。時々、そんな姿で歩いていううちに、東横線が高架になっている下に、理髪店がありました。何回もその店の前を通ったことがあります、いつでも細君らしい女一人しか、頭を刈っていません。この時に、フト思いついたことがありました。

ある時、例のように赤い腰巻に白緋のきものを着て、その店にゆくと、客は誰も居なくて、細君は奥で食事をしていましたが、「顔を剃って下さい」私はそう云って店に入りました。細君は食べかけにして立ち、「どうぞ」と椅子の座布団を裏返えします。私に白布をかけておいて、剃刀を革砥にペタペタやっています。その間に私は、きもの前を少しはだけて、足を動かせば、下の腰巻が見えるようにしました。

石鹸をつけて、細君は剃りはじめました。剃刀の手に注意が集中しているから、私が少しぐらい足を動かしても気がつく筈はない

と、左右の足を徐々にひろげました。もう腰巻がきものから、のぞいていると思ったら、急に恥ずかしく、顔がほてってきました。

剃り終って前を見ますと、思った程腰巻は出ていません。がかりしました。自分ではし相当にきものがずれているものと思いましたが、きまりのわるさが、足を萎縮させたりしいのです。

あのくらいでは、まだ細君、気がついていないようだから、この次はよく見てくれるようにと、一日、間をおいて、又顔剃りに出かけました。今日は店に入る前に、帯をゆるく結び直してから入ります。幸に今日も客は居ません。すぐ椅子にかけて仰向けになります。細君が支度している間に、思切つてきもの前をはだけます。赤い腰巻が丸出しになってしまいました。

今日こそはよく見てくれるだろう、と胸がワクワクします。剃り終って細君が、「お客さん、何かまじないですか」「どうして」ときくと、

「男の方で、赤いお腰なんかしていらっしゃるから」咄嗟の返事に困って、

「え、そうです。ちよっときまりがわるいで

すが「これだけ云うのに、顔から火の出るような思いをしました。

まじないとは、いいことを云ってくれました。これなら一応の理由になります。誰にも見られずに楽しむことから、これ以来、人に見られて楽しむように変わってきました。その後、何回も出かけて、満足しておりました。

母の居た頃は、この程度の楽しみよりできませんでした。昭和二十八年に、母が亡くなってからは、淋しさをまぎらわすこともあって、女装への行脚も積極的になり、洋髪力ツラをはじめ、きもの、帯、下着等、一切の必要なものを揃えました。腰巻は買ったものの、自分で縫ったもの、合わせて数枚、持っております。

休日は朝から女になることにきめております。胸とお尻を大きくするため、ブラジャーに綿をつめ、手製のヒップ・パット、私の、お尻全体を包む細長い布団です。これをあてて、その上を赤い布で押え、下腹のところで痛いくらいに強く結びます。ヒップ・パットを使えば、お尻が大きくなり、形をよくします。それにお尻が温かい。腰巾が広くなつて、きもの前の合わせりが少くなるの

で、歩くと裾が開きやすく、下着がよくチラつくのです。更に、腰巻を三枚締めると、自分のお尻の倍ぐらいの大きさになります。

お化粧、着付、カツラをつけると、すっかり女に変わってしまいます。白粉、口紅の匂いが強く、女になったこと意識させます。

さて女になると、立居振舞がなんとなく女らしくなるのが、自分でも不思議に思えます。立ったり坐ったりする度に、赤い蹴出しがチラつくし、シナをつくって袂を口へあてたり、しどけなく裾を乱して立膝している姿を鏡にうつして、ウットリ夢心地になったりします。赤い腰紐で襷掛け、裾をはしよつて、掃除をしたり食事の支度をするのも、楽しいものです。

もう一人、同好者が居れば、お互に女言葉の会話で、一層、感じが出るのですが、一人ではそれができなくて残念です。

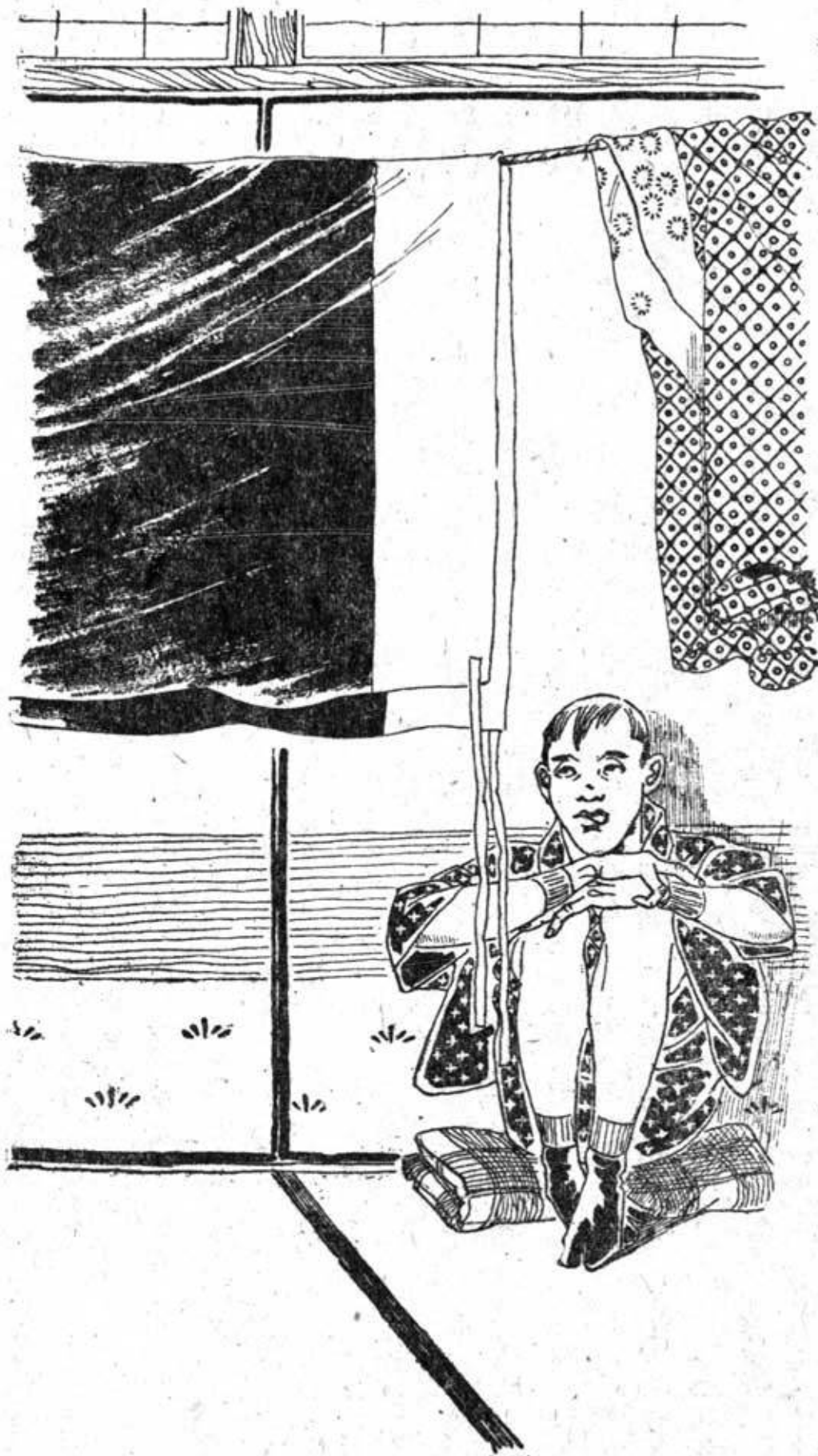
私は冬の来るのが待遠しい。冬こそ女装の楽しみを十分に、味あうことができるからです。寒い夜は、どこの家でも早く戸を閉めてしまふし、無用な外出するものも少いから、女装して外出するには絶好の時期で、寒い北風の強く吹く夜は、私にとって、この上ない楽

しい夜になります。

風呂から帰ると、早速お化粧にかゝります。外出する時だけは、腰巻の他に、和装用スカートをはきます。風で脛が露出するのを防ぐためです。あとはいつものように着付をして、茶羽織、ショールをかけると、美人とまではいかなくても、十人並に近い女になることが出来ます。

もう一度、顔を直してから、細心の注意を払って近所の様子を確かめ表へ出ます。近所の人には絶対に見られたくないからです。なるべく暗い横町を通り、目的の第二国道に出ると、広い道巾だけに風当りも強く、早くも裾がヒラヒラするのです。

国道の右側を風上に向かって歩くと、車と対面交通になります。強い北風が正面から吹きつけるので、きものは太腿のあたりまでまくれ、燃えるような真紅の長襦袢が、下半身を真赤にします。こんな姿を、切れ目なく続く自動車のヘッドライトが、暗闇の中の私を照し出してくれます。私は恥ずかしそうに、きもの前を押さえます。他人にはかくしているように見えますが、その実は、まぐれたきものが、すばまないように押さえているので



す。勿論、自動車の運転手に見られるし、時たま、向うから来る人々も見られますが、女装の、この恥ずかしい姿を見られることが無上の快感で、激しい欲情が湧いてきます。

運転手の中には卑猥なひやかしの声をかけて、走り去ってゆくものもあります。五百メートルも行くと、道はカーブして家もあり、

風当りも弱くなるので、元の地点に引返し、又風上に向って歩きます。こんなことを四回位、反復して、十分に女装の喜びを味わって帰路につくのです。

私が女になって外出するのは、強い北風の吹く夜に限られており、無風の夜は裾が乱れないので、出ないことにしております。帰り

は家の百米程手前から、白いマスクをかけます。万一、知っている人に出会っても、私と気づかれない用心です。

ある夜、こんなことがありました。その夜も寒く、電線が唸る程、強い風が吹いていました。私の好きな国道を、風にきものを、まくらながら歩いていると、前方から来た若いサーリーマン風の男とすれ

違いました。私が二十メートルも歩いた時、背後に靴音が近づいて、私と並んで歩き、肩も触れんばかりに寄添ってくる者があるのです。フト見ると、今すれ違った男です。おかしい男だと思つて、足早に歩くと、その男も速度を合わせてついてくるんです。

この男、なんの目的でついてくるのか、私の赤い裳裾に魅惑されてついてくるんだろうか、それとも、暗い人通りのないところへでもきたら、乱暴するつもりだろうか、判断に迷いましたが、いずれにしても、私を女

と思ひこんでいるようです。そう意識したら、気味わるい中にも嬉しくなつて、複雑な気持ちになりました。

この送り狼、余り有難いお供ではありませんから、どこかでまいてしまおうと、国道から横道へ入りますと、一層暗い。前方から人が来ると、男は私から離れ、通り過ぎると又傍へ寄ってきます。私が怖れたのは、何か話しかけられはしないか、それが一番、心配でした。女の声色までは練習していないから、口をきいたら、忽ち男と看破されてしまいます。これは私にとって辛いことで、女になっている夢が破れます。内心ヒヤヒヤしていましたが、男も案外、気が弱いとみえて、一言も何も云いません。

こうして商店街の一角にきましたが、道は二つに分れていて、一方は明るい商店が並んでいるし、一方はその商店の裏通りで暗い。しかし家数、十五、六軒ばかりゆくと、両方の道は、又一本の道になるのです。私は敢て、明るい方の道をとりました。ところが男はどうしたのか暗い方の道を行くので、こう明るくては目的が果せないで、諦めて帰ったのだらうと思ひながら、二本の道の合流点

へくると、なんと、暗いものの蔭に男が立っているんです。私はギョッとしました。こんなに執念深くついてこられては、少々薄気味わるくなつて、早く姿を隠そうと、路地へ小走りに走りこみました。幸にこの辺の地理は詳しいから、自信がありました。暗いのが天の祐けとばかり、あっちへ曲り、こっちへ曲つて、うまく男をまいてしまいました。後を見ても、誰も来る気配はないので、やっと安心しましたが、帰宅して着換えをしたら、肌襦袢や腰巻が汗でびっしょりでした。

その夜、寝床に入つて、今夜のことを色々と考えてみました。赤い蹴出しの色氣に魅せられたのか、私の美しさに心を惹かれたのだろうか、いやそうではない、自動車の強烈なライトに照らされ、美人に見えたのでしょいか。或はそうかも知れません。

私は、こんな自問自答を試みました。いずれにしても、私の何かに男の心を惹くものがあつたに違いありません。

嬉しさと楽しさが、次から次へ空想を描いてゆきます。今夜も五枚の赤い腰巻と、緋の長襦袢が、やさしく私を抱いて眠らせてくれるのです。そんなことがあつた翌晩に、又妙

な男に会いました。例の如く、強い風に裾を乱されながら、国道を歩いていました。白粉と口紅の匂いが、いい気持ちにしてくれます。時計を見ますと、十時に近いので、帰ろうかと思つた時に、向うから作業服を着た男がやってきます。私はきまりわるそうに、しどけなくまくれたきものの裾を押えて、その男とすれ違おうとした瞬間、男の片手がスツと、私の胸へ延び、「おい、姐ちゃん、つきあつてくれないか」と云いながら通り過ぎてゆきました。この露骨な言葉には驚きました。若しこれが夜更であつたら、私は押倒されていたかも知れません。

私の赤い裾の乱れが、男の劣情を誘つたとも思いますが、男は機会があれば、あのような言動に出るものだろうか。私は女になつてみて、はじめて男の一面が窺えました。

二晩、続けてこんなことがあつてから、私の女装に、若干の自信を得ました。しかし所詮は素人の我流ですから、よい折があれば、女装のベテランに色々指導してもらいたいと、念願しております。

雨の降る夜にも外出することがあります。この時は無風で、雨も強くなく、適当な音を

たてて降っている時が、適しています。風が強いと、きものが濡れてしまふし、歩いている人々も、自分の濡れることが第一に心配で、私の色っぽい姿にも、それ程、気がつかないのです。

きものは濡れてもいいように、一級下のきものにします。長襦袢は着ずに、お腰は勿論赤いのを長目に締めて着付ます。行く所も国道ではなく、住宅と商店が交っている程よい明るさの通りへ行きます。明る過ぎる商店街では、男の欠点を露呈するし、そこまでの自信はありません。

自宅から五、六百米先へ出かけます。暗いところで、きものの裾をからげて、帯締にはさむと、きもの裏の黄色と赤い腰巻が、いい配色になります。今夜は国道と違って相当に明るいし、きものをまくっているの、赤い腰巻が丸出で、こんな恰好で街中を歩くのは初めてですから、気後れがしますが、女なら雨降りに裾をからげても、なんの不思議はないでしょう。

明るい通りへ出ると、さすがに、きまりがわるく、胸がドキドキします。前から来る人や、後から来る人達の視線が、一斉に私に集

中してくるように思われます。中には傘の下から、私の顔をのぞきこんでゆく女もいます。歩いているうちに、雨で次第にお腰がしっとり濡れて、尚更に色が濃くなり、一層誰の眼にもつきやすく、この腰巻を見られる恥ずかしさに、例えようのない快感が背筋を走ります。こうして腰巻の赤さと、感触を心ゆくまで楽しみ、肌寒い夜も少しも苦にはありませんでした。

楽しかった冬も去り、春が訪れ、夏が来ると、もう女装は諦めねばなりません。何故なら悪い条件が重なってくるからです。私は痩せていて怒り肩ですから、茶羽織やショールがなくては、この欠点はかくせません。それに汗かきですから、お化粧も崩れます。隣近所も窓や玄関を開放しているため、外出することは全く不可能です。

夏になれば、赤い腰巻に香水をたっぷり振りかけ、ナイロン単長襦袢に伊達巻を締めます。長襦袢が薄いから、下の腰巻の赤い色が透けて見えます。もう一枚、赤い腰巻を持ってきて、それにも香水を振りかけ、それを口にくわえて眠りにつくのです。欲を云えば、女の体臭の強くしみこんだ腰巻なら、尚いい

のですけれども、これは只今のところ手に入ることはできません。それで香水を代用するわけです。

冬の寝支度は、赤いナイロンの腰巻に、ピンク、赤い花模様、赤ネル、都腰巻の五枚をきっちりとしめ、赤の純毛和装肌着に晒の襦袢、それに袂の長い大柄模様の派手な長襦袢に伊達巻姿で、袂を胸に抱いて眠ります。朝眼がさめると、しどけたく長襦袢がまくれ、真赤な腰巻が丸出しになっているのです。

私は時々、腰巻、長襦袢、きものを室内にかけて、色気のある色彩を楽しんでいます。まず腰巻は室内の周囲に綱を張って、それにかけて。今では色とりどり十三枚もあるので、腰巻の幕のようです。長襦袢ときもので十枚、これをハンガーにかけて、ズラリと並べると、なまめかしいムードが室中に漂います。

勤めから帰って、一步、部屋へ入った時に、これを見るのが好きです。これが自分の部屋かと、一瞬、不思議な錯覚をおこす位です。

私は常々、自分の赤い腰巻を二、三枚、洗濯して、堂々と表のもの干にかけてみたいと思っています。

映画通信

男性緊縛模様



梶 孫 一

もはや数年前になるが、パラマウント映画に「魔術の恋」という作品があった。トニー・カーテス、ジャネットリイ夫妻の主演したもので、二十世紀初頭に一世を風靡した、魔術王フリーディニの半生を描いた伝記映画であった。

ファストシーンで、無名時代のフリーディニに扮するトニーが、ゴリラの縫ぐるみを着て

客寄せ中に、ジャネットが友人と見物に来てトニーが心を奪われてしまう。恐れをなして逃げる彼女を、追おうとして縫ぐるみを脱ぎすてるトニー。純白のパンツ一枚のみの彼が慌てふためいて衣服を探す場面が、僅か数秒の短いカットだったが嬉しいシーンだった。

数年後、次第に名声のあがって来た彼の魔術は、裸形で手枷足枷をはめられて大きな箱

に閉じ込められ、氷結したハドソン河へ投げ込まれたり、上半身を太いロープでグルグル巻きに縛られ、電気鋸で挽き裂かれようとする直前に、鮮かに縄抜けをしてみせるというようなものであった。

中でも印象に残る場面は、黒いパンツ一枚のトニーが、舞台中央で、仰向けに両手足を別々に縛られた上、合図によって徐々に逆吊に引き上げられ、満々と水をたたえたガラス桶の中へ頭から漬けられる。恰ら、水責めの拷問を見る如く、なんとかしてもう一度観たい映画の一つだが、洋画は封切後六年を経過すると、その上映権を失うそうだから、最早再見のチャンスは無いものと思わねばならずまことに残念である。

これは、さほど古いものではないが、イタリアフィルム提供の「ローマの旗の下に」が、忘れ難い好場面を観せてくれた。

ジョージ・マーシャル扮するローマの勇将が、不覚にも敵の手中に捕えられ奴隷として酷使されるのだが、ささいなことから獄卒の憎しみをかい、残酷な懲罰を科せられる。炎熱灼くが如き太陽のもとで、腰布だけでX型の刑架に固定されて身を灼かれる。

激しい息遣い、たくましい胸を縦横に流れ

落ちる玉の汗、失神寸前の苦悶の姿。

獄卒が木椀に水を満たし、彼の唇に近づける。水に飢えた彼が、狂喜して首を伸ばすが椀は意地悪く遠ざかる。与えるが如く近づけては遠ざけ、又、近寄せる。これを幾度か繰り返して焦らし抜いた末、眼前で欲する水を地上に流してしまうのである。この場面はかなりの長時間に亘っていたので、結構楽しめるものであった。

又、コロンビア社の「去年の夏突然に」の中で、ちょっと興味ある場面があった。この映画は男性の同性愛が背景となっている作品で、本誌上でも、昨年紹介されていたので、ストーリーは省略するが、画面中、部屋に掛けられた男性裸像の肖像画が時折り現われる。

初めの内は、あまり気にもせず見流していたのだが、主に脚部しか映らなかったのが、一、二度、肩の辺りまで現われ、それがロープで後手に縛られ、杭に繋がれている像であると分ったとき、緊縛を期待していなかっただけに、その画像の見事さに思わず嘆声を挙げる程の感銘を受けたものだった。

さり気ない手法ながら、そのテーマを活かすための監督の抜け目のない見事な配意に、改めて感嘆させられたものだった。

邦画での人気女優の縛り場

面は後を絶たないが、男性の緊縛拷問映画となると極めて少い。その中で散見したものを拾ってみると、大映の「俺の涙は甘くない」の冒頭シーンで、端役の一人が椅子に縛られ、多数のチンピラに依ってリンチされる場面があった。熱した電球を顔に当てられ苦悶するのだが、時間はかなり長かった。

日活では「闇を裂く口笛」で、純ヒーローの高山一夫が椅子に後手に縛られて、はだけた胸や顔に殴打を受けるシーンが観られた。

総体に邦画の場合は、洋画のそれのようなリアルなものも少いし、迫力の点でも数段の開きがあるように思う。

未見の映画では、大映洋画部配給の「快傑白鷹」に於ける、スチーブ・リーヴスの拷問場面に期待している。かつてのミスター・ユニヴァースの彼リーブスが、あの逞しい体軀



「ローレンの反撃」ジーン・ケリー。ペーター・ローレ。

にどのような責めを受けるか楽しみである。

その他、洋画配給各社が新年度割当てで公開する映画には、娯楽的要素を備えた史劇、スペクタクル映画が過半数を占め、これらコ

スチーム物に、男性の拷問シーンがいくつが含まれているような気がする。中でもMGが輸入する往年の名作「戦艦ボウティン号の叛乱」の、シネスコカラーで、マーロン・ブランド、トレバー・ハワードなどに依って再映画化されたものには、数々の残酷シーン

がどのように再現されるのかと大いに期待している。

同じくメトロに、前記リーブスの主演映画が二本あり、一本は「バグダットの盗賊」でサイレント時代、D・フェアバンクスによって黄金時代を築いた、ご存知、アラビアンナ

イトもの。もう一本は「海賊の王者」で、既に完成している由であるが、何れも鶴首して待つに値するものと思っている。又、松竹セレクトが、陽春に公開するというコーネルワイルドの歴史劇「コンスタンチ大帝」も、ちょっとした拷問シーンがあるそうだ。

話題作を数多く提供している映配に新入荷する仏映画「小さな兵士」も、期待していい一篇である。これは、アルジェリアの内乱を扱った小説「尋問」の

映画化で、小説が発表されるや俄然ベストセラーとなり、その拷問場面描写の凄まじさがクライマックスとなっているものだが、映画でも数々の残酷な拷問シーンがあつて、既に仏本国では上映禁止のニュースが伝えられているほどのものらしいのだが、それ程にリアルな拷問場面に、是非早くお目にかかりたいもの。

新作もさることながら、今は亡き、ルドルフ・パレンチノの主演になる「熱砂の舞」の再映画化ということは、望めないことなのだろうか。あの砂漠の廃墟の中で行われた吊し責めシーンは、永久に忘れられないであろうと思う。サイレント映画でありながら、パレンチノの逞ましい胸に叩きつけられる革鞭の音が、明瞭に聞きとれるように感じられた迫力は、今なお眼前に再現出来得る程に素晴らしく強いものだったのだが……。

緊縛場面ではなかったが、NCC配給映画「サランボー」に於けるジャック・セルナスの、逞しく野性的な男性美は魅力があった。「トロイのヘレン」でも、彼の活躍は輝いていたが、彼のあの精悍なマスクと、隆々たる男性美は、正に歴史物映画には欠かせ得ぬものであろう。



左より
レオ・ゴードン。アラン・ラッド。
ネビル・ブランド。

奇譚三十九夜物語

第六夜

辻村 隆

京の祇園の夜桜が満開と云う、花の便りに誘われて、一行八人——。ドクター氏とナイロン氏の車に分乗して、一気に京阪国道を飛ばしたのでした。夜の空気は爽やかに甘く流れ、月も朧に霞んで、この上もなく情緒を誘う春の宵でした。

一行は円山公園の喧燥を避けて、公園から出外れた土手の一廓に宴を張りました。

世はおしなべて、インスタント全盛時代です。早速、罐詰や、インスタント食品がずらりと出揃って、宴は正にこれよりたけなわとなります。

宵闇に浮ぶぼんぼりが、夜桜と、黒く霞む東山に快よくマッチして、京の情緒はこの上もなく華やかな春宵を飾るのでした。

「零囲気を壊さぬよう、なるべく陰惨なお話はさけていたゞいて、陽気で明るいところで行きましょうや——」

ステッキ氏は誰にともなくそう云って、一同を見渡したのです。

「三十九夜にふさわしい、明るい話となるとこれは一寸むづかしいですな。じゃあ私がひとつ皮切りに、夜桜の気分をこわさぬ程度の、軽いお話でもするとしましょうか——」

ナイロン氏は盃をおくと、ピースに火をつけて、さてと改まりました。

第十五話 緊縛泥棒

喜多君が、ひそかに「奇ク」を愛読し出してから、最早、二年経

っていた。別冊を含めて三十冊に近い雑誌を、細君の佳也子さんの眼に触れぬよう保管することは、そろ／＼難しくなってきた。

結婚して四年——、二人の間には残念乍ら、未だ合作品に恵まれていない。平凡な見合結婚で、一眼見てすっかり気に入って貰った佳也子さんではあるが、何しろ深窓育ちのお嬢さんであるだけに、端麗でノーマルに出来ている。だから夫婦生活だって規格品のジスマークの如く、優良ではあるが兎角、面白味に欠ける嫌いがある。顔と顔をつき合して、四年経つと、流石に惚れた女房でも少々は鼻にもつこうと云うものだ。

フト店頭で見た「奇ク」が、喜多君にとっては、生涯で初めてのショッキングを彼に与えた。

もと／＼品行方正、真面目な喜多君のことである。誰かを縛っては見たいと思っても、急にそうは問屋が卸さない。不可能となると尚更やむにやまれず、喜多君は最近、明け暮れ、誰か一度でいいから縛って見たいと、脳中を去来するのはその想いだけである。

不可能を可能にするには、唯一つ、彼のよき配偶である佳也子さんより外に、兎も角も道はない。喜多君は、絹川文代や大塚啓子の緊縛シーンを、佳也子さんにダブラせては、やるせない心の思いを僅かにいやしていた。

何とか不自然でなく、佳也子に緊縛の夢を満たす方法はないものだろうか——。

急にそんな話を持出せば、ジスマークの彼女の事だから、卒倒もしかねないだろう。いや悪く行けば、離婚騒ぎになるかも知れない——。

喜多君はベッドの中でも、絶えずそんなことに思いを走らせてい

るから、佳也子さんの、ごく遠慮勝ちな、愛撫の要請にも、心はまるで上の空で、到って形式的にならざるを得ない。慾求不満を云う術も知らず、佳也子さんは、そんな彼の仕打ちに、訳も分らず、淋しいやるせない思いをする夜も尠なくない。

或る夜、テレビを見ていた喜多君は、天の啓示の如く、一瞬テレビの画面からある大胆なことを思いついた。

——よしッ、佳也子を縛るにはこれより手段はない。これでゆこう——。

喜多君は翌日、出勤の出掛けに、今夜は少し遅くなるかも知れないと、佳也子さんに伝えた。

「さあ、十二時を廻るかも知れんから、戸締りはよくしておくんだよ」

「何かありますの？……」

「いや、もうすぐ決算だね。大分、整理しなきゃいけない仕事が残っているから残業さ——」

心中の計画とはうらはらに、さり気なく云って、喜多君は佳也子さんに送られて外へ出た。

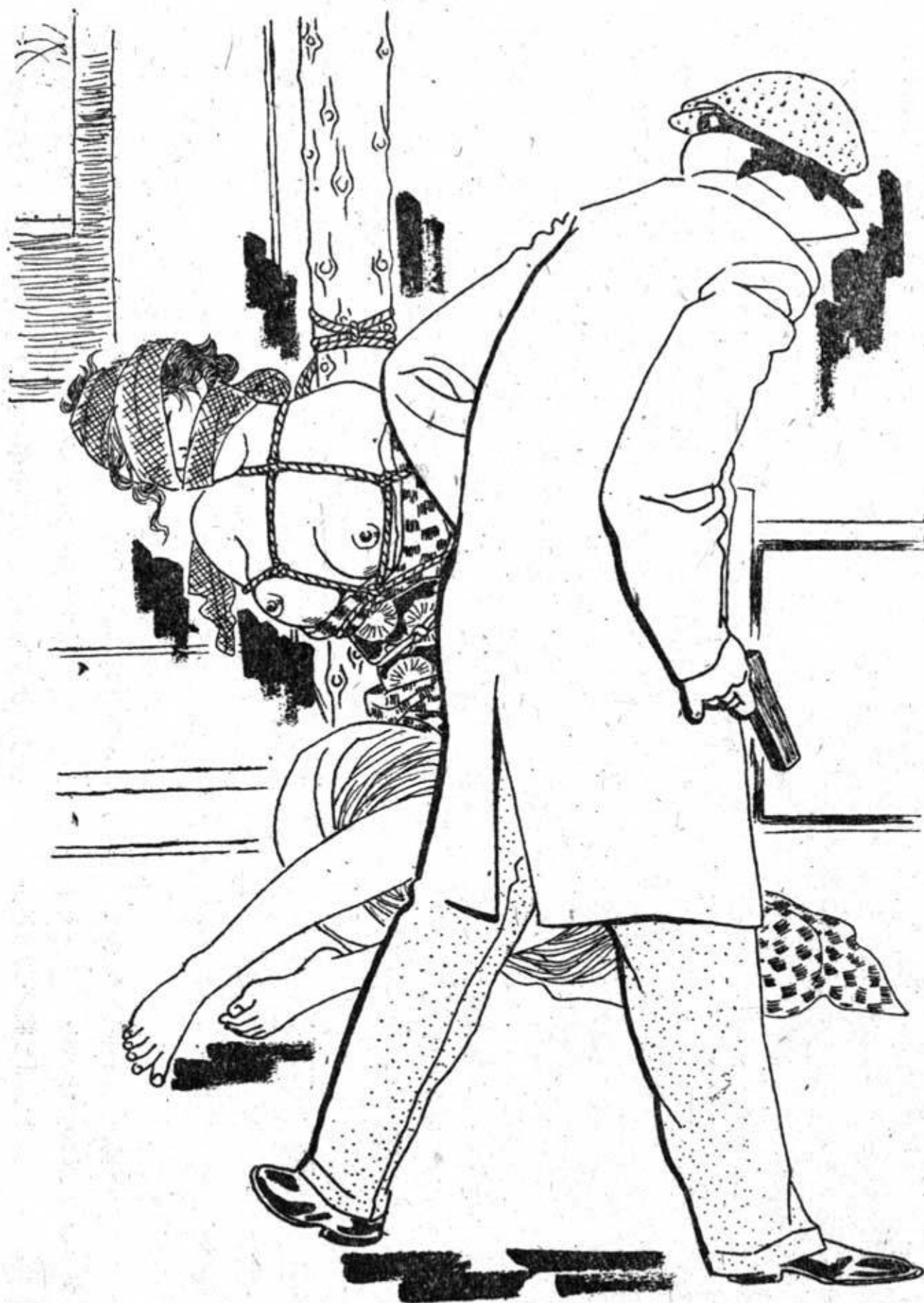
彼は今夜、我が家に、強盗に扮して入るつもりだった。そこで、恐怖に打震える佳也子さんを心行くまで縛るつもりでいた。

会社を退けると、喜多君は安物のハンチングと黒っぱいハンカチ、それに玩具のピストルを買い求め、ついで縛る縄まで御丁寧に買い込んだ。

彼の住んでいる近鉄沿線のT住宅地は、夜ともなると随分、淋しくなる。最近、駅前ショッピングセンターや、少しの店舗は出来たものの、まだ／＼彼の住む住宅地だけは、十時過ぎともなると、帰

宅する人以外、人っ子ひとり通らなかつた。

午後十時、喜多君はなるべく人眼を避ける様にして、駅前から住宅地へ続く、でこぼこ道路を、音も立てず忍び歩いてゐた。辺りを見廻すと幸い人影はない。彼は自宅の植込みの蔭にそつと鞆をおく



と、夕刻、準備したものを取り出して、素早く服装をかえた。背広の上から羽織ったスプリングコートは、会社に忘れた儘になっていたB君のものを一時、拝借してきたものである。

ハンチングを眼深にかぶり、黒いハンカチで大きく覆面して、スプリングコートのえりを立てると、彼の本来の善良な様相はすっかり一変した。どこから見ても、立派なテレビのギャングもどきの格好であつた。

鞆を植込みに押し込むと、喜多君は勝手した我が家へと忍び込んだのである。

流石に玄関はしっかりと閉つてゐた。彼はニヤリと笑うと、今夜の仕事の為、出勤の出掛けに、あらかじめそつとねじ締めを外しておいた便所の小窓をあけた。体一杯やつと通れる程の小窓であるが、どうやら頭からうまく忍び込むことが出来た。靴の儘なので、タタミや廊下や布団の汚れ

る事が気になったが、まさかわざ／＼靴をぬいで入る泥棒もないので、喜多君は思い切ってその儘、押し込むことにした。

廊下伝いに茶の間へ来るとテレビが鳴っている。——まだ起きているらしいな……囁かし驚くだろうな。驚きすぎて卒倒をされても困るが、彼女にとっては生れて初めての恐怖だろう。少し罪な話かな……。

喜多君はフト軽い罪の自我意識を感じたが、佳也子さんを縛れると云う悦びの方が勝って、その意識を無理矢理に打ち消していた。胸はドキ／＼と波打ち出した。我が家に居り乍ら、これは又何と云う激しい刺激だろう——。

喜多君は静かに襖を二センチ程開いた。テレビの前に行儀よく座って、佳也子さんは軽い睡魔に襲われたのか、首を垂れてコクリコクリしていた。画面には、寛美が阿呆になって、しきりに駄弁っているのが写っている。

今宵に限って、佳也子さんのいつも見馴れた白いうなじが何と新鮮に見えたことか——。

喜多君は、得体の知れないたかぶりにブル／＼と我知らず身震いすると、いつしか己れ自身、すっかり強盗のような気になっていることに気付いた。

——余り、急に驚かしても困る。それに声を立てられると、これもコトだ。静かにやわらかく、そして適当に怖がるようにやらにゃいかん……。

自分に云い聞かして、喜多君は忍び足で近附いた。ミシ／＼と忍ぶ足音に、フト佳也子さんは正気ずいた。

「呀——」と叫ぼうとした時、いち早く、喜多君の手が、佳也子

さんの唇を塞いでいた。

「シ——ッ、声を立てるな。立てるとこれだぞ」

喜多君は夢中で、用意したピストルを佳也子さんの胸に凝していた。

真青に蒼ざめ、ブル／＼身を震わせて、彼女は恐怖に眼を一杯に見開いた。

「静かに向こうを向くんだ。両手を後に廻せ——」

喜多君は生れて初めて覚えるような胸の荒立ちに震えながら佳也子さんを後手に縛った。

取敢えず、両手を縛っておくと、彼はハンガーに着物と一緒に掛っている黒帯をとり、ぐる／＼巻きに鼻だけを出して眼隠しと一緒に猿轡をした。

佳也子さんの気の動揺している間に、眼隠し、猿轡をしてしまわないと、ばれる恐れありと見たからである。

さて、そこで、彼はゆっくり時間をかけて首縄をかけ、菱形にしっかりと上半身を縛り上げたのである。

観念した様に、佳也子さんは、されるが儘になっていた。端麗、白磁のノーブルな佳也子さんの、無残にも縛られて上半身を打伏して倒れた姿は、いつも見なれた女房である筈なのに、ドキリとする程の美しさと妖艶さを辺りに漂わせていた。喜多君はゴクリと唾をのみ込むと、そっと着物の胸を押し上げ始めた。予期していたように彼女は身をよじって激しく抵抗した。

豊かな息ずきを見せて乳房が覗いた時、喜多君は更に改めて、我が女房の、自然の造形物に、はれ／＼とした耽美の眼を向けた。

更に、喜多君が彼女の腰に手をかけた時、佳也子さんは前にもま

して激しく体をよじらせた。膝まで着物がまくれ上って、白い太腿がちら／＼と煽情的に右に左に揺れ動いた。ウウウ……と声にならぬ呻き声を挙げて、佳也子さんの縛られた両手の十指がしっかりと握りしめられていた。

両脚を揃えて縛り、床柱の前まで曳きずって行くと後手に縛った儘で、しっかりと床柱に括りつけ終って、喜多君はほっとしたように、改めて、まじ／＼と落花狼藉の佳也子さんの姿に、うっとりとして見とれていた。

ぐったりと力なくうなだれて、佳也子さんは肌もあらわに打ちくだかれた様に、この突然の恐怖に、おの／＼き乍ら身をかすかによじらせていた。

喜多君の眼は彼女を凝視し乍ら、それでも泥棒の本分を忘れぬ様に、タンスや抽出しをガタ／＼と開いて、差支えない程度に散らばらしていた。

——これからが一人二役のむづかしい処だて——

喜多君は心に云い聞かせて、そっと足音をしのばせると玄関に降り立って、内側からドン／＼と叩いた。

「佳也子——佳也子、今帰ったよ——」

それから、再び彼は素早く足音を忍ばせ、茶の間にとって帰して、慌てた様に、ガラ／＼と物音をたて、

「失敗った！」と舌打ちを、わざと聞こえるように立て、どき／＼と部屋を足早に出た。

再び玄関に引返し扉を内側から開くと、サッと表に飛出し、植込みの鞆にコート、ハンチング、マスク、ピストルを押し込んで、何喰わぬ顔で、

「佳也子——佳也子——」
と呼んで見た。

「どうしたんだろ、仕様がないな——」

大声で独り言を云って、鍵束をガチャつかせ、扉の立てしめを大きくし乍ら靴を脱いで、喜多君は疲れた素振りです間を上った。

「呀ッ、どうしたんだ、佳也子——」

さも驚いたような声とは逆に、にや／＼し乍ら、喜多君は彼女に近寄った。

黒帯をとくと、佳也子さんは泣き出しそうな声で、

「貴方——大変よッ。ど、どろ棒が入ったの——私、縛られちゃって、どうにも出来なかったの。早速、一一〇番に知らせましょう」

「ち、ちょっと待ってくれ。とられたものは？」

「それが全然、眼隠しされていたから分らないの——。でもタンスも抽出しもこの通りだし——。何か物色している最中、貴方の声が聞えたのよ——。本当に私ホッとしたわ——。でも、そんなにじろ／＼見ないで、早くこの縄をといて頂戴——」

「随分、着物が乱れているね。物を盗られるより、君の体の方が心配だよ。何もされなかった？」

喜多君は、さも心配そうに憂色を顔にたゞよわせて、一世一代の大芝居であった。

縄を解かれた途端に佳也子さんは、顔を蔽って、ワッと泣き出したのである。案に相違したので慌てたのは喜多君である。

「ど、どうしたの——若しや……」

「貴方、許して……。私どうも出来なかったの、許して……」

「じゃあ強盗に汚されたとしても云うの——」

「許して——。仕方なかったの。あゝ私、いつそのこと、舌を噛み切って死んでしまえばよかったわ。あんなはづかしめに遭うくらいなら——」

「泥棒がお前を凌辱したと云うんだね——」

どうしたことだ。顔を手で蔽った儘、佳也子さんはコクリとうなづいたではないか。

喜多君は啞然、呆然、急に何が何だか、さっぱり分らなくなってきた——。

—— × —— × ——
「と云うお話ですがね。さあこの始末は一体どうなったのでしょうかね」

話を置いて、ナイロン氏は盃をとり上げると、ニヤ／＼として一同を見廻わしました。

何とも腑におちかねて、ガヤ／＼ワイ／＼と誰からともなく、お喋べりは波紋の様に輪を描いて拡がって行きました。まさにスリラーものとも云うべき未完のお話に、興味は深々として、一同は更にナイロン氏にその続きをせがんだのです。

「残念乍ら、私の持時間はこれ迄として、続きは佳也子さんとは縁の深い、ステッキ氏に話を引継いで貰うとしましょう」

バトンを渡されたステッキ氏は、盃をぐつとあけ終ると、こう云ったのです。

「ナイロン氏のお話は、喜多君の立場からなのです。私はその裏と云うと、如何にもお伽話めきますが、春の宵の情緒を汚さぬよう。ほゞ／＼に佳也子さんの立場になって、お話を始めたいと思うのです。どうですか、この趣向は——」

「賛成——、連作シリーズときましたね。こいつは面白い——」と誰か／＼叫びました。

快よい微風に、ほてった頬をなぶらせて、柔かく、なめらかにステッキ氏の舌は廻転を始めました。

十六話 緊縛版「世にも不思議な物語」

喜多君を送り出した後、佳也子さんは部屋へ戻って掃除を始めた。彼の机の上を片附けた時、彼女はフト奇妙なことに氣附いた。毎月、本屋が届ける日本文学全集が、十冊近くも、机の上に堆積しているのである。だが、横の本棚に眼をやると、それらの本のカバーケースが、きっちりと、整然として麗々しく棚に並んでいるではないか——。

——どうしてケースに本を蔵わないのかしら、ほこりがかかるのに……。

何気なくカバーケースを抜き出すと、ケースからバサリと落ちた本がある。不審げに取り上げて見ると「奇譚クラブ」と彩色された表紙が眼に入った。パラ／＼と開いてみて、佳也子さんはパツと本を閉じると、頬を真赤にして、あわてたようにひとりっ切りの部屋を見廻した。

——あの人、こんな雑誌を読んでいるなんてちっとも知らなかったわ。品行方正の堅い／＼で通っているある人が——。真面目すぎて、まるで規格品のジスマーク見たいな人が……。

そう云えば、帰ってから奥座敷のこの机に向っては、研究とか、仕事だとか云って、夜遅くまで机に嚙りついていたのは、この雑誌を読みたい為だったのか——。私が、

「貴方、もうお休みにならない？」

と、それとなく言外に想いをこめて甘えても、ろく／＼返事もしなかったわ。

佳也子さんは、今は掃除どころではなかった。空ケースをとり出して見ると、出るわ／＼三十数冊もの「奇ク」が一号の欠如もなく、全部揃って、そのどれもが、緊縛モデルのグラビアと、責めの絵に終始し、内容の挿画のどれ一つを見ても、緊縛の姿態が描かれてあった。

深窓育ちの佳也子さんにとって、そのどれ一つをとり上げて見ても、未知の奇異な世界だった。

夫を送り出している気楽さから、佳也子さんは、最早、座敷の掃除どころではなく、数冊の「奇ク」を茶の間に運んで、尻を据えて、ゆっくりと号を追って読み始めたのである。

おヒルのサイレンも上の空——、御用聞きの声もうるさげに、佳也子さんは読み耽った。

彼女の頬は上気し、瞼はシットリとうるんで、彼女自身、陶醉と昂奮の中に身を置いていた。ジーンとそれは心の琴線に触れる、未知の物語り許りであった。

彼女は、サジズムが何であるかをしり、マソヒズムの実態も心に留めた。そして何が／＼のか、浣腸、切腹、女斗美、女装、ふんどし責め、拷問を始め、フェチシズムから覗きに到る一連の奇異の風俗に、何とはなしに心の弾みと、ときめきを覚えるのであった。

種々雑多な読者通信の願望のそれぞれに、佳也子さんは、世にも不思議な世界のあることを知り、又、世の中に、そうした人々の数多い事も感じとった。

毎朝、夫を送り出した後、ひそかに耽読するのが佳也子さんの日課になった。

——あの人が、この様に私を責めさいなんたら、私はどうするだろう。きっと泣いて飲んで、私は夫のするが儘に、奴隷ともなり、鞭打ちをうけて、快よい痛みに、愉しい刺激の多い日々を過せるに違いないだろう。もう結婚して四年も経つのに、あの人ときたら、まるでぬるま湯に浸ってでもいる様に、味もそつ気もないわ。私しが、それとなく囁やきかけても、あの人は碌すっぱ返事もしないで、何を考えているのか上の空だわ。私のこの狂いそうな気もしらないで——。一体、何の為にこんな本を読んでいるのだろう。私から、縛ってくれ、責めてくれと云うのを待つつもりなのかしら。男はイニシヤチタイプを握っているのだから、当然、口をきるべきなのに……。私、隠れてこれを読んだなんてこと云えっこないのに、本当にじれったい人……。——

佳也子さんの、この切なる、秘かな想いも、喜多君には一向通じないのか、善良な夫は、キチンと出勤し、夜は早く帰り、時偶、机に向って研究と称して夜を更かし、佳也子さんが遠慮勝ちにそれと持ちかけても、いとも淡泊に受けて流し、触れなば落ちん佳也子さんの心も知らず薩張り掴みどころがなかった。

夫婦はその夜もテレビを漫然と見ていた。女房の心を試す為に、亭主が強盗に紛して、我が家に忍び込む、アチャラカ喜劇である。急に夫はそわ／＼とし出した。暫らく考え込んでいた彼に、彼女はフト不審を抱いた。

「佳也子、今日は仕事で一寸遅くなるんだ」
と出勤を前にして唐突にきり出した夫の言葉に、

「えッ?」とき、返すと、

「さあ、十二時を廻るかも知れんから、戸締りはよくしておくんだよ」

「何かありますの?……」

「いや、決算でね。大分、仕事溜っているから残業さ——」

さり気なさそうな言葉にも、何か落着きがなくて、彼の動作にそわ／＼した嘘が感じられた。

「そう——」

直感的に佳也子の頭に、昨夜のテレビの喜劇があり／＼と蘇がえった。

——この人、何か企らんでるじゃないかしら……。と、すると、面白いことになるかも知れないわ……。

「あっ、貴方、何だが汗臭いわ。一寸、待ってね——」

佳也子は深い考えもなかったが、夫の匂いを嗅ぎとろうと、彼女が外出に愛用する、キャラのフランス香水をさっとスプレーで吹きかけた。



——きっと、そうだわ。何か今夜ありそうだわ。珍らしくあの人、眼をキラ／＼光らせて、何かを思いつめている様だったわ——。

さまざまな想像が、佳也子の胸に渦を巻いた。彼女は夕食を早目にすませると、風呂へ行き、身体の間々まで丹念に洗った。

三面鏡を上げ、白い柔かい己れの肌に、香り高いローションをすり込み、可愛い乳首に、僅かながら紅をさして、紅味を添えた。肌着を換えて、茶の間に座って見たが、心が落着かない。

奇妙な期待と、あてのない不安と、焦燥がキリ／＼と佳也子の心をしめつけた。

所在なく彼女はテレビに向った。いつしか、それに心を奪われるうち、刻は経っていた。時計が十時を打つと、もう折角の佳也子の弾んだ期待は、半ばあきらめと落胆に代っていた。

——矢ッ張り、用事で遅くなるのかしら。本当に味気ない人だと……。

そう思った時、コトリと廊下の方でかすかな物音がして、それが、聴てこちらへ近附いてくる気配した。

急に彼女の胸は早鐘を打ち出した。テレビの音に消されてはいるが、確かに気配が茶の間の襖を隔てて感じられる。

泥棒？　そうは思ったが……まさかと打消した。玄関は云われた通り、充分に錠を落してある。

——どうして這入り込んだのだろう——。

早く顔を見て、一挙にアヴァンチュールな雰囲気飛び込みたくて、佳也子はじり／＼した。

襖が静かに開く気配だ。

佳也子は素早く眼を閉じて眠った振りをした。これが一番自然な姿だと、咄嗟に気附いたからである。

ヌーッ、傍らに人の気配を感じて、反射的に彼女は眼を開いて、「呀っ！」と声を立てようとして、突然、口を男の手で塞がれた。

彼女は男の顔が、夫であるかを確かめようと凝視した。

「静かに向こうを向くんだ。両手を後に廻せ——」押し殺した声であったが、聞き覚えがあった。廻した両手を縄が犇々としめていた。

スーッと、キャラの香水の匂いが鼻腔をついた。

——矢ッ張り、うちの人なんだわ……——。

男に背をむけた儘、佳也子は声を殺して笑った——。

遂に期待違わず、夫はこんな術を用いて、私を縛ったのだわ。ジーンと手首から腕を通して感じる緊縛の痛みが、快よく彼女の胸に泌み渡った。彼女が待ちに待った日は、こんな形であらわれてきたのだ。

——夫がどうするか、じっくり観察してやろう——。

佳也子は、きゅっと歯を喰い縛った。ともすれば浮かぶ笑いをこらえる為である。

夫は顔を見られるとまづいと思ったのか、黒帯で、彼女の顔を包み、口を塞いだ。

——あゝ、よかった。これで笑っても、夫に顔を見られないし、飲こんでもきゅと聞こえないわ——。

彼女は、首縄をかけ、菱形に考え／＼縛って行く夫を、微笑ましく思った。きゅと「奇ク」の緊縛の数々を臉に描いているのだろう。時々、夫の手が止まっては、見惚れている様だった。皮膚に喰い入る縄目が、彼女にとって、懂がれの快感として、愉悦にうっとり身をまかせきっていた。この場合の顔の覆面は何よりも心を安楽にした。

夫を確認さす様に、時々、遠く近く、キャラの匂いが流れて、黒帯から出た形のよい鼻腔をくすぐった。

夫の手が胸に伸びた。瞬間ハツとしたが、それは羞恥の連鎖反応だった。彼女はわざと焦らす様に抵抗を試みて、夫の芝居にいつしか同調していた。

——やはり、お乳に化粧しておいてよかったわ。夫はきつと眼を瞞って、認識を新たにすることに違いないわ——。

冷めたい風が肌を撫で、彼女は胸許を押し拡げられて、夫の眼に曝されている事を意識した。

そつと、夫は彼女の腰に手を廻した。

——こゝで、うんと抗らうてやらなきゃ、意味がないわ。抗らえば抗らう程、夫はきつと悦ぶに違いないんだから——。

彼女も亦、この風変りな芝居の雰囲気没入して、激しい抵抗を見せた。愉悦の呻きが洩れたが、猿轡がそれを都合よく邪魔していた。足許が乱れた気配だ。夫は両脚を揃えて縛ると、彼女の体を床柱まで引曳っていった。

柱にぐるぐると巻きに縛られ乍ら、彼女は最後の出来事を予想して、心は疼いていた。

結婚以来、初めてと云ってもよい陶醉に、彼女はすっかりその氣になっていた。

夫が、タンスや抽出しをあげる音に、彼女はチラリ不安がかすめたが、泥棒らしく見せる行為の一端と考え、それよりも、早く夫の仮面を脱ぐときを今か〜と待ちあぐねていた——にもかゝわらず、事情は一変して、玄関で佳也子〜と呼ぶ夫の声——。

続いて又、玄関から引返してくる夫の気配、そしてガタ〜音を立て、玄関に出た気配——。再び本ものの夫、登場。

——何だって、こんな所で止すのかしら。人の氣も知らないで……

……

無我の境地から醒めると、佳也子は心から腹立たしさを感じた。間拔けな夫に、何か痛烈な復讐をしてやりたかった。

キャラの匂いを漂わせて、夫はいそ〜と彼女の縄をといた。

——一〇番に電話すると云ったら、どんな顔するかしら？ かし、これは一寸うるさくなるし、何とか怖かった様に話しておこう。それより、もっと痛快な思いをさせる方法はないものかしら……

「……何もされなかった？」

と夫は芝居っ気たっぷりに彼女に訊ねた。

瞬間、彼女の心にフト悪戯心が湧き上った。彼女は笑う代りに、わつと泣き伏すと、

「貴方、許して……。私どうにも出来なかったの、許して……」と空涙を流して慟哭した。

慌てた夫の気配が手にとる様に感じられて、彼女は心で舌を出していた。

夫はくど〜と聞き、彼女は更に大熱演して見せた。

「泥棒はお前を凌辱したと云うんだね——」

夫の声はブル〜震えていた。

佳也子は笑いたくなる氣持を、ぐつとこらえた。ものを云うとばれそうだったので、黙ってコクリとうなづいた。

呆然と立ちすくむ夫は、物の怪に憑かれた様にポカンと口をあけていた。

——僕が泥棒だったんだ。そんな莫迦な話はないよ。お前が縛りたくってね。と、そう云えばいゝのに、莫迦な人——でも、どうす

るか、黙って見ていることにしよう。まるで、狐と狸のバカシ合い見たいだわ——。

彼女は土壇場にスラ／＼と口をついて出た嘘が、どんな効果をもたらずか、それに興味をつないでいた。いっぺんきりの緊縛では、彼女の潜在的のマゾ性が承知しなかったのかも知れない。

—— × ——— × ———

「と云うわけです。さて、どなたか、これに面白い解釈をつけて下さる方があったら、春の宵は益々楽しいものになるでしょう」

ステッキ氏は、話に余韻を残して、こゝで打切ったのです。夫は妻の心を知らず、妻、又、夫を理解せずで、えてして、相けんせいし合って、しっくりゆかない御夫婦が世の中には多いものです。春の微風に、桜の花片が盃にこぼれて、人影も流石にまばらになって来ました。

聽て衆議一決、スバル氏が即興的にこの話に片棒かつぐことに決まりました。

「さあ、うまく、納まるか、どうか——。私は、この御夫婦が、かくあれかしと願望する気持で、話はこう持って行きたいのです」
あちこちからつがれた盃を、片端しから呑み乾して、散る花片の一ひら二ひらを髪に留めて、スバル氏は思案が纏まったのか、徐ろにこう云って話し始めました。

第十七話 夫婦が階段をのぼるとき

——佳也子が凌辱されていないことは、この僕が一番よく知っている。何故なれば、僕がその泥棒に外ならないからだ。それなのに、佳也子はどうして凌辱されたなどと偽りを云うのだろうか。僕を驚

かす為か？。それなれば誠に都合のよい事だ。僕はそれを理由にして、彼女を緊縛出来るではないか——。

喜多君は、混乱した頭脳の中から、自分に都合のよい結論を引っ張り出した。

——私が凌辱されていない事は、あの人が一番知っている筈だわ。だけど気の弱いあの人はそれを恐らく云い出し得ないだろう。私はあの人が泥棒であった事を白状するまで、凌辱された事にして、あの人が責められればいゝのだわ。狐と狸のばかし合いみたいで、莫迦／＼しいけど、それが緊縛のプレイへの近道かも知れないわ——。

佳也子さんは空涙を流すうちに、こう結論づけた。

かくて二人の何処かで歯車の喰い違った、芝居が始まったのである。

「佳也子——。それじゃお前、おめ／＼と泥棒のいゝなりになったんだな……」

「許して。私、貴方にどんなひどい眼にあわされても仕方ないと思っていますの。覚悟していますわ」佳也子さんは誘導した。

「よしッ、それじゃ、その泥棒に汚された体を僕が潔めてやろう。来いッ——」

わざと粗々しく喜多君は佳也子さんの髪の毛を掴んで風呂場へと引き立てゝいった。

洗濯物を干すナイロンの縄で、佳也子さんを裸にして後手に縛り上げると、彼は水道の蛇口にホースを繋いで、勢よく、彼女の全身に冷水を浴びせた。ホースからピチ／＼いせいよく迸りし出る水は、容赦なく佳也子さんの体にはねかえってしぶきをちらした。

「ウーッ……」

佳也子さんはほとばしる水勢にもがいた。喜多君の足が、情容赦もなく、彼女の顔をふみにじった。

お互いが、MとSの現実へのうち廻り乍らも、虚構の谷間を挟



を云ったわけが、今こそ、はっきり分ったぞ。見ろ！ この愉悦を

——この四年間、佳也子に胚胎していたマゾの芽が、一斉に蕾を開いたのだ。よしッ、この契機を逃さず、俺はこの女を奴隷にして

んで、その行為は、さして不自然さも感じられず行なわれたのである。既にプレイは始まりつゝあった。

喜多君も佳也子さんも、現実の刹那に陶醉し、歓喜にむせていた。

虚構の設定が時として、こうしたプレイに発展する可能性を具えているものである。

喜多君は佳也子さんが犯されていない事を百も承知で、只管に現実へのみ耽溺した。

佳也子さんも、喜多君が犯されていないのを承知で嗜虐の世界に遊んでいる事を知りつゝ、自らマゾの陶醉にしている。

既にSとMのプレイに没入出来れば、口実は何だってよい。

——佳也子が心にもない嘘

やるのだ。――

喜多君は、彼女のむせぶが如く、身を打震わす恍惚の白肌に、快哉を叫んだ。

「佳也子――お前はこの償いとして、今後、僕の奴隷となるんだ。わかったか……」

「はい、貴方……」

――遂々、本言を吐いたわ。この人は、私を奴隷の様に扱いたさに、泥棒にまでなって忍び込んで来た癖に……。私が誘導しなかったら一ぺんぎりで、緊縛のプレイは終わってしまうところだったじゃないの。本当は私に頭を下げて感謝すべきだわ。けれど、被虐に身を委ねたこの愉しさ。私はこの日をどれ程待った事か。私はこの人の奴隷になるんだわ。あゝ、なんて甘美な命令なんでしょう――。

佳也子さんはジーンと二の腕に泌み渡る緊縛の痛みに、心を天外に飛ばし乍ら、これからの二人っ切りの甘い生活を思って胸が疼いた。

「これからは僕の事を旦那様と呼ぶのだ。分ったな――」

「はい、旦那様……」

「よし、じゃあ、早速、奴隷の仕置場をきめるとしよう。未完成の儘の二階、これがお前の仕置の場だ。どうだ、ふさわしいだろう」

「はい……」

「すぐさま、お前に似合った、首輪、手枷、足枷をつくるとしよう。

そして、お前は私の前では必らず裸でいなければならないのだ。尚、裸でいる時の心構まえとして、お前に『O嬢の物語』と云う本を渡すから、お前はこれを朝夕、熟読してO嬢の如く、この僕に仕えるんだ。分ったね」

「はい、旦那様……」

幸か不幸か、彼等の住いは、予算の都合から、二階は未完成のままで、天井板も張ってなく、太い梁や、棟木がその儘、露出していたし、床は粗い板の床板だけで放置してあった。壁は荒壁の儘だし、窓は枠のままで、表から雑木をうちつけてあった。

奴隷にとっては恰好の仕置場を呈していた。

「僕が出勤してから帰る迄は、お前は解放された自由の時間を持ってよろしい。僕がこの家に居る間は奴隷として、すべて絶対服従で僕に仕えるのだ。どうだ嬉しいか？」

「はい、旦那様、嬉しいございます」

「よろしい。では奴隷飼育の第一段階として、これから二階へ昇るが、お前はワンワンスタイルで、階級を四ツ這いで、這って昇るんだ。首輪の代りに、今日はお前の赤いガーターを首に簞めてやる。さあ昇れ――」

喜多君はガーターに縄を通し、その先を握った。云われた通り、佳也子さんは四ツ這いになって座敷から茶の間を通り、階段を這い昇って行くのだった。

彼女を粗い床板に正座させると、喜多君はマジックインキで、背中に大きく、奴隷第一号と大書した。こすっても拭いても暫くはとれないだろう。太い梁が喜多君の眼には、早く吊れ――と請求する様に写った。

「本格的段階に入ると、お前はこの梁に吊され、時には逆吊りの儘、鞭打たれねばならない。尚、種々の責めは『O嬢の物語』に準じて行なうが、一切、それに対して奴隷は不平を云ってはならないのだ。分ったね」

「はい、旦那様」

喜多君の脳裡には、『O嬢の物語』の、あの強烈な行為が、たえずこびりついていった。

——俺はこいつを、O嬢の如き、典型的マゾの従順な女に飼育せねばならぬ義務の様なものすら感じている。凌辱されたなどと、ありもせぬ嘘をついて、俺を驚かせたが、これが、嘘をついた罰として与えられた課題だ——。

その嘘によって得た、貴重な奴隷の権限を、喜多君は勝手なる解釈によって忘れていた。

併し彼の勝手極まる解釈にもかゝらず、佳也子さんは、奴隷の身にいき／＼とした生甲斐を感じて心は弾んでいた。

——何だか、この人は生れ変わった様だわ、こんなに強い人だとは知らなかった。あの一言の嘘の効果が、こんな結末を生むなんて、恐らく考えても見なかったもの……。けれど、これで、倦怠期が外れてくれると何よりだわ。この人は、きつと、一目散に帰って来るだろう。この私を責めるために……。そして一日中、この奴隷たる私のことを考え続けてくれる事だろう。——

兎も角、喜多夫妻にとって、この夜を契機として、生活様式が変わった事は確かである。

喜多君は張り切っていそ／＼と出勤し、奴隷から解放された佳也子さんは、彼の帰るのを待ち兼ねて、瞬時も早く奴隷になりたがった。彼女は迅速にO嬢に近づいていった。

生活様式の一変が、夫妻に幸福を齎らした。と云うのは、それが刺激となったのか、どうかは論外として、どうやら佳也子さんに愛の結晶が宿ったのである。

——M・Sプレイとも、いよ／＼お別れの日が近づいた様だ。妊娠七カ月ともなると、そう／＼逆吊りも出来はしまいで……。——

喜多君は、ワンワンスタイルで、彼の膝下にうづくまっている佳也子さんに、餌をやり乍らそんな事を考えていた。

嬉しそうに首をもたげて、深窓育ちのジスマークの筈の彼女は喜多君の手から与えられる餌のビスケットを無心に口で受けていたのである。

かつて、彼女がついたあの夜の嘘など、二人とも、とっくの昔に忘れ果てゝいた。

二人の心と心が、心底から通いあっていたからであろう。

—— × —— × ——

「と、云う工合になれば、先ずはM・Sプレイも、めでたし／＼と云う処ではないでしょうか。唯一つ、茲に多少、話す事ははぐかった、『O嬢の物語』ですが、当代の人気作家、清水正二郎のこのほんやく物と称する本を是非、読んで貰いたいと思いますね。ポアリーヌ・レアージュと云う人が本当に書いたのか、どうか。世界を股にかけて書く清水氏の事ですから、真偽は分かりかねますが、私は彼のように、茲にセックスをあからさまに伝え得ないのが残念です」

スバル氏の話は、こうして幾分、理詰めになりました。

春の夜風は流石に冷たく、人影の消え失せた円山公園の樹々を震わせて吹き抜けて行きました。朧ろだった月もいつしか中央に、くつきりと円を描いて、爽やかに夜の光をキラ／＼と地上に投げかけているのでした。

「酔っ払い運転、御禁制の御時勢——。少し醒まさないといけないね」ぞろ／＼と、車に戻る八人の退屈男達の中から、誰かの声が、夜空に響いて、桜の花蔭に消えて行きましたとさ——。



女王様の御乗馬

先々号で倉仁氏だったか鞍氏だったかの御指摘があったが、ライフ誌六〇年二月二十九号「ヨーロッパの可愛い姫君達」の中にオランダのイレネ姫（芳紀二十才）の乗馬姿がある。王宮の苑内とも思われるうっ蒼とした林の中を、白づくめのセーター・ジョーブス、真黒な長靴のいでたちで鼻白の栗毛(?)にどっかりとおまたがりになった御姿、ことに手綱を手許でひきしめているのか、一寸下

ファンタジヤ

マゾヒスティカ

山本節夫

向き加減にはほえまれている御顔が印象的。さすが名門の出とて、ハリウッド女優の馬乗りとは些か趣きが違う。ふかふかと馬乗りに跨ったところが丁度、真正面から写されているだけに、肉付きのいい両の御腿に完全に挟みこまれた愛馬が小さく見える位だ。その写真の横に、オランダ王国の後継者である姉君ベアトリス姫とベンチで横むきに語りあっている光景があり、イレネ姫の乗馬靴がベンチの下からのぞかれる。下馬した後の心持よいひとときだったのであろう。

更にその右にはデンマークのマルグレテ姫のにこやかな立像がある。DARLING OF THE DANES の見出しの下には、彼女はデージーという愛称で国民に親しまれているとある。

昨年十月、英国のエリザベス女王がデンマークを訪問された時の一日、十月二十五日のジャパンタイムスは写真を掲げ、コペンハーゲンのフレデスボルグ城の庭園で馬に乗ったマルグレテ姫を、英女王とデンマークのイングリッド皇后が傍で笑いながら見ている姿

を紹介している。

かの有名なクリスチナ女王を生んだ国柄でもあり、男性的な乗馬服に身を固め、風除けのためかネックチーフに髪の後部を包んで馬上豊かに打ちまたがった王女の御姿は、まことにキリッとして堂々たるもの。斜め横からのポーズゆえ、向う側の御足が馬の前脚を越して拝され、いずれも馬の腹の最下端より下部にきている。そのため一層、馬に対する威圧感があり、背の低い日本人がちょこんと乗せてもらっているのとは全く異なり、いかにも自信を以て膝下の生き物を「御す」という感じなのが、うらやましい。

「デージちゃん、乗り具合はどう？」

「ええ、とっても。この馬は乗りつけていますので反動がとってもよいの。おば様も御乗りになりますか？」

こんな会話が交わされた事と想像される。このエリザベス女王が乗馬の名手である事は周知のことだが、ずっと以前、まだ妹君マーガレット様が結婚される前のこと、ウィンザー・カースルの馬場で御二人が競馬をなさったという宮廷記事があった。簡単な報道でその時の様子はよく判らないが、どうやらマーガレット姫が御勝ちになったとか。

重苦しい肩書きを外してのリクリエーションの或る日。御馬をひとせめしようと御姉妹が夫々の愛馬に打ち跨って馬場に御出ましになる。

「ああ、いい天気ね。こんな日の乗馬は、ほんとに楽しいわ」

「ええ、とってもいい気持ち。馬もすごくはり切っている様ですわ。どう、御姉様、二人で駆けつくしましょうか」

「うん、いいわ。あなたなんかに負けないわよ。さあ、いいこと。用意、ドン」

「ハイシ、ハイシ。そら、もっと走れ」

「ああ、負けそう。ほら、もっとしっかり。」

こいつ、ハイシ、ハイシ」

鞭が飛び、拍車も思いきりはいったことだろう。馬の背にのしかかる様に身をかがめて最後の追い込み。

「勝った！ 勝った！」

マーガレットは子供の様に、はしゃぐ。

「トニーの奴ったら、ちっとも飛ばないんだもの。よし、今日は御仕置に一泡ふかしてやらなくちゃあ」

女王様の鞭が高々とあがる。

○

ラジオの名作物語で題は忘れたが、フラン

スの大貴族の御姫様の御寝みの前に、侍僕が「明朝、御馬の用意は如何いたしましょう？」と聞く場面がある。

「そうね、栗毛に鞍をおいて頂戴」

朝の御食事前の馬乗り運動は日常のことであるらしい。とにかく貧しい国の物語りではない。デラックスな、文字通り「女王様の御乗馬」なのである。

女 調 教 師

文芸春秋二月号「北海道の女」

これは「日本の女」のシリーズものの様だが、その中に日高の国、浦河附近の牧場が紹介されて「一頭、数百万円もするサラブレッドもアラブも二才になると毎朝七時に雪の馬場で約三十分、調教が行われ、たくましい競走馬に育ってゆく。この牧場の娘さんは、次々と乗り替えて調教をするのが朝の日課である」と、スラックスに短い長靴をはき、いとも無難作な、まるで自転車にでも乗る様な気分で二才駒にまたがった娘さんの写真が出ている。

雪に蔽われた寒々としたバックには、この次に乗って頂くのを待っているのか三、四頭の馬が見え、風が強いので、女騎手の前髪も

馬のたてがみも横になびいている。

「次々と乗り替えて調教する」とは何と実感のこもった言葉であろう。

女調教師が柵の外にあらわれると、馬達は甘える様に鼻をならしながら近づいてくる。

「よしよし、今日はどれから跨ってやろうか。一番はお前だ。さあ、いいか、おとなしくするんだぞ。あばれると鞭だぞ。またがるぞ。さあ、歩け、ハイシ、ハイシ、ハイシ。一生けんめい勉強しないと、いい馬にはなれないよ。ハイシ、今度は駆け足。ハイシ、ハイシ」

一頭、三十分というのだから、五頭、調教すれば、たっぷり二時間半。つらい様だが仕事は仕事だから、さぞやたのしい事だろう。

○

「許さざる者」という映画で、主役のオードリ・ヘッバーンが水を汲みに外に出ると、愛馬の白い若駒が前足をあげてヒンヒンといわなく。まるで「早く乗って頂戴」と、わめいている様に見える、ヘッバーンも、なんとなく馬乗り衝動にかられて行く辺りの描写は、なかなかうまい。とうとう汲んだ水を土間にほうりだすと、母親がパンを焼くと命令するのにも上の空で、馬場の方へ走り、馬の傍にたつ

と、手綱をかけてしまう。そして

「お前はまだ半人前なのよ。半分はインディアン——これが映画のテーマでもある——だから私が乗って訓練して上げる。さあ、乗るわよ」

そういつてヒラリと跨ると、馬は柵の門を飛び越し、すごい勢いで飛んで行く。そして家の前の大きな川の中へ。

○

三月号、麻生保氏の時評にある「ペア・テスト」の様に美しい女教師に思い切り「馬乗られ族」"馬化族"は調教を受けたいと願っている。尚、このペア・テスト記事のカットは跳ねる馬の鞍の上に、あぶみを踏んぱり、突っ立ち上った格好で体重を馬の首の方にかけた女騎手の姿であるが、アメリカ漫画リトル・スポーツに自動車で乗馬クラブに乗りつけた初心のお嬢さんが、さんざん、こういう格好でお馬にゆられて、その癖がすっかり身につく、自動車の運転台でもお尻を上げて帰って行くというのがあった。

序に同じリトル・スポーツで乗馬ズボンを注文した御嬢さんが「御詠品は全て御試しの上」という広告をたてに、運動具屋の主人にテストを要求する。主人は手をならして店員

を呼び鏡の前に四這いになることを命ずる。馬代りに鞍をつけられた店員の背にどっかと跨った買主は、鏡にうつる自分の姿に満足する。馬にされた店員は、お嬢さんの御尻の下で顔をしかめている。

或る告白——身上相談

勇気を振ってこの手紙を出します。僕はどうしていいか判りません。人に相談できないことなのです。先生、どうか僕をお救い下さい。僕は中学二年生です。家が一寸、町はずれにあって、学校へ通うのに城山の横を抜けて行きます。城山というのは昔、お城のあった所で、今では公園みたくになっていて、一番上に登ると町全体が見えます。桜が多くてお花見の頃は人が出ますが、普段は殆んど人通りがありません。たまに街に出る農家の人を通る位です。僕の家も農業です。

九月の末の土曜日の事でした。放課後、一寸、校庭で運動をして南町の角で皆と別れて独りで城山の坂にかかりました。一曲りした所は少し広場になっていて、あずま家があり水呑み場もあります。のどが渴いたので水を呑もうと思って近よりますと、その床凡のところ若い女の人二人が僕をみているの

に気がつきました。

一人の人は真赤な水玉模様のワンピースで、すぐ裾がみじかくて膝のずっと上まで足が見えていました。腕は肩まで裸で、赤いサングラスをかけて、髪の毛は金色みたいで、男の子の様に短かく刈っていました。もう一人の人は白いアロハみたいなお上に、ものすごく短い桃色のパンツをはいて太ももがこわい位にみえました。

あんまりじろじろ睨まれるので気味が悪くなって、水を飲むのを止めて帰ろうとすると赤い水玉の方の人がつかつかと僕の方へ寄ってきて、

「よう、アンちゃん、可愛い顔してんなあ、ちょいと遊んでやろうか」

といいました。言葉は東京弁でした。日に焼けたのか小麦色の、眼の大きな、一寸つり上った、鼻の高い綺麗な人でしたが、あまり乱暴な言葉なので僕は驚いてだまって足を早めました。すると鳥が飛ぶようにその人は僕の方に走って来て、前に立ちはだかるように突立つと、両手を腰にあて両足を開いて「人が折角、遊んでやろうってのに、だまって行く手はねえだろ、ええ、おい」といいながら僕の肩に両手を掛けました。

僕はあまり失礼なので、むっとして

「僕はあんたを知らない。はなしてくれ」

といって、その手を振り払いました。

「おっ、この野郎、手向いすんのか。このお姐ちゃんに逆うと為にならねえぞ」

と、すごみながらかかってきました。僕は学校で柔道もやっているので、こんな女なんかに負けるもんかと思って、その人に組みついて行きました。ところがその人は、ものすごく強いのです。二、三回もみあっている中に大外刈りで僕は地面にたたきつけられました。起き上ろうとする所を、そのワンピースの女の方は、すばやくのしかかってきて、僕の胸の辺りに馬乗りに跨ってしまいました。「畜生」と思いながら僕はね返えそうと体を動かしましたが、女の方はガッシリと押えつけないが僕の手首をつかむと、自分の膝のところにくっつけて、ぐいと手の指を逆手にとりました。僕はしまったと思いました。が、もう後の祭です。もがけばもがくほど手の指がしまつて今にも折れそうです。

女の人はそのままの姿勢で僕の咽喉の所にまたがって来ました。女の方は両脚で僕をピタリはさみつけながら、もがき痛がる僕を悠々と見下して

「さあ、どうだ、参ったか。早く降参しやがらねえと、この指を折っちまうぞ。やい、あやまれ」

そういつて、ぐいぐいしめつけます。僕は何だか身体の中から力が抜けて行くみたい。気持ちになり、口惜しかったけど降参しました。乗った人は少し笑いながら、頭の上に近づいたもう一人の人に、僕に跨ったままの姿勢で、逆手だけは緩めてくれながら「へん、ざっとこんなもんさ。弱いたらねえや」

そういつてから又、僕を見下して

「やい、田吾作のチンコロ。あたいの家来になつて何でもいうこと聞くか」

といって一度はなした逆手を、またとる振りをしておどしました。僕は初めて見る女の人の事が気になって頭がしびれる様になっていましたので「うん」といって承知してしまいました。

「よし。じゃあ馬になって、あの縁台のとこまで乗せて行きな。早くしやがれ、このノロマ」

もう一人の女の方は、その人に「あんたも、ひつつこいね。いい加減ゆるしてやんなよ」

「てやんでえ。こいつに一丁、顔乗りしてこまさなくちゃあ。朝からのムシャクシャはおらねえや。さっさと馬になんな、そうそうよいしょ」

僕の背中にどかりと馬乗りすると、いじめっ子のする様に僕の首すじに両手をかけて両脚で胴のあたりをぼんぼんとけりつけながらいい気持そうに鼻唄を唄いました。十歩も歩くと床几の所にきました。

「よし、馬は許してやる。今度はこの縁台の上に仰向けになるんだ。一寸、マー公、そいつが逃げない様に押えつけてて」

僕が命令どおりに床几の上にねると、今度はショート・パンツの人が、やっぱり首のところに乗っかって押えつけ、おとなしくしている僕の鼻をつまんだりしてからかい

「どうだい、若い綺麗なお姐ちゃんにいじめてもらって、嬉しいだろ」

といいました。その中に前の人が来て「さあ、代って」といってマー公という人を押しますと、マー公は僕の顔をまたいで過ぎました。僕は女の人にこんなことをされるのは始めてなので赤くなりました。

「チー坊、あんまり独り占めをすると、あとでひどいぞ」



「だって、あたいが征服した獲物だもの、あたいが料理すんのに文句ないだろ。マー公にもいじめさせてやるから待ってなったら」

そんなことをいい合いながら僕の頭の上にまたぎ立つと、バンドみたいな所から小さな飛び出しナイフを出してパチンと刃を出しながら

「坊や、おとなしくしな。へたにもがくと血が出るぞ」

そういつてチー坊はぐいと馬乗りになりました。さっきいつていた顔乗りというのが、やっとなりました。

大きな重いお尻が前後左右にゆれて、僕の頭の後の方は、コツコツ板に当って痛くてたまりません。でも、もがくと余計にしめつけてきます。街で女の人がつけている様な香水の匂がプンプンと匂いました。

やっとなして貰うと、お姐ちゃん達は僕に

チューインガムを一箱くれて

「アバよ。縁があったら、また合おうぜ」

といいながら町の方へ下りて行きました。このことがあってから僕は全然、勉強が手につかなくなってしまいました。あの時のことが目の前にちらついて夜もねられず、毎日、頭がガンガンしています。体重も三キロばかりやせました。町を歩いていてもチー坊やマー公の様な女の人に会うと、その人の足の間にはいり込んで股ぐりをしたくなります。女の人の馬になって走ったり、首や顔の上にまたがられて苦しがつたりする夢を見ます。こんな事ばかり想像している僕は、一生、駄目な人間になってしまうのでしょうか。先生、どうぞ、お救い下さい。御願います。

“悩める中学生より”

(それから、あのことがあってから二、三日後に、二人の女が強盗して警察にあがったと

新聞に出ました。服装や年齢が合っているの
で、きっとあの二人だと思います。やはり、
あの辺で夕方、農家の爺さんが襲われ、三千
五百円入りの財布を無理にとられたそうで
す。その爺さんの話では「勘忍してくれ」と
手を合わせて拝んだのに、二人でこの老人を
押し倒して金をとり、その上、馬にして二人
連れで乗り廻し、いろいろ乱暴したそうで
す。僕が、やらされた様な事だろうと思いま
す。しかし、そんな悪い人達ですが、僕はも
う一度、会いたくてたまりません。」

私のイタ・セクシュ

アリス草稿

コノミとの一件をスミさんに知られて折か
んされてから暫くは、どちらに会うのも気が
ひけて、なんととはなしに足も遠のいてい
たが、秋風が吹き初めた十月のある土曜日、コ
ノミから電話があった。東京に来ている事を
どこで知ったのか判らないが、女性の第六感
というのか、何となく来ている様に思えたか
らということだった。

「どうしたのさあ。さっぱりお見限りじゃな
い。閑でひまで退屈してんのよ。帰りに寄ん
なさいよ。ね、まってるわ」

有無をいわず約束させられてしまい、夕
方四時頃、古めかしい道をたどって玄関の格
子をあげた。菊の大輪が美しく生けてあっ
て、打水もすがすがしく

「いらっしゃいませ。お待ちでございます。」
という仲居のきよ子の案内で通されたの
は、奥の、おかみの私室であった。

「いらっしゃい。おそかったわね。さきに一
杯やってたのよ」

小机の上には銚子が一本、置いてあり、一
二品の突出しが出ていた。

コノミはさっぱりした薄地のセルをきりっ
ときこなして、セットをしたばかりなのか、
髪形ももういっしょだった。眼許は酒の酔の
せい、うっすらと赤味を帯びて、それが彼
女のサジステイックな、一寸つり上り気味の
大きな瞳を一層、美しくみせた。手早く長火
鉢のどこに一本つけて

「さあ、あついと一杯、どう。駆けつけ三
杯よ。はいっ」

反抗もならず私は柔順に三、四杯をつづけ
てあげ

「あなたも一杯、どうぞ」

と返盃する。さきほどから気になるのは、
スミさんがいるのかいないのかということだ

あった。しかしズバリそのことを聞くのも変
なので、もしもししながらも銚子を重ねて、
とりとめない世間話に時間をつぶした。

「さあ、坊や、アーンして」

コノミは自分の口で噛みほぐしたカラスミ
の一片を私の口にふくませたりした。大分、
御機嫌だなど思いながら、ふと部屋の隅にあ
る、縦に長い風呂敷包に気づき、その中味を
聞いてみた。彼女は、さり気なく

「ああ、あれ。あれは私の乗馬靴。昨日、出
来てきたの。今度、クラブに入ったのよ。そ
れで浅草の方の専門の靴屋につくらしたの。
見だい？」

ほっそりと長く、ピカピカと光沢をもった
真黒の乗馬靴が私の前に置かれた。

マゾの私が女性の乗馬靴を、しかもその履
き手の目の前でみせつけられる時に、どうい
う胸のときめきを感じるであろうかというこ
とを、彼女は十分、計算している筈であっ
た。猫が獲物の鼠をなぶる様な目つきで彼女
は、じっと私を見据えていった。

「はいてみようか」

私は、てっきり洋装にでも着替えてから、
はくのかと思っていた。ところが案に相違し
て、彼女はそのまま立上ると着物の裾を端折

って、すんなりした、しかし、かた肥りの愛くるしい脚を、私の肩に片手でつかまりながら、一方ずつきはき、裾をはだけたままピチッと両脚をそろえて

「どう、ぴたりでしょ。ほめなさいよ」

なんともエロチックな光景であった。私はかねがね短い着物に脚絆姿の女性にもマゾを感じたものだが、和服に乗馬靴というのが、こんなにも馬化気分をそそるものとは夢にも知らなかった。

「すごい、全くすごいよ。フラフラになっちゃう」

「これだけでもう参っちゃったの。だらしないの。だめよ、そんなこっちゃあ。一寸そこにある拍車をとって、つけてくんない」

私が彼女の少し開かれた脚の前にうずくまって拍車をとりつけている時、

「おきよ、スミ姉さんにいらっしゃいって。昨日の靴をもってよ」

スミさんもいるのだった。

ああ、もうどうにでもなれ。

コノミは、かかとをあわせて拍車の尖をカチカチと合わせていたが、そのうち彼女の膝の前に両手をついて見上げている私の頭の上にかかった。私も極めて自然に腰をあげ

て馬の姿勢になった。

「さあ、この靴をはいて初乗りだ」

素晴らしいながらコノミは身軽く私の背中にまたがると、着物の裾がはだけて太ももまでの素足がパアッと部屋の中を明るくした様に思えた。

その時、スミさんが、これもやはり手に新品の靴をもって入ってきた。

「あら、早いこと。もうおけいこ、やってんの。坊や、こんにちは。ながいこと来なかった罰よ。今日はコノミと二人でギュウギュウやつつけてやるから覚悟なさい」

どうも二人の間には予め話しが打合せてあったと思えない。しかし私は却って、ほっとした気分だった。

「姉さん、お先きに一寸、失礼。そのの襖、あけて下さらない」

八畳の客間には真中に紫檀の角卓があるだけ。馬をせめるには丁度よい馬場であった。

ハイシ、ハイシと真中まで来たころ、スミさんが

「はい、これ手綱にするといいわ」

といって赤いしごきをコノミに手渡した。「サンキュー」手綱がかまされ、胴はぐつとしめつけられた。

床の間の前で女王様は、うめもどきの枝を一本ひきぬいて鞭代りに私の尻にあてた。拍車を脚でしめつける度に私のももに当たった。「痛い」と思わず悲鳴をあげると、コノミはやっと気がついて

「よし、可哀そうだから拍車だけは勘弁してやる」

といって馬上にまたがったまま外してくれした。むきを変えて先刻の居間の方に向くと、丁度、正面に姿見の大きな鏡があり、口に赤い手綱をかけられた乗馬、節夫号にどっかり白い脛を惜しげもなくあらわしたコノミ女王様が、ふかぶかとおまたがりになった様子はつきりとうつつた。

「ちよっと、姉さん、よくうつるわ。いいもんね、自分の馬乗り姿をうつしてみなんてさあ、ヨタ馬、もっと鏡の近くに寄れ。ハイシ、ハイシ」

コノミは、お尻で調子をとると前へ前へその体重をかけた。私の息は、だんだんあらくなり、三回目を回り終ると歩みはすっかり遅くなった。やさしいスミさんが

「ねえ、コノミ、少し休ましておやんなさいよ。疲れたらしいわ。さあ、お馬ちゃん、お水をあげる。おのみ」

コップ酒を、私は四這いになって背中にコノミを乗せたまま半分ほど飲まされた。

「私にも頂戴」

「おやおや、大変なお嬢さんね」

そういういつもスミさんは姉さんらしく妹にもコップをさし出してやった。

「休んだら、もう一せめだ。コラ、しっかり走れ」

手綱がしぼられ枝の鞭がとび、私はまた重い膝を畳の上にひきずった。

再び鏡の前までくると、私はほんとうに降参した。

「参ったか。やせ馬め。こうしてやる」

コノミは、いつかの時のようにお尻をずらすと、私の首の上にまたがり直し、ぎゅうっとしめつけた。可愛い膝小僧が、真黒な乗馬靴が、肩の前にピンと伸びて下っていた。

やっと下馬して解放してもらい、一息つく間もあらばこそ、今度はスミさんが靴をはかせると命令する。普段着とはいえ、このクラスの人々は万という単位のを身につけているので、なんとなく風格のある衣裳だが、スミさんのように顔立ちのノブルな人だと一層である。だから裾をからげて乗馬靴をはくと、まるで乗馬スカートをつけた西洋のお姫様のようにみえる。

妹がさんざん馬乗り気分を享受しているの

を、さりげなく見てはいたけれども、スミさんの心の中には炎のように燃えるものがあつたのであろう。その日のスミさんは、いつもコノミと一緒にいる時のあの控え目な気風はみられず、すぐく積極的であつた。

「さあ、今度は私の番よ。さっきコノミにせめられて背骨もやわらかくなってるでしょうね。私も、じっくりいいじめてあげるからね。始めに鏡の前においで」

鏡の前に四這いになってお乗りになるのをまっている馬の背中にとらえていたら、珍しくも裾をぐいとからげると、私の首つ玉にはかりと、おまたがりになったのである。これは様子が違うわいととまどっていると、スミさんはハイシ、ハイシとあはるのであつた。

「姉さん、やるじゃない。なかなかいいわ、そんな馬なんかつぶしちゃえ、つぶしちゃえ」

コノミが横でけしかける。私の首は、だんだん重みにたえかねてうつむくと

「コラ、しっかり首をあげないか」

「よし、首乗りは勘忍してあげる。今度は馬よ」

首から背中へ、そして、例に似ず劇しい調教。これも専用馬から共通馬へと転落してしまった、私に対する、せめてもの抗議なのだろう。私は自分の意志の弱さを更めて恥じ、この上はつぶされて息の根がとまってもスミ

さんへの忠誠をつくそうと覚悟し、一生けん命、走りつづけた。

コノミは表で電話がかかっているというので中座すると、スミさんの態度が変わった。私を休ませると、背中の上に体を前の方に倒し私の頭を両手で軽く押え、耳もとで囁いた。

「可愛い子。坊や、いい子。いい子」

そうして平手で馬を愛撫するように私の首筋をなでてくれた。

「今度はひっくり返るのよ、早く、コノミが帰ってこないうちにさ」

スミさんは乗馬靴をキュウキュウとしなわせながらいった。

「コノミに、こんな調教もされたんだって？」

とたんに、私の視界は暗黒となり、重圧の苦しみが始まった。——死ぬかも知れない。このまま死ねば、圧死というのか、窒息死というのか？——とりとめない事を考えつづけたかとみる瞬間、コノミの大声。

「ズルッコイわ、姉さん。そんなのないでしょ。代って、早く。今度は私の番だったら」

立ち上るスミさんをつきのけるようにしてコノミの足が私の頭の横につた。勿論、乗馬靴は、もうはいていなかった。

その後も、お酒を飲んではいない、這っては肩車と、二人の乗り手を相手に、一匹のやせ馬はふらふらになってしまったのである。

連載小説

狩 獵 者

(第六回)

新 佐 度 川 工・画 槐



黒い影

××映画のスター尾瀬達郎の、自動車事故による怪我は、精密検査の結果、内部的には異常なしと診断された。気絶はしたものの、それは、いわば、ショックによるもので、胸部の打撲も大したことはなく、二、三日もすれば退院できるみとおしだった。

「困ったことをしてくれたな」
新庄監督は、病室に入ってくるなり、不機

嫌に云った。

「すみません……」

尾瀬は、さすがに新庄をまともには見られず、毛布で顔を隠した。

「君は体が売りものなんだからな。傷でも残ったら、おしまいなんだぜ。さいわいその心配はなさそうだからよかったものの——」

新庄は、なにを思ったか、不意にベッドへ近よると、毛布をまくった。

ヒヤリとして、尾瀬は脚を縮める。

「君、パンツをはいてたのか」

新庄の声が、いっそうとがった。

尾瀬は、かねがね、六尺褌を常用するよう、新庄から云われている。それは、雑誌に例のゴシップがでたあとのことだったが、新庄の命令には絶対そむけない立場にある尾瀬でも、全面的に承服はできかねた。写真で見ると、尾瀬も己の褌姿に満足を感ずる限り、褌自体に愛着はもてなかった。出演ごとに褌をさせられるので、締めかたも身につく

ようにはなっていたが、日常下着として用いるには、やはり不便だった。それに、ふだん人目に触れるものではない。尾瀬は適当に、パンツと褌を使いわけていたのである。

苦りきって新庄が帰っていくと、

「フン、運が悪かったのサ」

尾瀬は、ケロリとして、そう呟いた。

尾瀬達郎の退院を待ちかねて、中断していた新庄組の撮影が再開された。

その日はセット撮影で、褌姿のカットはなかったが、病院でのこともあったし、尾瀬は神妙に六尺褌を締めていた。

やっとスタジオから解放されたのは深更になつてからで、撮影所の広い構内を歩きながら、寒々とした夜空を仰ぐと、尾瀬は、なんとなく悲哀のようなものを覚えて、肩をすくめた。

いつもなら愛用のマイ・カーで帰るところだが、自動車の修理はまだできていなかった。

「尾瀬さんですね？」

門柱の蔭から声がしたと思ったら、闇に溶けるような黒い服装の男が、すぐ近くに立っていた。

尾瀬は、妙にドキリとしたが、すかして見た貌は色が白く、スラリとした長身の品のいい青年紳士だったので、「そうですが……」と答えて立ちどまった。

「僕は、あなたの熱烈なファンですよ。めいわくでなかったら、僕の自動車に同乗しませんか？」

青年は、微笑をたたえて、穏やかに云ったが、眼は熱っぽく光っていた。

尾瀬は、そんな眼で見られることに馴れていたし、彼には、意外に同性のファンが多かった。とくに、彼の褌姿に渴仰する熱狂的なファンは、ほとんどが男性だった。この青年もその一人かもしれない。

「ありがとうございます。乗せてください。俺、自分の自動車をこわしちゃって——」

「ああ、このあいだは大変でしたね。でも怪我がなくてよかったですよ」

「まあね……」

テール・ランプに近よると、青年の自動車は、灰色の小型乗用車だった。

(なんだ、コ罗纳か。案外しくてンだな)

ちよつとガツカリしたが、尾瀬は、運転手の開ける扉へ首を入れた。小型のわりにはシートがよく、乗心地はそれほど悪くなさそうだ。

発車すると、車内が狭いせいか、並んだ青

年の肩がときどき尾瀬に触れ、さわやかな髪の毛の匂いがした。

尾瀬は、疲れてもいたし、自動車の動揺に身をまかせて黙っていた。

青年の手がツトのびて尾瀬の肩にかかった。熱い息が頬に感じられる。

(チェッ、自動車で送る代償がこれか。ファンはありがたいが、すぐこうだからナ。でもいいさ。こいつは、いま、天国にいるみたいに恍惚してるんだ。めったには触れないスターの軀を、特別に抱かせてやるのも、なにかの功德だろう。それに、この男、そんなに嫌な奴でもないし……)

そんなことを考えているうちに、尾瀬は、いっかウトウトとしてきた。

「ねえ、尾瀬さん。ちよつと僕の家へ寄ってってくださいませんか？ まはとらせませんよ。すぐにまた送りますから」

耳許で囁く青年の声に、薄眼を開けた尾瀬は、めんどくさそうに頷くと、またスウッとして息をたてはじめた。

新庄監督にみいだされるまで、大部屋生活の長かった尾瀬は、もう三十近くなっている筈だったが、ワザと無造作に短く刈った頭髪がよく似合い、どこかにきかん気らしい子供

っぱさがあって、二十二、三ぐらいにしか見えない。しかし、トレンチ・コートに包んだ体のズシリとした手応えは、さすがに成熟してきた男のものであった。

写真で想像していたよりも、数倍価値のある獲物に、司慎之輔は快心の笑みを洩らすと

運転台の杉田に向かって、

「オイ、スピードをあげるんだ」といった。

あまり映画を観ない慎之輔が、尾瀬達郎を発見したのは、何本目かの主演映画のポスターを、偶然に街角で見かけたときである。そ



の映画の題名は憶えていないが、スクリーンの尾瀬の男性美は、強く彼の網膜に焼きついていた。

慎之輔が、尾瀬を狙ったのは、尾瀬の若々しさに食指が動いたのはもちろんだが、尾瀬が異常な人気をもち、大勢のファンに共有されているのを知って、独占と抹殺の欲望にとりつかれたのもあった。

翌日の新聞には、尾瀬達郎の失跡が興味的に尤もらしい憶測を加えて伝えられ、いわゆるスターの雲がくれ事件として、関係者やファンの気をもませることだろう。

しかし、尾瀬は、ひとたび狩猟者の網にかかった以上、二度とふたたび、生きた姿で、彼らの前に現れることはないのだ。

第四の獲物

「コーヒーをいれようか。それとも、酒にするかね？」

尾瀬を広間に招き入れると、司慎之輔は、なれなれしい口調になって訊いた。

「コーヒーをください。疲れているから」

慎之輔が、自分でコーヒーの用意をしますと、尾瀬は、ソファの上に長い脚をなげだした。

アルコール・ランプに火を点けてから、慎之輔は、「ちよっと、失敬——」と部屋をでていったが、まもなく、派手な部屋着に着かえてもどってくる、

「コレ、とっておきたまえ」

といって、さりげなく、二つ折りにした数枚かの紙幣を、尾瀬のポケットにすべりこませた。

尾瀬は、その厚さで金額をよむと、慎之輔のきまえのよさにおどろき、それから、大いに気をよくした。

コーヒー・サイフォンの湯が沸騰して、水泡を噴きあげはじめている。

この青年は、いま、とりすました冷静さを装っているが、必ず「泊っていけ」といいだすだろう。金を受けとってしまったからには断れない。契約はすでに成立したも同然なのだ。だが、尾瀬は、動揺もしなければ、不快な感情をもちもしない。彼には、それは、いわばビジネスにすぎなかった。

慎之輔は、獲物を横目で流しみつ、サイフォンからカップにコーヒーをうつすと、ウイスキーをたらしながら、

「君、いま、禪をしてるの？」

「ああ、会社がうるさいんでね。俺は、めん

どくさくて嫌いなんだけど」

「禪は、つまりは、君の商標みたいなモンだからナ」

「スターもつらいよ」

「——君の映画、実によかった。それでネ、どうしても実物が見たくなつたんだ。見せてくれるかい？」

熱いコーヒーで眠気も去り、爽快な気分になった尾瀬は、気軽に頷いて上衣を脱ったが、どこかに、やはり、もったいぶったようすがみえた。

室内は、暖房がきいて、汗ばむほどに暖かい。

着こなしに神経をつかう俳優だけに、冬でも薄着でいるから、尾瀬は、脱衣にまどらなかつた。スポーツ・シャツを脱ぐと、下には半袖の肌着一枚だったし、細身のズボンを脱げば、もう真ッ白な六尺禪が現れた。

スクリーンでファンを魅了する尾瀬の裸身は、テクニカラーでも表現しきれぬ鮮烈な肌の色で、慎之輔の眼をひきつけた。

尾瀬の躰は、その容貌とおなじように、どこにでもいそうなタイプでありながら、なんともいえず男性的魅力に溢れている。

いかに遅しくても、ボディ・ビルダーの肉

体は、人工的な美しさだが、凡庸ではあつても、尾瀬の躰は、どの部分にも完成された自然な美しさがあった。

もし、男性美の規格を定めるとしたら尾瀬の躰こそ、それに適合するだろう。

六尺禪を締めた肢体を観賞の対象とする人なら、臀部のかたちを一つのポイントとみる筈だが、その点においても、もちろん、尾瀬は非のうちどころがない。ほどよく発達した大臀筋が、固肉の弾力ある丸みをつくり、大腿部と接するくびれは、深く刻んだように、きれいな一本の曲線を描いている。

慎之輔は、尾瀬を発掘した監督の眼の高さに、あらためて敬意をはらった。

尾瀬が、己の持つ美しさを自覚したのは、新庄によってだったが、いまでは、自惚れをさえもつようになっている。

慎之輔の視線をじゅうぶんに意識した尾瀬は、驕慢な獅子のように、傲然と立ちはだかつていた。

「オイ、南。なにをソワソワしてんだ？」

山科にいわれて、南は、バツの悪そうに笑いながらストープのそばへきたが、また、気になるように腕時計を覗いた。

「そういえば、やにどゆっくりだな」

チビリチビリと、ウィスキーのポケット壺をあけていた杉田が呟く。

「杉田。あんまりやるなよ。仕事にさしつかえるぜ」

兄哥分として、山科は、一応注意したが、仕事の仕事だから、大目にみる気ではいる。

「輝スターの尾瀬達郎か。高慢ちきな人気俳優を、ヒイヒイいう目に遭わすのも悪くねえナ。しかし、世間はおどろくだろうぜ。奴が消されたと知ったらヨ」

杉田の饒舌も、南の耳には入らない。

南の脳裡には、映画のベッド・シーンが、マザマザと想起されている。

尾瀬の扮する大学生の背の筋肉が、踊るように動く。シーツを蹴る牡鹿のような脚。ベッドの下にとぐろを巻いている六尺輝。もう一つの影は、夜のアルバイトをもつ女子学生の筈だったが――

「見にいかなくていいかな。もう小一時間も経つぜ」

妄想をたちきるように、南が口走ったときブザーが低く鳴りだした。

山科を先頭に、広間へ乱入した三人は、アツと思うまに、輝一本の尾瀬を捻じ伏せ、手

足をロープで縛ってしまった。

あまりに不意だったので、抵抗するひまもなかった尾瀬は、説明を求めるように慎之輔を見あげる。

「ハハ、おどろいたらしいね。こいつらは俺の仲間だ。みんな君のファンさ」

「しかし、なんで、こんな乱暴を！」

「確かに乱暴だった。でも、このほうが効果的だと思っただね」

「……？」

「映画のシーンを再現してみたかったんだ」

「なアんだ。それならそうといってくれれば――」

「イヤ、いくら迫真の演技でも、演技は演技だ。どうせ実演してもらうんなら、実感のあるほうがいいからな」

「そりゃアそうかもしれないが、まったくびっくりさせるよ」

そういわれれば、尾瀬の映画に、これとそっくりのシーンがあった。ものずきな男もいるものだと思えるが、怒るわけにもいかぬ尾瀬は、しかし渋い表情をして、

「もういいんだろ？サア、この縄をといてくれよ」

と四人の男を等分に見た。

「そうはいかないよ。ストーリーにはまだ先があった筈だ」

慎之輔はニタリとする。

「先？アア、私刑か。そこもやるの。しょうがねえナ。でも、あんまり実感のあるのはゴメンだぜ」

「演出は俺にまかせといってもらおう。役者も揃ってる。ブツツケ本番だ。いいか。用意。スタート」

おどけた調子で慎之輔がいうと、杉田と南が、自由のきかぬ尾瀬を、丸太のように担ぎあげた。

「オイ、どこへいくんだ？ここでやるんじゃないのか」

慌てて尾瀬が訊いたのは、不安を感じたというよりは、このままで寒いところへでも連れていかれたのでは、たまらないと思ったからだ。

「いいところへ連れてってやるぜ」

杉田がいつて歩きだす。

「ちょっと、待ってくれ。おい！」

廊下へでたとたん、ヒンヤリと冷い空気は触れて、尾瀬は哀願するように叫んだが、もう誰も耳をかす者はなかった。

スター 汚辱

第一拷問室の床へ、荷物のように投げだされた尾瀬は、コンクリートの冷たさに縮みあがった。起きようとしてもがいても、芋虫のように転がるばかりだ。

「おいッ、悪ふざけもいいかげんにしろ。俺をなんだと思ってるんだ！」

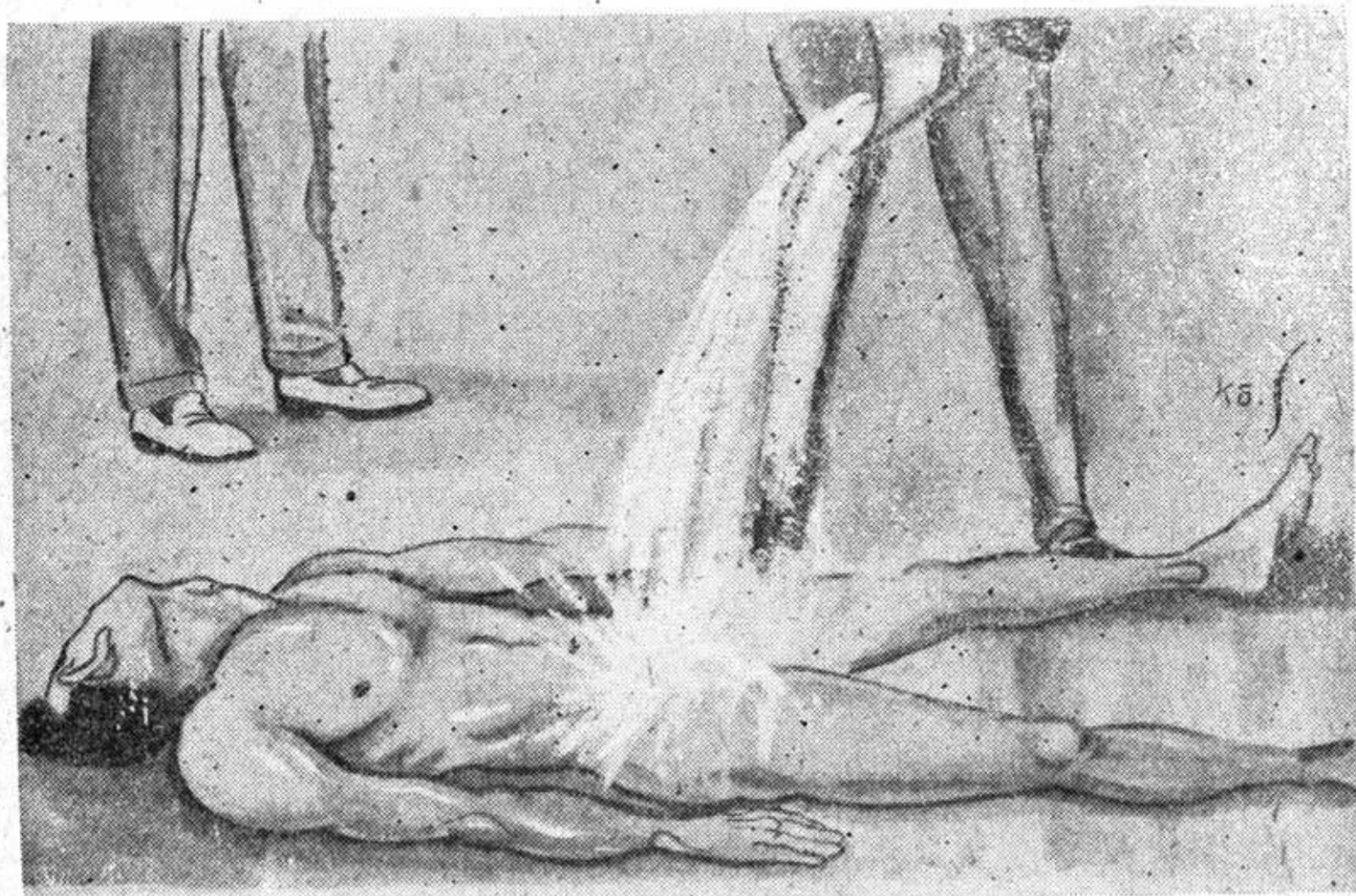
人権蹂躪にひとしい待遇を受けた場合、特権意識をもつ人間ほど、その被害の感じかたが強い。たとえ、一時の虚名ではあっても、スターの名声は、大衆の上に君臨する王座である。

慎之輔の無礼きわまる一方的な行為は、もはや、尾瀬には、赦し難いものだった。

「そりゃア、俺だって、人気稼業だから、ファンは大切に思うし、好意的にも努めるよ。しかし、こりゃアなんだ。冗談にしたってひどすぎる！」

怒りに蒼ざめた尾瀬は、声を顫わせて、慎之輔を睨んだ。

「尾瀬さん。あんた、たいそう立派な口をきいているが、今夜は俺があんたの駄を買ったんだぜ。金で買った以上煮て食おうと焼いて食おうと俺の勝手



だと思いがね」

冷笑を浮かべて、慎之輔は、足許の尾瀬を見おろす。

「金は返す。俺は感違いをしてたんだ。とにかく、早く縄をといてくれ。寒くて凍えそうだ。このまま帰してくれれば、俺も今夜のことは水に流そう」

腹をたてながらも、まだ慎之輔の本性を知らぬ尾瀬が、甘く考えたのも無理はない。

「チュッ、なんにも判っちゃいねえんだな」

嘲るようにいった南が、靴の先で、

尾瀬の頭をこづいた。

「失敬な！俺を本気で怒らせる気か」

「フフ、こんなことぐれえで怒ってたらいまに怒りきれなくなるぜ」

いいおわるなり、尾瀬の駄を俯伏せにした南は、背中へ逆に跨がって尻を据え、動かぬように押さえつけた。

山科は、天井の滑車からさがったワイヤ・ロープの先の鉤を尾瀬の禪のみつぐりへひっかけ、登山ナイフをだして、足を括った縄をプツリと断る。

山科からナイフを受けとった南は、

尾瀬の手の縄を断ると同時にピョイと跳び退いた。

もし、尾瀬が、すばやく立ちあがっていたら、禪から鉤がはずれたかもしれないが、杉田の操作するロープに、急に腰をひかれたため、重心が上体に傾き、両腕がそれを支えようとして、四つん這いになってしまった。

しかも、手足はすぐに床を離れ、

「あッ／＼アア……」と叫んで、尾瀬は次第に吊りあげられていく。

七〇キロの体重が、禪一本にかかるから、みつぐくりは十センチ以上も腹から浮き、その分だけ反対側が締められて、晒が腹部に食いこみ強く圧迫する。

尾瀬は、無意識に手足をバタつかせるが、それは、かえって、圧迫にショックをあたえる結果となり、

「うッ／＼」「うッ／＼」と呻きつづけた。

吊り責めの中では、腹部に体重をかける方法が、もっとも安全で苦痛も少い。だが、それは、腹に幾重にも布を巻き、その上から太目の縄をかける場合であって、禪を応用して吊るのでは、とても長時間は堪えられない。

暴れても苦痛を増すだけだと気づいた尾瀬は、手足をブランとさげて、おとなしくなっ

たが、そうすると、見られているという意識は、いっそうハッキリし、屈辱のあまり血が逆流しそうだった。

「どうだ。いい気持だろう」

そう慎之輔がいったのは、からかい半分に物理作用によるものを指したのかもしれないが、マゾヒストならともかく、ノーマルな男には、苦痛だけしか感じる事ができないものだ。

尾瀬は、額から、ポタリ、ポタリと、脂汗をおとしはじめると、

「も、もう、がまんできない。助けてくれ／＼お願いだ……」

喘ぎ喘ぎいって、あとは、すすり泣くように呻いた。

「そうだな。ただ吊っていたんじゃ興が薄い。おろしてやるよ。しかし、念のためにいつとくが、私刑はまだおわたんじやないぜ」

「早く、早くおろしてくれ」

眼の眩みそうな思いの尾瀬は、あとのことなど考えてはいられなかった。

ほとんど床に叩きつけられるような勢いでおろされた尾瀬は、待ちかまえていた山科らによって、またも押さえつけられた。

山科は、禪の、前袋を二重にして後へまわ

した部分の結び目をとくと、その端を、いま抜いた鉤へ、しっかりと括りつける。

それから、腕を後手に縛り、南と二人がかりで、尾瀬の軀を仰向きにすると、手をあげて杉田に合図した。

ふたたびロープがあがり、尾瀬は、ズルズルとひかれて半吊りの恰好になった。頭は床についているものの、逆吊りの惨めな姿である。

それだけなら、宙吊りと違って、屈辱さえ忍べばいい。だが、それは、きわめて残酷な拷問のための準備でしかないことを、尾瀬はすぐに知らされなければならなかったら。

別室から、水差しを持ってきた南が、いきなり、尾瀬の鼻腔にタラタラと水を垂らしたのである。

とたんに、気管へ水がとびこみ、尾瀬は激しくむせかえった。

反動でロープがピンピンとひかれる。

水差しの水は、鼻から口へ、口から鼻へと移動しては、間断なくチョロチョロと流れてくる。口を結ぼうにも、気管をつきあげてくる猛烈な咳嗽は止めようがない。

尾瀬は、顔面を真っ赤にし、閉じた瞼のあいだから涙を流しながら、身を振り、頭を床

に打ちつけて、咳きこめつづけた。

両脚は、苦しさのあまり宙を跳ね、鉤に結んだ晒は、いまにもちぎれそうに揺れ動く。

「苦しい」と叫ぶこともできぬ苦悶を、全身で示そうとするように、逆さでのたうつ尾瀬の姿は、正常な神経の人間には、正視するに忍びない光景だった。

まったく、わずかの水が、大の男をこれほど激烈に苦しめるとは、信じ難いくらいである。

やっと水差しの水がなくなったときは、もう精も根も尽きはてたように、尾瀬は、グンニャリとして、半ば気を失いかけていた。「チェッ、汚ねえ野郎だ——」

近よった杉田が大仰に顔をしかめた。

「フフ、よほど苦しかったとみえる。水をぶっかけてやれ。そうすりゃアしょうもつくだろう」

そういうと慎之輔は、責めのあとのせいせいの表情で、たばこをとりだした。

バケツをさげてきた杉田が、ザブツ、ザブツと水をかける。

「うう……」と微かに呻いて、尾瀬は軀を動かした。

「尾瀬さんよ。大分まいったようだね。スクリーンで颯爽と暴れまわるあんたも魅力があるが、そうしてのびているところもなかなかイカスよ。さてと、一ぶくしたら、次のカット

にかかろうか」

獲物を颯る猫のように、慎之輔の言葉は、どこまでも冷酷である。

「ま、まだやるのか、もう、勘弁してくれ。明日は、撮影もあるんだ。仕事にさしつかえるようなことがあったら、困るんだよ」

スターの傲慢さも、いまは失くして、尾瀬は、ひたすらに哀願するばかりだった。

「なアに、ほんのワン・カットさ。それがすめば楽になる。苦しいのも、ちょっとのあいだだ」

尾瀬は、諦めたように黙ると、もちあげていた頭を力なく床につけた。

彼の思考力が、いま少し働いたなら、あるいは、*「楽になる」*ということが、どんな恐ろしい意味をもつものであるかを覚ったかもしれないが、それには、あまりに身も心も疲れはてていた。

もう、軀の自由を束縛するものはなににもないというのに、グッタリとした姿を六つの眼に曝すにまかせたまま、尾瀬は、虚ろな瞳を天井に向けているのだった。

(以下次号)

懸賞募集

〈読者原稿〉 〔告白と手記と体験〕

☆賞 金☆

優作 一篇に付 一万円

秀作 " 五千元

佳作 " 二千元

選外 本誌三月分進呈

一、必ず未発表の自作であること。

一、枚数には制限ありません。

一、原稿の第一頁に「懸賞告白」とエンプツで書いて下さい。

一、締切は別に定めません。入選作は最近号より発表いたします。

一、賞金は掲載一カ月後にお送りいたします。

告白

我が憧れるもの

藤 森 一 成



そういう私は最近好みの相手がみつかったの
千賀子という

ストリップやヌード写真が、どんなに挑発的であろうとも、なぜか私には、そんな露出性のものには感情が湧かない。豊かな乳房やヒップのあたりの曲線が、よし彫刻のように美しくとも、それは単なる異性の身体の一部分とししか考えられないのである。ましてや、

閨房の秘事に属する営みを、あからさまにした春画やその種の写真などは、見るのさえ臆劫だし、第一、そのもの自体に最初から関心を持っていない。

と、いうと、私がいかに聖人君子か、さもなければ木石のように見えるが、これで異

性に対する関心は決して人伍に落ちないつもりである。では、女性のどういうところに魅力を持つか、ということになるが、その前に私は私なりの感覚をまず呼びおこし然る後に次第に嗜虐的な秘密の窓をひらいてゆくことにしよう。

世に四十男のしつこさというが、私もご多分に洩れず執拗である。しかも、花ならば七分咲きといった女盛りが好ましい。殊に和服に似合うスタイルがよく、それも外股では興がなさすぎる。総じて柔軟なふくらみを見せており、その上に色が白ければ申し分ない。

この種のタイプは少々顔が丸く、足首の筋肉がむっちりとしているものだ。つまり和服がよくうつる所以も、そういった特徴が出ているからで、これが八頭身型というか、特に脚線の恰好を装う向きには、あて嵌らぬというものである。

従って、その性質も大抵は温順である。間違っても、膝を組んだり乱暴な口を利いたりするような中性じみた態度をとることはない。そこで、女のどこに魅力の焦点をおくかという点、私の眼は胸や腰のあたりの隠れた起伏へ向うより、先ず頸筋が整っているか、どうかを見きわめる。その皮膚が心持ち、ぼったりと見えるくらい肉づきを見せながら、しかも、すっきりとして

いるのがよい。斑点や傷跡もなく、すべすべとふくよかに円く伸びている襟元の美しさは、女性の身体のどの部分にも増して情感がある。

観方が主観的だというのは勿論承知しているが、こういった上玉でも洋服だと私にはぴたりとしない。前をキチッと合せた襟の間から、ふっくらと浮かび上がった白い皮膚に私は言い知れぬ情感を覚えるのである。

街を歩いていて、ひよいと自分の思う襟元に視線が止まると、まるで物の怪に憑かれたようになって、ふらふらとついてゆくことがある。そういう私は、最近好みの相手がみつかったのだ。千賀子というその女は市内のT旅館の女中をしていたが、とりわけ肌が白く紺地の銘仙がよく似合った。彼女とのそもそもの馴れ染めは、こういう動機からである。

或る春の日、私は組合の幹部たちと夕食を共にする機会を持った。お定まりの酒が出て、その時私の前に座って酌をしてくれたのが千賀子だった。思わず顔を見た瞬間、私の動悸は年甲斐もなく高鳴り始めた。白い襟首にくくったような二本の筋がくっきりと見えた。下地が余りいけない私は酒のつき合いはそこそこにして、酔いをさますふうを装って廊下に出た。

もう四辺は薄暗くなっていて、テレビ塔の広告ネオンが五色の光を明滅させていた。

口の中で(そろそろもう上ってくる頃だが)と気にしながら窓を開けると、早春とはいえず鶴見下ろしの西風が寒々と吹いて来た。

「お気分でも……」

すぐ側で聞えてくる声に私は慌てて瞳を向けた。燭をした銚子を膳に乗せて立ったままの女に何か云ったかも知れなかったが、それよりも寄りかかるような姿勢で背後に回ったほうが早かったようだ。そして両の手を女の胸に廻しグッと力を入れた。温くて柔かい感触が指先を通して伝ってきて、私はそれを全身に味わいながら締めつけた。

「もういやッ、お酒がこぼれるワ」

泣き出しそうになった女の身体を漸く解放してやると、今度は耳許に口を寄せて「後で話があるから」と囁やいたものだ。

それ以来、私と千賀子は急速に接近していった。度々デイトを楽んできたが、どういふものか最後のものに手を出すことはしなかった。そのうち女は私の性癖に馴れてきて、いっしょに催眠術にでもかかったようにその雰囲気の中に浸ってくるようになった。二人だけにいる時、私は十分な仕草を行って、その反応を今か今かと試すようになった。

もうその頃になると、私もまた単に苦しめてやるだけでは物足りなくなり始めていた。いじめていじめて、いじめぬいてやりたいサジストぶりが身をやくのだった。しかし、ど

んなに高潮したときでも、決して惨酷な真似をすることは差し控えたし、そうすることが一入快感を齎そうとは思わなかった。

千賀子は細紐で両腕を後に縛られると

「もう絶対に音を上げない。あなたの好きなように虐めて——」

と言って私を流し目でにらんで、畳の上をごろごろと転る。仰向けになったとき裾の内側から真白な太腿があられもなく露わに私の目にうつる。足袋をはいてない足の指の一本一本がまるで蚕のような白さでふっくらとしていて、身体の動きは止ったのに足の指だけが足の裏の内側へ曲げられたり、逆にそり反ったりしている。

「どうかな、一度でも声を出さなかったら、何でも買ってやるよ。我慢できるかい」

私はのけぞっている顎に左手をやって、白い喉首に無難作に掌をやる。千賀子は眼をつぶって必死に耐えようとしている。擦りは最初に擦ったいと思ったら、もう負けである。みるみるうちに充血していく顔が苦悶の表情を作ったかと思うと、まだまだ、もっとと云わんばかりに顔を思いきって伸ばした。

次に私はなだらかな軟骨をまさぐるようにて捉え、そのあたりをグリグリとこね廻した。すると擦ったい感触が全身を襲うらしく、声にならない呻めき声を洩してはバタバタとのたうった。真白い喉が指跡や爪型に彩

られて赤く染った。それでも強情にも千賀子は参ったとは言わなかった。

それにしても、この柔かさ、この弾力はどうだろうか。まさに深淵に引き込まれそうな陶酔境だった。その幻惑された神経は、いつしか指先の知覚をさえ忘れさせようとした。私は狂気のようになって襟元を押しひろげると乳から脇の下へと、そのむずがゆい指先を這いめぐらしていった。

ムズムズとした気味の悪い触手がまつわりついてくるかと思うと、嵐のような烈しい暴力が肌の上を荒れ狂うのだ。身体を反らそうが身を踴めようが、そんなこと位で、この執拗な擦りの攻撃を防げるものではなかった。いや、もう、それは擦りというよりも、捻りまわし握りまわし、肌をこねまわすという方が早かった。しかし、それでも、千賀子は身をよじり足をバタバタさせるだけで、許してくれとは声に出して言わなかった。一言、止めてくれと言え、すぐにでも私は止めるつもりだった。彼は私の掌の運動の止むのを恐れでもするかのように声を出さなかった。

このプレイに心ゆくまで満足を味った私は漸くのこと女を縄を解いてやった。千賀子は乱れた着物の前を合わせ鏡台に向ったが、今の今まで演じて来た狂態にはケロリとした面持でせつせとコールドクリームを顔に撫でつけておるのには、私の方が驚いた。

「ひどいことするのは嫌、ヒリヒリするじゃないの」

といって見せた喉のまわりから胸元にかけて少し充血してピンク色に染っていた。しかし別に嫌なふうでもなく、くっきりと抜けるような白さの襟元を見せて私に身体をすり寄せてくるのであった。

間もなく私は千賀子に一軒、家を持たした。そういう間柄になってからでも、この私の習慣は少しも衰えようとはしなかった。いや、このプレイがあったればこそ、千賀子に強くひかれるのかも知れない。仕事関係の友人がゴルフに凝ったり、碁、将棋、麻雀、魚釣りなどに夢中になっているのと同じように、私は千賀子とのプレイに夢中になった。

働き盛りの私には関係している会社事業も五指を屈するほどで極めて忙しかったが、千賀子を得てからは、益々精力的に仕事に熱中できるようになった。千賀子に使う金ぐらいは余分に儲けてやろうという気持だったのがトントン拍手に仕事の方もうまく進み、誰も品行方正の堅物で通っている私が、水商売上の女を囲っているなどと云っても信用しなかった。

ある時、千賀子の手足を一緒にして縛り、猿ぐつわを噛ましたことがあった。あとで聞くと猿ぐつわの味はやられてみないとわからない位素晴らしいと云った。

またある時は、首の辺で結んだ袋に入れて部屋中を転がしまわしたこともあった。寝台の外に上半身をのけぞらして放置したこともあった。

着物をキチンと着た時の図だとか、上半身裸にしたり、腰巻一枚の図だとか様々のポーズを試みてみた。それらの姿態がすべて襟元の線に帰納し、かつ私の好む魅力を発散させたのは云うまでもない。

そういうもののいろんなムードのうちで、とりわけ選んでいるのは浴衣姿である。襟足の美しさというものは、下着が薄ければ薄いほど増してくるもので、殊にそこがキチンとしているのを見ると悩ましくさえある。甘い芳香が漂っていきそうな、ほんのりとした感じがする。

それからの私のテクニクは種々の研究と実験が繰り返されて次第に洗練されたものになった。全身がぼろぼろになるような苛酷な責めにも彼女の若さに満ちた肉体はよく耐え愈々健康美を益してきた。しっとりとした湿りを帯びた肌は少しぐらいの縄あとなんか、二三時間であとかたもなく消えた。もっとも浴室が備えてあったので二人以外、誰憚ることはないのだったが――。

(おわり)



私は貴誌十年來の愛読者にて、嘗て座談会にも出席させて貰ったこともあり、未だにその時の会合の楽しさが印象に残って離れないであります。私達はその趣味の上に於ては全く孤独なものが多くありまして僅かに貴誌のような機関雑誌が刊行されていますが、同好者の存在を確認することが出来るという状態であります。

嘗て座談会に出席いたしました際も全く一面識もない、否、その本名すら十分知り合っていない間柄でありながら、共通の話題を持つということのために十年の旧知のように語り合うことが出来たということは、如何に皆が同好者の会合に飢えているかということを確認しているようで私自身驚いた位です。

然し東京で暗会が摘発されましたように金銭的な問題や風紀的な問題がとかく指弾の的となり易い

ので以前私達が参加しました座談会のように全然会費が無料というのが理想で、少くともこの点でトランプの起らない方法が必要だし風紀については暗会の例を待たなくてもなく、売春禁止法や公然わいせつ罪に触れぬよう注意しなくてはならないことは言うまでもありません。

それで一切の経常費は貴誌に於て負担して貰うとして、会社の寮といった形式で、宣伝費とか或は他の経費で落して会員自体には直接負担をかけないという方法は如何でしょうか。

一、会館。都心を離れていて、しかも比較的交通の便のよい別荘風の会館を購入又は建設します。敷地は邸内撮影会などの便宜を考え

二百坪乃至三百坪位を必要とします。若しミニバスなんかを専用として備えつけることが出来たら、交通の不便を忍んで、うんと郊外で地価の安い所を選んだ方が有利かも知れません。

二、会費は先に述べましたように一切貴誌の負担として会員からは徴収しないことにします。これによって金銭的なトラブルを防ぐことが出来ると思います。会館の維持費としては使用人等の給料を含めて相当の額に達することと思いますが、営利的に経営するものではありませんから、基金の利子等を充当することにします。

三、毎月一回、通常の例会を行います。春秋或は夏休、冬休等の休暇を利用して特別の会合によって、座談会、懇談会、撮影会などを開催することにします。その他会館は随時会員相互の行事のために開放されることは勿論です。会費が一切無料なのでから、誰が多く利用し過ぎるといったトラブルは起らない筈です。

四、会員。会員は厳選する必要が

あります。正会員、臨時会員、賛助会員、特別会員といった種類を設けてもよろしいが、中心はあくまで正会員とします。現在ゴルフクラブなんかでは、一名或は一口五十万円乃至百万円（七十万位の所が多い）の入会金をとっています

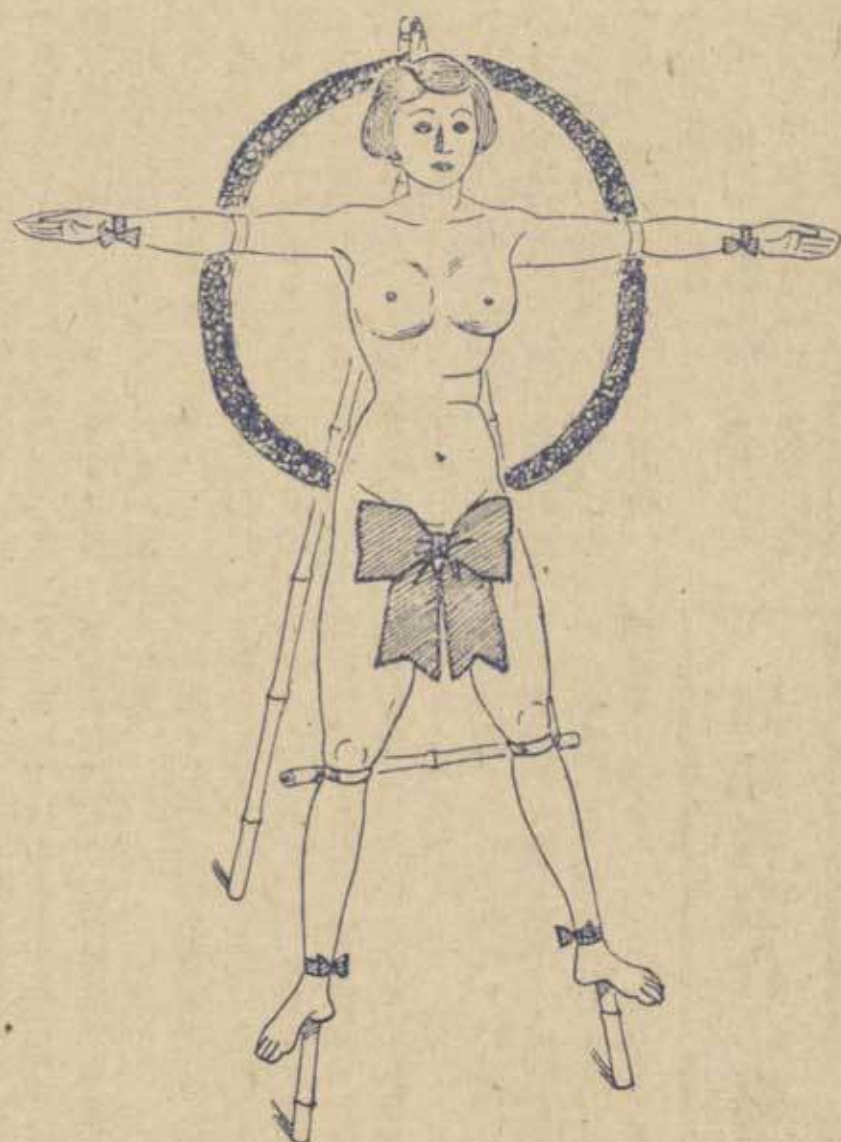
が、正会員は少くとも百万円以上拠金出来る者を以て第一資格といたします。会館の建設や基金の準備のため、入会者は多い程よいのですが、余り多数になると会の運営に支障をきたしますから、二十名乃至三十名というところが適当だと思われまゝ。其の他所定の入会金を納めることの出来ない人

のために臨時会員或は賛助会員という名目を以て熱心な方を入会させますが、十名位を限度として数は増さないことです。五、運営は貴誌に一任するか、或は奇譚三十九夜のように正会員中より選んで順番制とするか、若し許せば辻村隆氏のようなベテランに委嘱すれば面白いかもしれせん。とにかく会館を中心とした楽しい会合が常時、開かれることと思ひます。

この私の提案に対して賛成の方は、どしどしその御意見を申し述べて頂きたいものだと思います。

同好者会合の提唱

堤 守



△私のアイデア▽

奇妙な磔縛り

渥美広人

人間花輪

「磔」というものは無防備で全身が晒されているというところに、非常な嗜虐味があるのですが、次に新しい趣向の磔縛りのアイデアばかりを御紹介します。

これは磔といっても大の字縛りの変型ともいうべきもので、あの祝賀や弔事に使う花輪のかわりにこんな「人間花輪」のプレゼント

はいかが？材料は花輪の両脚、後支えの柱、横一文字の横木、全裸の乙女。女の両脚は横木に水平に縛り、両脚はところもち開いて花輪の脚に足首を縛りつける。祝賀の時には体の周囲に造花を飾り前には大輪の造花を一つ、胸の谷間には「祝」の文字。その下に贈主の氏名。弔事には飾りをつけず、前に黒の大きなリボン、手首足首も黒紐にて縛る。胸には「弔」その下に贈主の氏名。

美容機械体操

T型縛りの変型で横木の両端に金輪のついた十字架。

材料は背丈よりやや短い目のロープ二本、八疋位の鉋り数個乃至十数個、全裸の乙女。十字は横木の高さが女の頭の位置。二本のロープに鉋りをつけ金輪を通して女の両手首に縛る。ロープが短いので鉋の重味は女の手首にかかり恥ずかしがる乙女の意志にさからって乙女の両腕は左右に開き身体は宙吊り、乙女が懸命に力をふるえばどんな姿勢にももどれるが、その都度、鉋を重くする。
腕の左右開閉、全身の前後屈伸などの運動を繰り返した末に、乙女は力つきて磔の態。全身運動

マゾ短歌

女王様の

うたえる

山本節夫

○ お助けと両手合わすを容赦なく
スカート捲り馬乗りになる

○ おとなしくお馬になれよきかな
いとこのまま息をとめてしまおうぞ

○ 絶え絶えにわが尻下に許し乞う
やせ馬見下し鞭うち鳴らす

○ まっさきにお前を馬にしてやる
うよしと言うまでしっかり走れ

○ 御仕置に顔乗りすれば苦しげに
吐く息われの腿をくすぐる

○ 人馬を巧みに御してゆくわれの
脚美しく鏡にうつる

○ 堪えかねて股すり抜けて逃げて
ゆく獲物追いかけてまた馬乗りに

○ 女王われ尊き御足いただきて嬉

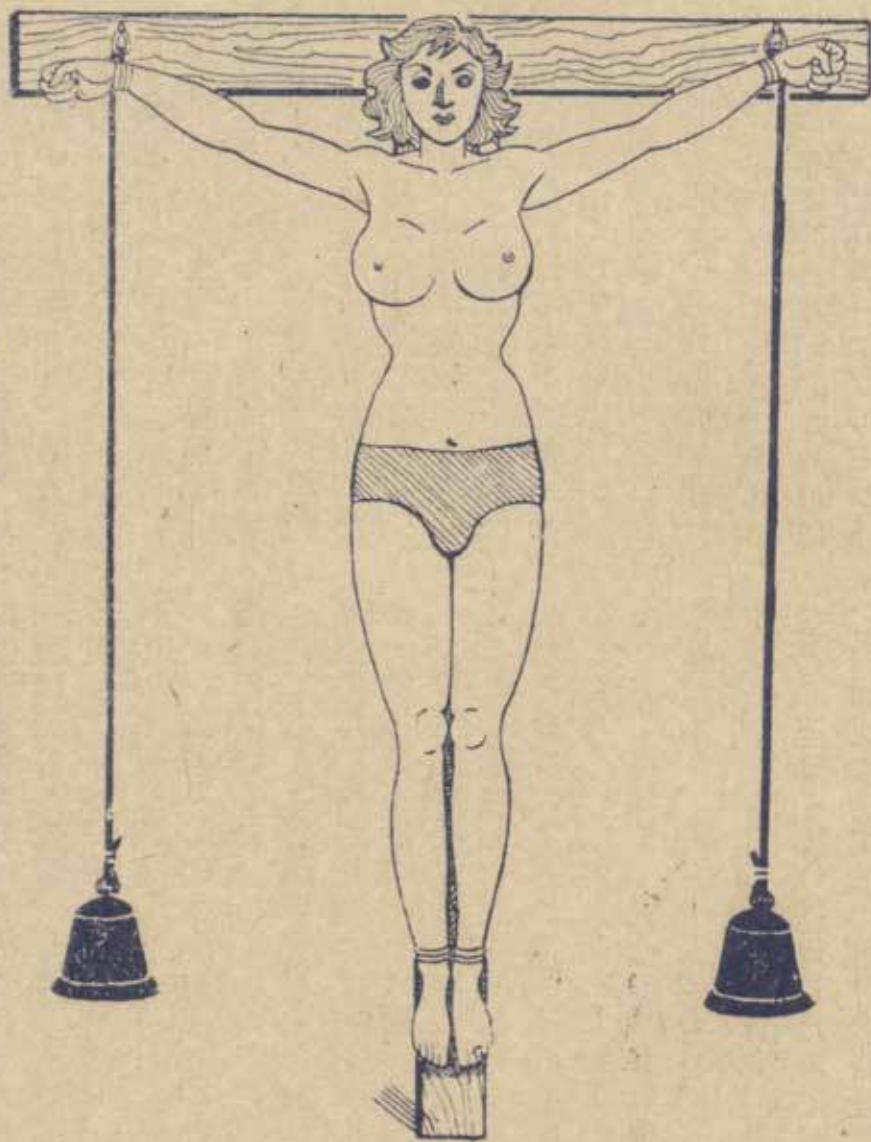
故に美容体操になること請合。

繰り人形

材料は小さな十字柱、数本のロープ、同数の滑車、全裸の乙女。

十字柱は横木の長さが女が手を左右にひろげた両脇まで、縦柱が頭から腰まで。下端に金輪がついている。

女をその十字柱に二の腕、肩から腋下にX型にタスキ掛け、胴の三個所を固定して胴の繩は繩尻を股間縛りにかけて背後の柱の金輪に通す。天井に滑車を吊り、これからロープを垂らして女の両手両足首を縛る。そのロープの端を握ってさまざま繰人形。両脚を左右に大きく開かせて、その時のロープの長さで股間縛りの繩と連結すれば、股を縮めればその繩を締め上げて苦痛を感じる。



また両手を水平に開いた時、別のロープで手首から金輪を通して頭髪を後で束ねておく。両手を吊

れば髪は後へひかれるので、両手を懸命に横に張れば身体は宙に浮くという仕組（おわり）

「読者サロン」の

原稿を募る

読者サロン向きの原稿を募ります。御遠慮なくドシドシお寄せ下さい。掲載の分には薄謝を呈いたします。

しさに泣く奴隷あわれ

○ パンティに乘馬靴の軽装で心ゆくまで人馬せめる

○ 嫌がって逃げまどうのを組敷いて無理矢理馬に這わす楽しさ

○ どつかりと跨がる下にくぐめいて男は哀れなるものかな

○ 打ち下す鞭に悶える人馬を靴の裏にてしかと踏まえる

○ 乗馬靴その胴腹で首締めば悲鳴を挙げて涎たらしめ

○ 素足をば拝ましてくれと近寄るをいやという程蹴る面白さ

○ いじめればいじめる程楽しげに

慕いくる男いとあわれなり

○ 美しき女神よわれは男の子たちあがめまつりておろそかにすな

○ 後光さす肌にくらみて目なえせし奴隷は土に這いつぱれり





＜読者サロン＞

浣腸と尻打ち

野尻 馨（高知）

特に豊かなヒップを責めるものを中心に、その他かきりなく、にくらしく責めさいなむ趣向のもの。この点からして三月号の流れい子画「継子いじめ」は実に特筆すべき図柄で、尻打ちの趣向にして、もう一度、来月号に掲載してもらいたいものです。三月号を買ったのは、この画一枚あったためといっても言い過ぎでないくらい嘆賞すべき図柄でした。

三月号、四月号書店にて購入拝読いたしました。私は次のような趣向を全面的に支持し、又そんな種類の写真や絵、小説、文章に出逢うと矢も楯もたまらなく欲しく思うものです。

貴誌の読者の中にも、いろいろの変った傾向の方々があると思いますが、その人達もやはり自分の好みのものを出来るだけ沢山載せてほしいと考えるのは人情でしょう。甚だ勝手な願いなのですが、私も貴誌を読んだり見たりする時も他のものには興味がありませんので、出来るだけ次の趣向のものを多量に掲載して欲しいと思います。

一、女性が同性をいじめるもの

て欲しい。写真では四方清美嬢をモデルにした浣腸写真を撮影してもらえないでしょうか。

四月号の三条卓史「女優志願」中の乳責やら尻をサーベルで容赦なく突くくだり、庄巻白眉の名場面、もっともと春美が由利を責めつける場面を展開してもらいたかったが、由利が排尿する場面の描写もなく、責めもなく終わったのは残念、この種のもの、もっと続けて盛沢山にして欲しい。

二、浣腸の記事

四月号の乾長好「浣腸の憶出」では、ちょっとA子に浣腸されるシーンがあつてよかった。浣腸する場面の画を流れい子さんに書いて欲しい。

市場通いの若い子が縞のパンツにサンダルで、買物籠をぶらさげて果物店で立っている。

○ すらりと伸びた脚線美、素足の白さ目にしみて、思わず見とれうつむけば、赤いリングが転った。

○ 可愛い頬にえくぼ見せ、拾ってくれた白い手が、いついつまでも忘れられず、人混み分けてついてゆく。

○ 母が病で、そのかわり市場へ来たか、買い終えて愁いの目じりうるませて、足早やに行く午さがり。

○ こんな娘を幸せにしてやりたいたいと思えども、心ひかれる白い肌、目にちらついて離れない。

○ 家の前まで来て別れ何も言わずに帰って自分の心が悲しくて思わず知らずほぞかんだ。

真昼の幻想（七五調）

H・M 生

〔告白〕

毛糸の誘惑

西条 佐渡

私が妻の好子に実行している変った「責」を書いてみたいと思います。それは一言にして言えば、「乳首責め」又は「毛糸責め」と呼ぶもので、本当は木綿のタコ糸のようなものを用いたらよいのですが、先にも申しました通り私が自分の愛妻に対して実行しておりますので特に当りの柔かで伸長性のある毛糸を使っているのです。

(一) 五十糎位に切った中細の毛糸の一端を乳首に二、三巻きして括ります。もう一方の乳首も同様に丁度、両方の乳首の間がピンと張る位に括ります。

(二) 左右に垂れ下った毛糸の端を交互に引っ張りますと乳房が乳首を中心として右へ寄ったり左へ寄ったりします。

(三) 両方の乳首の間に張った毛

糸の中程に他の毛糸を結んで吊りますと乳房は乳首を中心にして引き上げられます。

(四) 垂れ下った両端の毛糸を両乳首の中心あたりで結びます。そして二本の毛糸の間へエンピツを通してくると捻ってゆきますと、さて、どうなるでしょう。

(五) この際、妻の両手首を腰の辺りで腰紐なんかで縛っておいて自分で毛糸をほどけないようにしておきますが、両手は自由にしておいて、若し勝手に解いたりしたら改めて罰を加えるという約束をしておいても面白いと思います。

(六) この「毛糸責め」というのは材料として、鉛筆と毛糸だけという極めて簡単なもので、それでいて、やり方によっては色々中々変った方法があるものです。

例えば手拭で目隠しをしてからこの毛糸責めをやると、妻は自分の胸でどんなことが行われているのか皆目わからないので、非常な不安と期待にさいなまれることになります。

これは、私の体験のほんの一部なのですが、まだまだ此の他にも試みたものがありますので、いずれお送りしたいと思います。



データー F8 1/4 ベロナ焼付

<通信>

或る女装ポーズから

和 葦 憂 子

編集長様

先日来、小春日和でしたのに今日は雪がちらついています。このあいだお送りした手紙に申していました様に私の女装写真、昨夜、引伸をいたしましたので早速送らせていただきます。割合、美女に写っている様に思えるのは、ナルチシストの心からでしょうか。いかがです。是非K誌に載せて下さる様に。女装というのは、やはり文章よりも『見る』という事が重要で、多くの女装ファンが望んでいられるのも、もっともなのです。縛りも少しあったのですが、自分一人では、まだ発表するようなものではないです。

三月九日

京都 和 葦 憂 子



憲兵の如く

少年受難シリーズ 烙印 (らくいん)

三木 隆 画

反戦思想の持主だという烙印を押された中学生石浜修也十七才、学校からの帰路、突然、二名の憲兵の手によって逮捕された。全く身に覚えのないことなので修也は全面的に否定したが、戦況

の我に思わしくないのに焦慮した憲兵達は、修也を拷問によってでも白状させて罪に陥れようとした。取調室では下半身、禪一つにされた修也が、憲兵のあくなき暴虐の手によって責められていた。

幼冊奇譚ワラフの御案内

「告白・手記・体験
特集」

定価三〇〇円

(特価一五〇円)

豪華口絵 四馬孝筆

「リクエスト画廊」

読者の希望場面を、独得の画風を以て見事に絵面化する四馬氏の力作十六点を展覧。

グラフィヤ華麗フォト

「希望写真集」

写真部が、マニヤの希望に忠実に従い、麗人モデルと取組んで作成せる特写フォト集。

本文読物

「告白・手記・体験」集
アブニストの声二十六篇

「松井籟子作品集」

定価三〇〇円

(特価一五〇円)

口絵 滝 れい子画

「狐灯画集」 四点

北原純子画

「淫火画集」 六点

四馬 孝画

「四馬孝画集」 六点

グラフィヤ 鮮明フォト

「須川令子被縛独演集」

本文 松井籟子・作

長篇サド小説「淫火」

中篇特異小説「狐灯」

戯れに歌える

石川 豚 木

○ しばられて

若き女の泣くをきく
旅の宿屋の秋の蚊帳かな

○

忘れぬ顔なりしかな

今日街に

捕縄かけられ曳かれし女囚は

○

こころよき疲れなるかな

息もつかず

女をしぼりたる後のこの疲れ

○

どんよりと

くもれる空をみていしに

女を括りたくなりけるかな

○

あたらしき刺激求めて

名も知らぬ

女など今日もしばりあげてき

○

友がみな

われよりえらく見ゆる日よ

縄を買いきて妻としたしむ

＜読者サロン＞

馬 化 狂 通 信 倉 仁 成 人



四月号で私の通信は中止させて
いただきましたが、この事は決して
私が本誌と縁切りになったわけ
ではなく、正直に言って私にとっ
ては、ものを書くという事はどう
やら不向であると感じた事と種々
の周囲の事情や問題もありますの
で四月号の馬化狂通信ともう一篇
のもの（これはF誌に私と同じよ
うな趣味を持たれる一馬化生氏の
呼びかけに対して、同誌に投稿し
たものですが、未だに掲載されな
いところをみるとボツになった模

様です）を最後として一応ものを
書く事から遠ざかったわけです。
さて、前にも述べた様に私は本
誌と縁を切ったわけではないので
これからは読むものより、見る馬
化狂通信として、私のスクラップ
の中から複写したものを毎号送り
たいと思います。内容は映画女優
の乗馬スタイルを中心として、一
般誌及び外国誌の中からマゾ的な
さし絵、漫画、及び女性の乗馬写
真等にしたいと考えます。
尚、複写ですから写真的に最上

とはいえませんが、極く状態のよ
いネガを送るつもりです。出来ま
したならば、昔のように愛読者の
頁としてグラビヤの二頁、いや半
頁、或いは、ほんの片隅でも結構
ですから提供して戴ければ幸いで
すが如何なものでしょうか。量は
一号につき二葉、或いは三葉の割
にして掲載したとすれば一年分は
十分にあります。若し御承諾頂け
るならば誌上にて御返事下さい。

最後に、編集上の都合もあるで
しょうが読者通信等は締切りを一
番後にして、極く新しいものを載
せて下さるようお願い出来ないで
しょうか。それからこれは余計な
ことかも知れませんが、読者の中
には発禁も辞さず相当ドギツイも
のを要求されている方もおられる
ようですが、我々にとっては発禁
処分はもう一度でコリゴリですの
で、くれぐれも自重ある良識をも
った行動をとるよう取越苦勞なが
ら御願い申し上げます。

〔お答え〕

お送り下さるという写真は毎号
掲載できるよう取はからいませう。
う。読者通信はつとめて新しいも
のを発表するよう心掛けています
が更に気をつけましょう。最後の
御要望は言うまでもない事です。



△千字コント▽

奴隷密売団

鵜藤 恵

女は眼にいっぱい涙を溜めていた。恐怖にひきつった愛らしい顔は、流れ出る涙と鼻汁にベトベトに汚れていた。それが男達には、たまらなく美しいものにみえた。食べてしまいたい程、可憐な白い動物であった。全裸の可細い身体には太い麻縄が幾本もグイグイと喰込んでいた。

女は今、人間ではなかった。一匹の哀れな家畜であった。白い美しい牝馬であった。牝馬は冷酷な調教師の如何なる命令にも叛くことは許されなかった。全ての命令に対しては絶対の服従を強要され、飽迄も忠実でなくてはならなかった。しかし、数々の辛い恥ずかしい命令に、一匹の白い動物は遂に耐えることが出来なかった。後に、死ぬ程恐ろしい折檻に、捕われの我身が呻吟しなければならぬということさえも、限らない屈辱の前には勝つことが不可能であった。女は奴隷密売団の厳しい羞恥の調教の前には、所詮、力なき可弱い一人の女であり、調教の文字通り、一匹の哀れな牝馬に過ぎなかった。数人の男女の前で、女は全裸の身に縄を掛けられ、浣腸という、言うも恥ずかしい折檻を受けようとしていたところであった。それが、奴隷密売団という一個の組織内の規則を破った者に対しての、無情なる刑罰であった。一ツの鉄則を犯した、人間の罪に対しての恐ろしい罰であった。そして、それを受ける者全てが女であっ



私の書いた絵

白いイヤリングに黒いさるぐつわ

毎月、巻頭の口絵を飾る四馬孝先生の責絵を楽しく拝見しています。上品で垢ぬけのした美しいタッチで毎月毎月、よくもまあ、これだけのアイデアが次から次へと続いたものだと感じています。そのアイデアの豊富さに於ては、他の追随を許さぬものがあり、私は拙いながら自分でも絵を描きますので、特に関心をもって拝見している次第です。とても四馬先生の足元へも及びませんが、習作画、数枚お届けいたします故、御笑覧下さい。皆、私の自分好みのものばかりですが思っているよりも、いざ筆をとってみると中々思う様に描けません。それに素人のエンピツがきで、きかないですが、意のあるところをお含み下されば幸甚です。

た。奴隷密売団に捕われの奴隷達の中には、一人として男の存在がなかった。若く美しい女達ばかりであった。裸電球の鈍い光りの下に、クネクネと動く長い黒いゴム管は、今は諦めきつてシクシクと泣くばかりの女の前で、不気味な牙を研いでいた。やがて数人の男女の手に依って女はその細い身体に長いゴム管を挿入されたのであった。女の身体から出た黒いゴム管の内部は、今、白く濁った液体がゆっ

くり流れている筈であった。それは、女の体内に次第に注入されていくのであった。ゴム管で浣腸を受けている女の姿は、世にも哀れなものであった。浣腸の苦痛よりも、女にはその屈辱極まりない恰好の方が、数倍も恥ずかしい位であった。悦虐作家、夢野木太郎はそこでペンを置いた。長い間、原稿に向かっていたので、疲労が彼の身体に沈滞していた。そこで彼は思いきり背を伸ばした。「アアア」(了)

魅惑新人モデル袖珍悦フォト分譲

ヌード初縛り

三枚一組 二〇〇円
平野笑子 略号(みい)

全裸股間縛

五枚一組 三〇〇円
岩井知子 略号(みは)

観念の座

三枚一組 二〇〇円
平野笑子 略号(みほ)

開股縛くらべ

五枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号(みと)

ヌード初縛り

五枚一組 三〇〇円
田原美佐子 略号(みろ)

全裸後手くらべ

三枚一組 二〇〇円
平野笑子 略号(みに)

全裸股間縛

五枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号(みへ)

椅子股間縛

三枚一組 二〇〇円
絹川文代 略号(みち)

女性化した男性の肉体

女装したり化粧したりして女性化を計る男性も多いが、最近では肉体的にも、豊満な乳房、ヒップ等を望んでなんとか女性の肉体に近く変化させたいと願う男性が増えてきた。嘗て本誌にも食事やホルモンの注射等によって女性化を企画した実験報告の掲載があったが、ここに紹介する男性のヌードは、多分に女性化に成功した実例である。先天的に女性に近い肉体を有

していたのかもしれないが、面白い例である。



△読者サロン▽

襦袢フェチ通信

関根 彰(東京)

赤井茂様へ

四月号にて小生への御意見嬉しく拝見いたしました。小生の拙い手記『おむつカバー雑考』は、おむつカバーに関する種々のメモを整理したものです。データが可成り古く編集部宛に送った後で種々調べた所、大分訂正しなければならぬ事に気がつきました。いずれ『続おむつカバー雑考』として訂正させて頂く心算です。

赤井様の本誌に対する投稿は随分古く現在小生の手元にあるバックナンバーをくってみるだけでも五六稿に止らない様で私などに比較すると遙かに大先輩でいらっしゃる様です。小生も思いつくままに又実験等によるデータの集る度に本誌に発表させて頂きたいと思っておりますので赤井様も大いに御投稿下さる様御待ちしております。ピンク・ゴム・ズロースの解説、有難う存じました。ゴム・ズロースに就いては私も同じ様に想像していたのですが、実際にはゴムのみのズロースは腿の所の滑りが悪くうまくはけません。手で裾口をひろげて片方ずつ引上げな

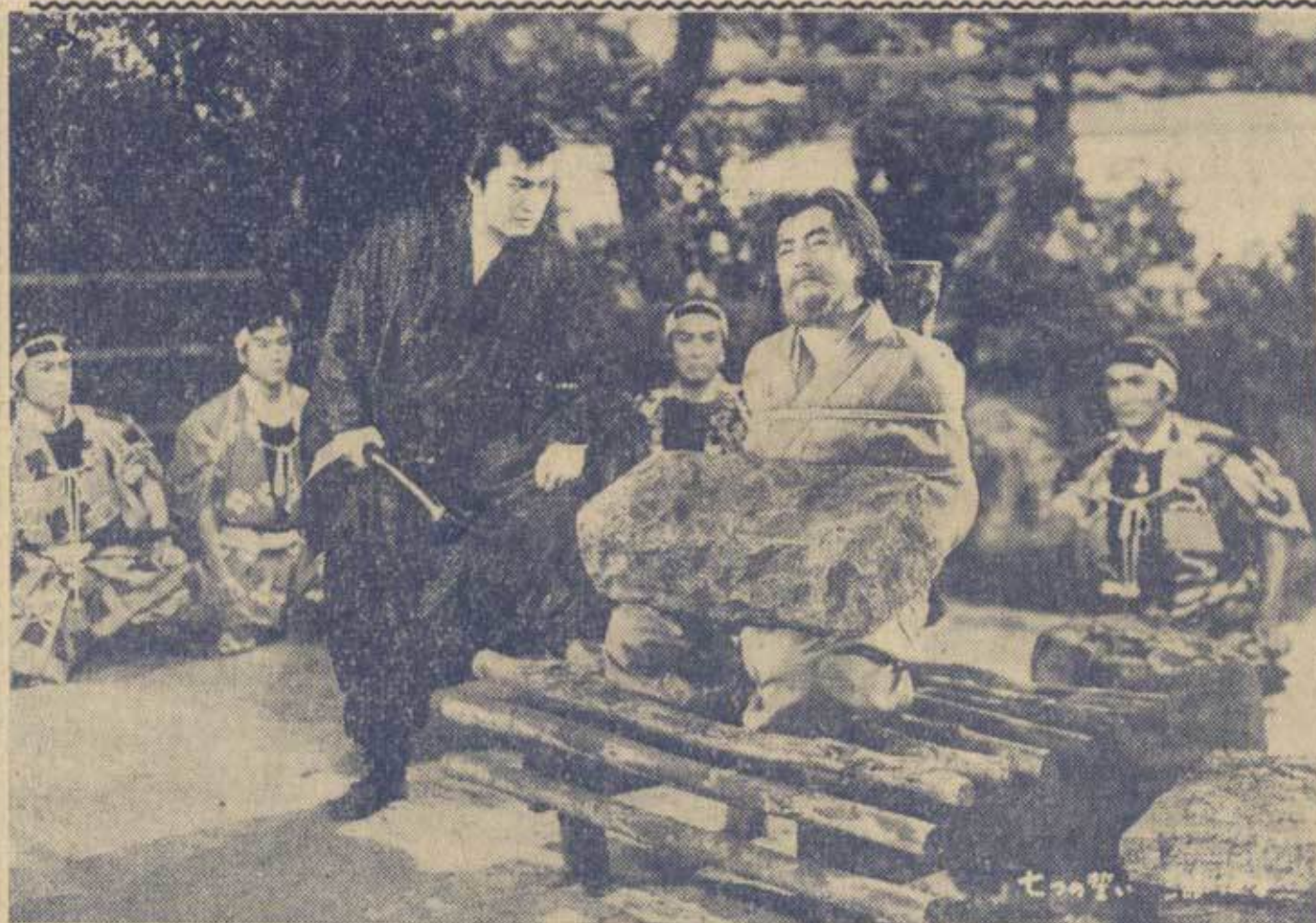
いと、うまくはけないのです。その辺の様子をお聞きしたかったのですが……。

男女別に就いては大体判りました。尚判明した点がありましたら御教示下さい。尚小生は現在所有するおむつカバーの写真を持っておりますので御希望でしたら差上げて良いと思います。

井上正子様へ

貴女の『埋れた日記』興味深く拝見させて頂きました。貴女も小生に非常に近いコースを辿っている様です。小生も小学校三年位迄夜尿症で非常に苦労しました。おむつカバーをあてられた事はありませんでしたが、ゴム引の布地やレザーを布団の上にしいて、その上に古い毛布等を覆って寝かされたものです。そして学校の帰りに毎日医者に寄って注射を受けたのですが、それが厭でどれ位辛い思いをしたことか、今でもはつきり思い出せます。何でもカルシウムの様な身体の熱くなる注射です。それらの事はいずれまとめて編集部宛送る心算です。貴文中に「私は傍観者でありた

映画に現れた男性責シーン



東映「七つの誓い」第3部

一枚二枚と重石を膝の上に積み上げてゆく惨酷な石抱き責め。丸太を並べた上に正坐させられた脛は十数貫もする石の重味でみしみしと骨も砕けんばかりの苦痛が耐え難い。



トクホン利用の猿轡 (お喋りの女学生向)

遠藤 春一

い。投稿するのは危険な事なので
す。云々の言葉が末尾の方にあ
りました。が、そうおっしゃらない
で今後も、どしどし発表して戴き
度いものです。尚、貴女が御希望
でしたら貴女の腰をピッタリ包む
総ゴムのおむつカバーを差し上げ
たいと思います。勿論そちらの御
都合もありと思いますので、あ
くまで貴女が御希望なされたら……
……という仮定の上での話です。

小生は現在おむつカバーを製作
出来る立場にあるので貴女の身体
に合せて(ウエスト、ヒップ、腿
のまわりのサイズが必要です。)の
作ること出来ます。貴女のお尻
をすっぽり包み込む総ゴムのおむ
つカバーの魅力を一度味わってみ
て下さい。

東京(吉田生)様へ

おむつマニヤの傾向がマンネリ
に陥っている事は同感です。その
原因はおむつマニヤのプレイが、
おむつをあてるといふ一つの行為
に限定されている事ではないでし
ょうか。小生はフェチ的傾向にあ
るので、種々な型のおむつカバー
を製作し、その感触を楽んでおり
ます。殊に洋装下着をおむつカバ
ー化したものは非常に変化に富み
日常の使用に何ら支障なく甚だ好
都合です。いずれそういったもの
も書いてみたいと思っています。

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せっかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

肩のこりや筋肉の痛みなどに用
いるトクホンという膏薬がある。
これを猿轡がわりにお喋り好きの
女学生の口へべったりと貼りつけ
ると、あら不思議、ぴたりとお喋
りが止むから妙である。
自分でトクホンはがさないよ
うに両手首を背後で括っておくと
このインスタントの猿轡は、これ
からの彼女のお喋りに対して非常
な効果を挙げることだろう。

文芸作品に松ける

“切腹”の描写について

法 谷 四 郎

文芸作品の中に「切腹」は相当でてきますが、その凄惨な状況をうつしとって、これ程真に迫ったものは、直木三十五氏以来そうなかったような気がしますので、ここに紹介したいと思います。

それは東京新聞に連載中の海音寺潮五郎氏「二本の銀杏」で、全く見事な切腹の描写で思わすうなっていました。

「………本当は臆しているのではないかと、にわかに不安になって来た。大急ぎで坐って、大急ぎで刀をぬいて紙を巻きつけ、腹をくつろげるや、ムッと呼吸をふくんで、突き立てた。

激痛と全身の力がぬけてしまったような無気力感とが、一時に襲って来た。刀をつかんだ手がゆるみそうになる。力かぎりこらえてきりきりと右に引きまわそうとし

たが、うまくまわらない。(しまった！ 突っこみすぎた。作法をはずれた切り方をしてしまった)

と思った時には、ねとねとしたものが指の間にからんで来て、白麻の肌着から薄縹色のかたびらはかままで、吹き出して来た血で緋牡丹のように染まって来るのが見えた。

切りなおそうと思って、刀をぬこうとしたが、腕はしぼりつけられたように重かった。

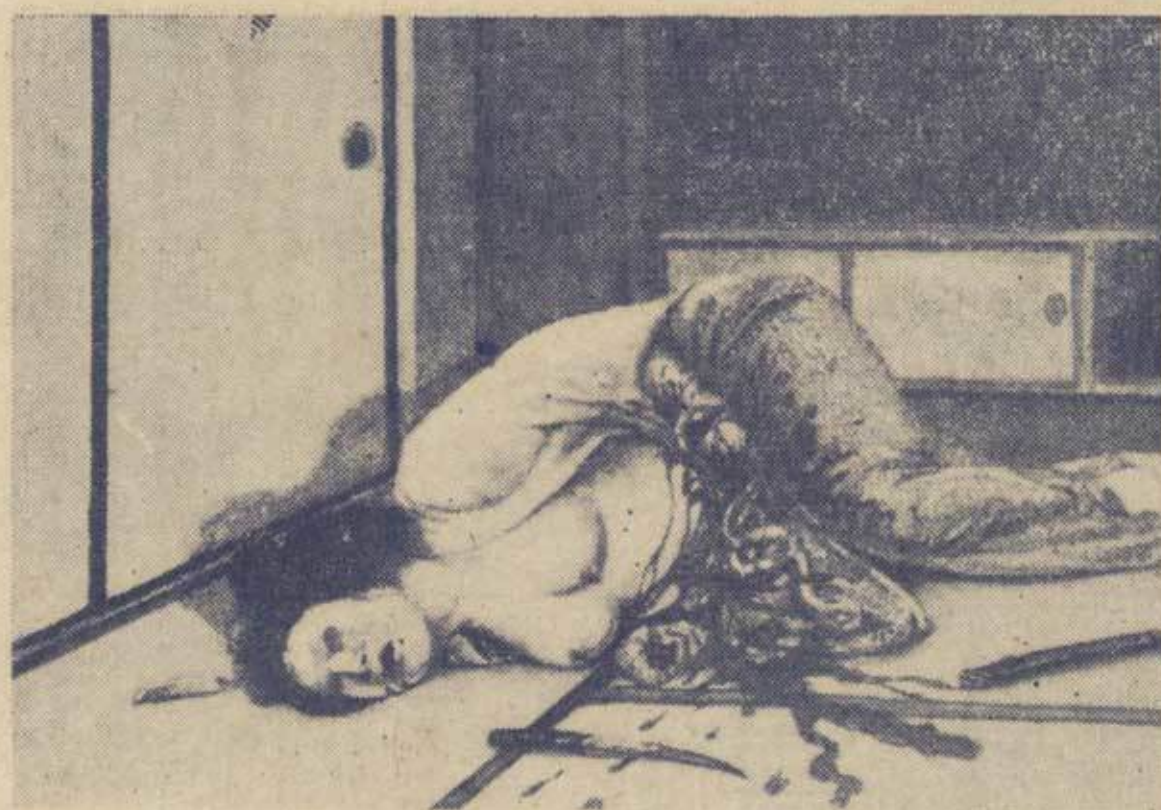
このまま切るよりほかなかった「むうッ………」

とうなつて、力をふりしぼって右に引きまわした。全身がふるえあごがガクガク鳴り、ひたいの汗が筋を引いて走り、したたり落ちはじめた。

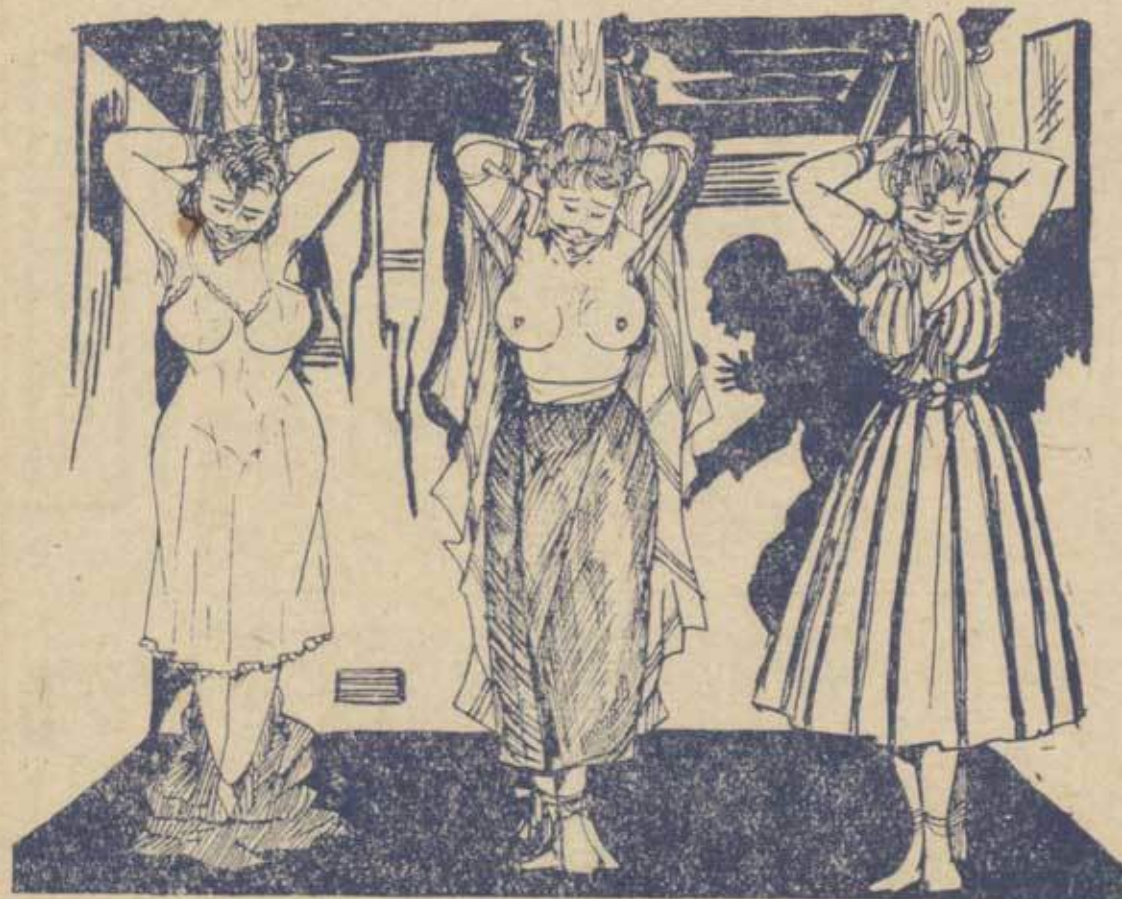
陰惨なうなりを上げながら、呼吸をはずませ、やっと切った。

ぬいて、のどをかき切るのが、またおそろしく難儀であった。底力のない、そのくせはげしい呼吸がはずみ上ってくる。どうにか引きぬくことの出来た刀を、ふるえる手で持ち上げ、咽喉をかき切ろうとしたが、切っ先はいくどもは

ずれて空を切った。
切腹というものがこんなに苦しかろうとは、これまで思ってみたことがなかった。
………中略………
「チェストー！」
さげんだつもりであったが、実際には声にはならなかった。けれども、この力みのために、はらわたが切り口にあらわれて出て、からだははげしく前にのめった。左の手をついてささええた。その手ははらわたの中につかれていた。凄惨をきわめた情景になった。



もがいて、いくども空を切り、いくどもあごや肩をかすった後、やっと切っ先はのどにかかった。うれしかった。重々しい息をはきながら力をふりしぼって前に引き、それに引きずられるように血とはらわたの中にくずれこんだ。急速に意



ハイティーンの陳列

遠藤春一画

識がなくなった。……』

(昭和三十五年十二月二十一日、
二十二日東京新聞より)

さすがに時代小説作家の第一人者だけあって、切腹の経過を描いて真に迫っています。外に毎日新聞で舟橋聖一氏の「忠臣蔵」にも

これと同じ頃、切腹がかかれていました。この方は簡単なもので、寧ろこれからの義士の最期の方に氏が麗筆をふるって下さることを期待しています。

尚、私もこれから努めて書かせて頂くつもりですが、藤山秀緒さ

んのいわれるように、「切腹特集号」を是非お願いいたします。

美しい少女が激痛と戦い乍ら截ちわる腹、白い肌と真紅の鮮血、脂肪層をはじいてはみでてくるはらわた、そしてかみしめる歯の合間から洩れ出る「ウーッ、クウッ

クウッ……」という呻めき、血と陶酔に満ちて突伏す黒髪……。

絵と文章と、そして写真による特集号を待ちのぞんでいます。

(以上)

私の自縛写真

身架輪生(愛知)

小生数年来の愛読者でございます。三月号で新たに御企画下さいました読者の撮った緊縛写真や四月号のマゾヒスチックフォト、実に素晴らしい御企画と心から喜んで

いる次第でございます。そこで小生も手許の写真の中、取敢えず同封の如きもの——「奴隷捕獲」をお送りしてみた次第です。御活用願えれば幸甚でございます。



〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

本誌最近号総目次

早秋九月特大号 (特別価格百五十円)

目次裏「風流いろは草紙」巻頭口絵
ある夜の夢物語。絵物語「網にかか
た女」他八篇。切腹画「女郎花割腹」
戯画選「娘の軍目」マゾチック・フ
オットー「驕慢、狂倒」読者投稿画廊「フ
アンタジック・エネマ、戦陣の血祭、
ボニイ、山の頂」四馬孝画集「三角祭
の仕置」「グラビヤ・フオット」不安と
華恥と嘆願、美しきミノムシ、怨啼と
あきらめ、山また山谷また谷、女囚引
廻しの凶、ひつ捕えた妖獣」
緊縛と表情について……大熊 寿夫
男性責めシーンを描く……菅 良太
随想「悦唐は卑猥に通じない」松井 子
アイディアの見本例……牧 高志
女相撲と女斗美……雪崎 京人
宇宙のどこかで……佐治 造
縛られたインテリ令嬢……浦田 紀夫
浣腸マニアの告白「私の浣腸」春村 子
第三次元小説「妖の国」……雪村 遥
男性責め小説「妖の国」……雪村 遥
倒錯の倫理性……菅 良太
サド小説「演習地」……菅 良太
私はこの味を愛する……とやま 卓史
ある強盗事件……南 時夫
マゾ男性と嘆くことなかれ……永岡 雄
マゾの舞踏会……永岡 雄
マニヤの独り言……藤山 秀生
夕陽を染める乙女たち……藤山 秀生
一悦唐者の回想「快楽」……一ノ瀬 悦子
告白「女装の楽しみ」……比良 野
浣腸通信「あるヒント」……津川 八郎
新装十月特大号 (定価百四十円)
色刷口絵「鏡を見てごらん」第二表紙
「ニューファッションモード」黒光
りする拘束衣」扉「鉄枷と鎖の恐怖」

目次裏「風流いろは草紙」第一口絵
緊縛フオット・アラモード」一実写マゾ
ヒスチック・フオット」第二口絵(絵物
語)「暗黒集団」グラビヤ・フオット
緊縛艶姿五十態」

夜の……藤見 京人
女相撲と女斗美……雪崎 京人
バスカールの運命……滝 三郎
手帖娘報欄と沼正三だより……沼 正三
地底の女奴隷市……塔婆 十郎
神事捜査ノート「権魔」……植村 秀
哀れな女、秀緒の手記……藤山 秀生
体記「赤い羽根」……須 悠子
手記「赤い羽根」……須 悠子
女性長靴フェチの二つの型……一ノ瀬 悦子
毎日こんな浣腸されている……川 崎
宇宙のどこかで……佐治 造
被虐の白い花……赤川 好造
マゾヒズム百景……馬場 好造
曲馬団の訓練……白井 久子
悦唐小説「空しい情事」……松井 子
体記「檻の時間」……栗 裕
告白「女装の楽しみ」……比良 野
イメーシ「生簀裸女の喘ぎ」……近 野
夕陽を染める乙女たち……田沼 秀緒
スゾヒズム天国……田沼 秀緒
新装十一月特大号 (定価百四十円)
表紙「レイコンコート」の女」表紙裏「現
代女性緊縛風景」色刷口絵「どうだ
状態の気になつたか」鼻せめ。目次裏
「風流いろは草紙」扉「女主人と女
レイ」口絵画集「被虐の白い花」
グラビヤ・セクション「夢の緊縛アル
バム」第二口絵「乗馬スタイルのドミ
ナ」滝のい子貴画集、実写マゾヒスチ
ック・フオット、男性責め画集、フ
ウエア・ファッションズ。
二十の質問とその回答……小林 清
告白「アクロバット残酷記」水田 真紀子
マゾヒズム天国……田沼 秀緒

黒色の栄光……香椎 隆彦
奴隷娘(黒髪被虐の二コマ)ル……赤川 好造
被虐の白い花……高橋 五郎
コンビネーションと炎……植村 秀
雄神狂奇譚……塔婆 十郎
地底の女奴隷市「処刑の密室」……沼 正三
夏芝居神立姿……雪崎 京人
女の相撲について……栗 裕
ある浣腸マニヤの一日……佐治 造
宇宙のどこかで……フアンタジヤ・
マゾヒスティカ……山本 節夫
白足袋フェチの幻想と考察……阿部 能丸
第三次元小説「影の国」……比良 野
告白「女装の楽しみ」……菅 良太
手帖娘報欄「死を願う女」……松井 子
悦唐小説「死を願う女」……松井 子
一悦唐者の回想「狂宴」……一ノ瀬 悦子
私の告白「ヒポボースナイド」……文津 三郎
コプロ派のつばやき……とやま 卓史
浣腸器フェチと浣腸ムード……清水 暗星
新装十二月特大号 (定価百四十円)
色刷折込口絵「悦楽の浴槽」第二表紙
「連動式ハイヒール」第三表紙「ムチ
あと」目次裏「風流いろは草紙」第一
口絵「吊る遊び方教室」第二口絵「苦
悶する柔肌」マゾヒスチック・フオ
サドマゾ絵物語、謎の女、グラビヤ・
フオット「恍惚女体ハイライト」
幻想物語「雪姫物語」……林 正
鑑賞用女性……赤川 好造
被虐の白い花……西田 道郎
一盗二婢三妾……とやま 卓史
地上最高の美味なるもの……佐治 造
宇宙のどこかで……藤山 秀生
美術文学に現れた女斗美……雪崎 京人
燃ゆる星……中井 照夫
異端者の道……千草 忠夫
続「夜は知つて」……倉 成人
アブ雑誌「感馬化狂通信」……中井 照夫
こんな浣腸器はいかが……中井 照夫

松井子悦唐シリーズ片恋……松井 子
あけぼの会事件に思う……菅 良太
男貴小説「朱金昭(上)」……菅 良太
第三次小説「影の国」……菅 良太
告白「女装の楽しみ」……菅 良太
菊に奇せる我が幼想……比良 野
麻生保氏の生活と意見……北川 春夫
時代サド小説「醜奇地獄小屋」……矢桐 重八
ある夢想家の手帖から……水田 真紀子
アクロバット残酷記……岩風 呂地獄
地底の女奴隷市「岩風呂地獄」塔婆 十郎
新装一月特大号 (定価百五十円)
色刷口絵「蛇倉の恐怖」折込色刷口絵
「より美しきもの」表紙「一縷あ」と
二表紙「ドーナツ」第三表紙「防
具」目次裏「風流いろは草紙」第一
絵「新妻教育」こんな愛し方」第二
絵「チャーミングな女(サジスチック・
ムード)」サド・マゾ絵画館、マゾヒ
チック・フオット、レスリング・プレ
チャーミングな女(マゾヒスチック・
ムード)「グラビヤ・フオット・セク
ション」……市川 国彦
へんたいという言葉について……伊藤 晴雨
晴雨画稿「地獄宿」……伊藤 晴雨
体記「誘導への課程」……島 俊太郎
奇妙な作業……保 徹
告白「お灸と私」……保 徹
火あぶり女房……藤山 秀生
ある女のカルテ……藤山 秀生
告白「禪に憑かれた男」……松井 子
松井子シリーズ「沃花」……とやま 卓史
マニヤのノート……とやま 卓史
フアンタジヤ・
マゾヒスティカ……山本 節夫
サド小説「柔肌地獄」……花巻 京太郎
女相撲と女斗美……雪崎 京人
奇クベから集……沼 正三
ある夢想家の手帖から……無茶 野歌子
歌集「みだれ縄」……無茶 野歌子

柳書風景七態」第一口絵吊賣の種々相
「苦澁の重石」「サーカスの看板娘」
「仮面をぬいだ男」「宙吊りの女体」
「非常の取引」「奈落への肉塊」「バ
レリーナの受難」「迷る浣腸液」第一
グラビヤ甘美と清潔の構成、第二口絵
「灸責愉悅」二題、女相撲図絵、南村
俊平戯画集「ジガ蜂と蝶」「人喰猿」
「鎖の間の脂汗」第二グラビヤ自刃(マ
切腹擬態ポーズ)、妄想の映像(マゾ
フォト)、期待チャンスの把握、苦痛
の階段、その表情で暫し待ち給え、変
り身(女装)、放置されて。

汜藍の中での孤高性……市川 国彦
わたしを責めて下さい……辻村 隆
古川裕子への手紙……吾妻 新
麻生保氏の生活と意見……麻生 保
公開通信「サド女性の弁」……秋葉 マリ
雁金城炎上秘史、戦国無残記……塔婆 十郎
女形時代の想い出、体験告白……阪東 秀美
公開通信「同性を抑え込んで」……三隅 千恵
ある夢想家の手帖から……沼 正三
私の意見「正常と異常」……赤松 義夫
続・夢三夜……牧 高志
輝ファン三顧暈……内田 武男
バンドマニヤのために……片桐 唯夫
宇宙のどこかで……佐治 麻造
私の切腹ブレイのすべて……山田 久仁子
男賣小説「狩獵者」(第五回)……佐度 槐
奇譚三十九夜物語「第五夜」……辻村 隆
クリスタルマニアの日記から……北沢 操
体験「女囚哀歎」……山下 昇
蒼い廃墟、ユニオン家具会社……永見 竜也
創作「ママと竜太郎と私」……柴崎 黎子
マゾヒズム天国……田沼 醜男
悪魔の日……ある切腹マニヤの告白……黒岩 真也
告白、女性化志望者の呟き……古井 真也
伊藤晴雨……その生涯と作品……大熊 清夫
奇クサロン……伊藤晴雨氏を偲ぶ……森清
女囚と少年囚、西田良江。ニセ風流夢譚
昼行燈生。今日の神様は生神様遠藤春一



サド・コント

羽衣

の
天女

笹 緑 一

『趣味の画報』に見飽きた私は、いつしか眠ってしまったらしい。

ふと気がついてあたりを見廻すと、何処か知らない浜辺に立っていた。白砂青松という形容詞そのままの前景に、バックには裾を長く引いた山が、美しい姿を見せている。

その時、何処からともなく、世にも類なき美香が潮風にのって私の鼻をうごかせた。

はて、と小首をかしげた私の目に何か白い物が写った。

急ぎ足に近寄ると手に取った。と、何処から現れたのか、一人の絶世の美女が、
「あら、それは私のよ」

と、金鈴を転がすような声。

「貴女は一体どなたです」

美女はケロリとして答えた。

「私は天女よ」

その返事を聞いた途端、私の胸の中で好色な気持が鎌首をもたげ始めた。

（天女か、こいつあ見付ものだ。

一つ手荒く責めてやれ）

「貴女は天女、するとこの着物は

天の羽衣というわけですね」

「そうよ、それがないと天へ帰れないわ。お願いだから返して」

「俺の言うことを聞けば、いつでも返してやるぜ」

砂浜に膝をついて頼む天女を見下しながら冷ややかに言った。

「何でも聞くわ」

羽衣を取り戻したい一心で天女はすがりつくように言う。

「じゃ、裸になれ」

言われた天女は消えいりたい表情でためらう。

「それだけは勘忍して……」

「馬鹿野郎、痛い目を見たいか」逃げようとする天女の襟がみを掴んで襦袢を剥ぎとってしまう。

透きとおるような真白な肌、豊かな双つの乳房が震えおののいている。全身から香ぐわしい体臭を放ちながら全く神々しいばかりの美しさで私の目をくらます。

然し次の瞬間、気をとり直した私は、波打際にうち上げられていた荒縄を手にとるが早いのか、天女を後手に縛ってしまった。乱れた丈余の黒髪が命あるもののように揺れうごき、その度に得も言われぬ芳香が漂う。

「さて、そろそろ始めるか」身悶えする天女の傍に片膝をついた私は乱暴に足を掴んだ。なんという美しい足指だろう。私の右手が足の裏を擦る。

「うう、ううう……」声にならない悲鳴が洩れる。真白な肌に、ほんのりと紅味がさしてきた。やがて全裸の天女を担いで私は家へ帰った。

で私は家へ帰った。

ドサリ、

荷物を扱うように土間へ放り出す。縛しめの縄を解いてやる。つややかな肌に、くっきりとしるされた縄目が、むごたらしい。

「今度は痛いことはしないが、浣腸というやつをやらして貰おう。それが終わったら、約束した通り羽衣は返してやるぜ」

私は棚の上からイルリガートルを下すと、千CC位のグリセリン溶液を注いだ。

「羞ずかしいから許して」

「それじゃ、約束の羽衣は返えして欲しくないと言うのか」

そう言われると天女は羽衣欲しさに、私の命令をきく外、仕方がなかった。

イルリガートルに溢れるばかり満たされていたグリセリン溶液はみるみる中に一滴残さず天女の腸内に注ぎ込まれた。

「あああ、許して、許して」

苦痛の為、声もかすれる。

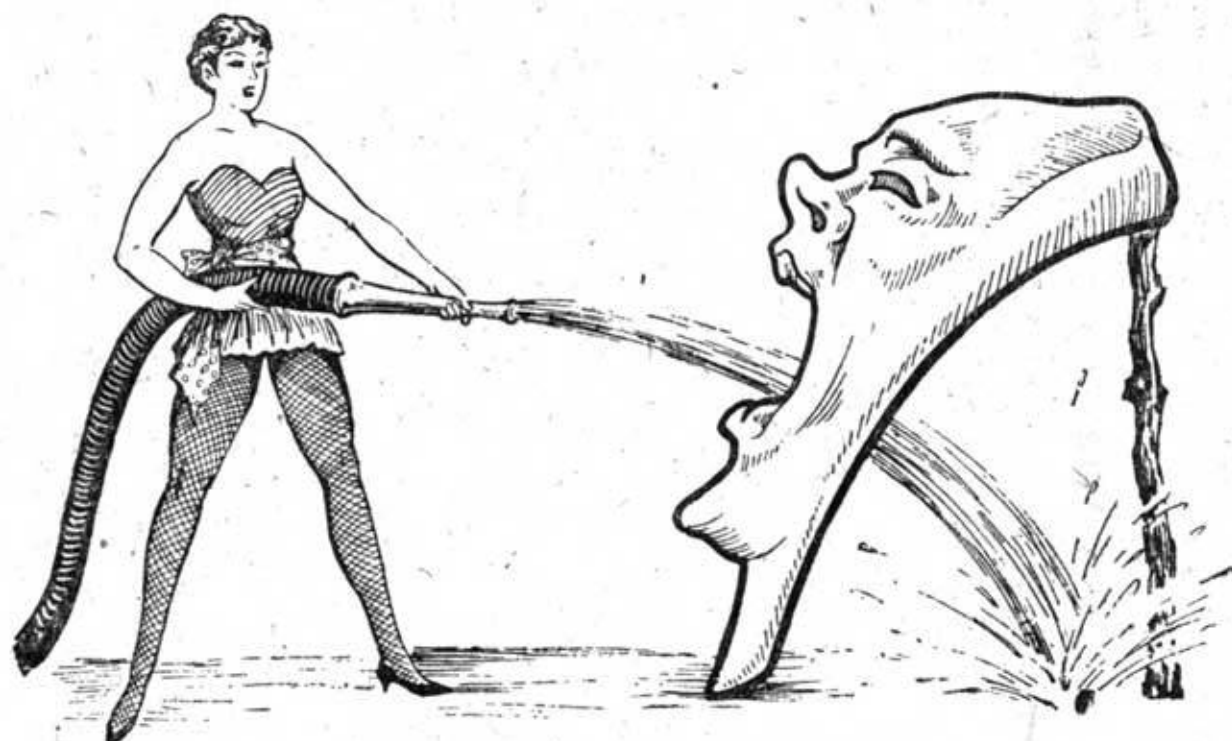
天に住むナイーブな彼女にとつて、この仕打ちは何んという無慚さであろうか。額に油汗をうかべてこらえる可憐な天女。

「ざまあ見ろ」

大声で叫んだ途端、私は、はっとして眼がさめた。

女宇宙人

アメリカに、正式な女宇宙人が誕生。つまり、来るべき宇宙時代に備えて、女性の宇宙



私は犬のように歩く

—— 愛好者の記録 ——

マ ニ ア ノー ト

とやま・かづひこ

ンという大量を携行することは到底不可能なので、各自の排泄物を還元して、何回も食用に供するという研究が、ソ連あたりでも真剣に行われているという。

『クソでもくらえ』が、文字通り現実のものとなる訳だが、美しい女流宇宙人の還元食物は魅力のあるものだ。

あの特有の臭いや、味がないのはさびしいが、全然別個のものにすり替えられて食膳をにぎわしてくれるとしたら、これまた楽しくも素晴らしいアイデアといわねばならない。

こやしの話

この頃流行の、観葉植物づくりの趣味から親しくなったQ氏宅訪問の時の話。

Q氏夫妻は、ところ狭しと並べた、珍らしい植物を見せてくれた。

かづひこも、この方の趣味と知識を多少は持っているので話がはずむうちに、『肥料』に言及、Q氏は笑いながら

「ウチには、ヒミツの肥料があるんです。それは……」

といいかけるのを打消すように、

「アナタ、おやめなさいよ」

傍らの夫人が、慌てて止めるのである。

そうなる余計、聞きたくなるのが人情、ネバって、とうとう白状させた。肥料のヒミツ”というのはいったいどうだった。

「やはり、シモゴエがよいようです。だけど水洗トイレの我々ダンチ族には、仲々とれにくくて……」

氏の長い経験では、腐らせたシモゴエを水に薄めて与えると、すばらしく育ち、美しい花を咲かせるという。

それが、水洗トイレのかなしさでうまく採れない。

「けっきょく、家内のヤツのをツボにためて置くようにしてるんですがネ」

Qさんは、オフィスへ出勤してからゆっくりやるのが習慣になっているそうで、いきおい一日中、家を守るおくさんのしか採れないことになるわけである。

こうなると、問題のツボを開けてみたくなるのは、おくさんがあまりに美しすぎるひとであるからだ。

しかし、かづひこの、両道をかけた熱心な願望も、おくさんの猛反対に遇って、残念ながら話だけで、ホンモノにはお目にかかれないう結果に終わった。

「家内のものと分っているだけに、そうきた

ないとは思いませんよ。ただ、においだけに閉口しますかね」

氏は笑いながらそういったが、かづひこにとってはなんともうらやましい話。チャンスがあれば、そのツボの中味を、少しでももらいたいものと思っている。

足から春が……

『週刊朝日』2月17日号の、みひらきカラー口絵「東京新色」は素晴らしい。

足から春が……と題して、画面一パイに若い女性のサンダルをはいた脚がクローズアップされている。コバルト色の空をバックに、紅赤のカジュアル・ストッキングをはいた美しい脚線と、シューミーズ(?)らしいものまでのぞけて、たのしい雰囲気がある。ぐっと踏まえた左足が、力いっぱいサンダルを踏みつけて眼前に迫ってくる。空想をめぐらせばこの女性の足下にヒレ伏しているような気になれるから奇妙である。

ピンデー

『日本観光新聞』2月17日号、二面トップニュースは「日本版のビデ」ピンデーの出現を報じている。ビデについては、今更説明する

までもなく、お湯を使用してからだを清めるフランス特産の器具だが、このピンデーというのは、これをポータブル式にして、床の中でも、寝たままで使えるのだそうだ。

女性の、神聖な垢で汚れた水は、吾が愛するものの一つだが、この器具を使えば、完全に採取できるわけだ。チャンスがあれば、これを使用して得たものを、与えてもらうことも出来そうだと、その普及を、くびを長くして待っている。

もらったカゼ

一年中、ほとんどカゼひとつひかず、体力については自信をもつかずひこが、珍らしく流行の感冒にやられて十日近くもブラブラしてしまった。

「いやネ、カゼなんかひろってきて……」

何も知らない家人が、それでも薬よ、吸入よと、心配してくれる。

だが、この感冒は、偶然のものでない。ご当人には、ひき込んだ原因というものがハッキリ判っているのだ。

ゆきつけのトルコ風呂で、度々世話になる、こちゃん、かづひこにくれた大切なカゼなのである。

かづひこの好みを充分知り、ソツと願いを満してくれる彼女が、先日、行ったときに、ひどいカゼで苦しそうにしていた。

「なにか、いいお薬、ないかしら？」

とつさに、かづひこの頭にあるアイデアがうかんだ。

「これをやればゼツタイに治る。すばらしいマジナイなんだ」

——カゼは、他人にうつすと、当人は治るといいい伝えがある。キミのカゼをボクにう

ついたらいい。——

美しいコウちゃんの体内にあるカゼのもとを、直接、自分にうつしてもらえたら、と思

ったかづひこは、こう切りだしたものだ。心やすだてと、少しだがSのケのあるコウちゃんは、ニコツと笑ってこの話にのつてきたのだ。

形の良い鼻をグスグスいわせて、ハナ紙をとり出す彼女の手をおさえ、かづひこはその紙の代りに、かづひこの唇を差し出す。

「チン！」

彼女は、かづひこのいう通りにしてハナを

それから四日目。みごとにカゼの徴候があらわれてきた。

これは、ゼツタイにコウちゃんの持つていたカゼにちがいない。

心配してくれる家人には申し訳ないが、かづひこにとってこのカゼは、治すのを惜しく思う、大切な大切なカゼなのである。

告白

白足袋のこと

美明下ノ木

東京、大阪の大都市に比較すれば、全く淋しい裏日本の街に住む女でございます。駅前飲み屋に勤める私は、とりたてて素晴らしい美人というのでもありません。十人並みの此の私が、お店一番の流行っ娘になったのは、何故でしょうか。

人口も少い此の街では、飲みにお出になる男の方も、都会にくらべて驚く程少ないのも、当然のことでしょうが、私達の貰うお給金も少く、お客様から時折、頂戴するチップも限られたもので、それだけの収入では、とても生活して行くのも大変なものなのです。おはず

かしい事です、時々には身を売って収入を少しでも多くする他はないのでございます。私のお勤めするお店は、此の街では大きい方だし、お客様の数も他のお店にくらべて多いのでございましたが、それでも今申し上げた様に生活が苦しいのですから、他のお店にお勤めの方は生きて行くのに大変な努力が必要な事だったと察しられるのでございます。時にはお客様を取ったとか、取られたとかで争う女給同志もございますが、それも悲しい星の下に生れた私達の生きて行くための、必死の努力の哀れな姿でございます。

私が売れ娘になるにはどうしたらよいか



と研究を始めたのは、こうした悲しい姿を見たのが原因の一つにもなっているのです

お客様のほとんどは、私達の身体を最後には求めていらっしゃいます。毎晩々々、誰かが

看板近くまで飲んでねばっているお客様からくどかれています。でございますが、収入

の少い女給の方はこんな誘惑に負けてしまうのです。私も最初はこの人達と同じ道を歩いたのでございます。そして夜のムードの研究を始めたのです。少しでも男の方を引きつけるにはどうしたらいいのでしょうかと。

私は洋装より和服が似合う方なので、夜はシユミーズ姿より長襦袢姿で居りますが、特別に薄い布——逆光線の場合、身体の線が浮かび上る位の——で長襦袢を仕立てて見ました。

柄物のそれよりも魅力があったらしく、男心を引きつけた様でございます。此の成功で男の方の趣味にもよりますが、例えば日本趣味の方程、炎ゆる様な真紅のお振袖の長襦袢姿は、非常な魅力を感じられる様でございます。夜のお化粧はもちろん致しますが寝化粧は嫌だと、おっしゃるお客様も中にはござい

ますが、大部分の方は喜んで下さいます。なじみになれば、その方のお好みもわかりその様にして差し上げます。縛られたりする事も、再三ございました。髪も島田に結った事もあります。

ある夜、お店に若い和服の方が見えられました。その方は始めての方でした。結城の着物に、新しい白足袋姿でその足許の真白い足袋が、凄く美しく印象的でございます。私は此の方の輝く様な白足袋を見て胸をつかれた様な思いをしたのでございます。

それからは夜のムードに白足袋を加えて見ました。緋の長襦袢に白足袋姿になったのでございます。此の夜はお客様は眼を輝かして何度も、私を愛して下さったのです。こうして私は白足袋の研究を始めました。普通のキャラコより美しい光沢のある絹足袋や、ナイロン、羽二重、そしてテترون等の白足袋が、ある事を知り、キャラコの白足袋よりも、美しいこれらの足袋の方がより魅力がある様でございます。三枚コハゼより五枚コハゼの方が見た眼に優美である事もわかりました。特別注文で私の

足にピッタリ合った六枚コハゼ、七枚コハゼ等の白足袋も作って見ました。お値段は約二倍になりますが、これだけで私のムードが三倍も四倍も、魅力的になるのでございます。日本趣味の方なら、真赤なお振袖の長襦袢、真白な美しいテترون七枚コハゼの白足袋、炎ゆる様な夜具、やわらかな和風スタンドの光、枕屏風、全身を写す姿見、これらの夜のムードの描出す夢幻的な日本趣味の美しさに双手をあげて熱狂される事でございましょう。

和服好みの方が洋装のそれより、はるかに多い様でございます。お客様がお忘れになった雑誌に「白足袋」の記事があったのを讀んだ時、なるほどと思いました。今までは、それほどまでは重視しては居ませんでした。これ程までに男の方の視線がそがれていたのかと、内心驚いていと共に、一見、無頓着に見える男の方の心の中には、こんな小さい事さえ見逃さない細い神経もあるのだと今更ながら考えさせられてしまいました。私達女性も一層、身をいれて研究して見る事が、沢山あるのではないのでしょうか。

私はこうして、多くのお客様を持つことが出来ました。もう以前の様に夜のおつき合い

をする必要もありません。お店一番の売れ娘になったのですもの。夜のムードを生かし、和服はお振袖にしてみましたし、長襦袢も、ほとんどピンクや赤に致しました。

もちろん和服のポイントである白足袋は全部、仕立物であり。七枚コハゼの白足袋でございます。現在はキャラコの白足袋は一足もございません。羽二重やナイロン等の白足袋に致して居ります。

私にヒントを与えて下さった、和服に白足袋姿のあの若い男の方は、その後、一度もお見えになりません。一度お会して、お礼の一言も申し上げたいのでございますが。

あの方はきっと神様で、お客様がなかなかつかず、生活に苦しんでいる私をあわれんで男姿になり、私を助けて下さったのかも知れません。私は近頃、こんな事を思う様になったのです。男の方の白足袋姿は、これまでは結婚式とか、お葬式とかの儀式で見受けて居りますが、それ程私の心をつかみませんでした。だのに、あの夜の若い男の方の白足袋、輝く程の美しい白足袋はハッと程の強い印象を受けたのですもの。あの方の白足袋も、他の方の白足袋も白足袋に変わりはない筈ですのに。

新稿

ある夢想家の手帖から



第二十八章 性隷属の王侯達

褒姒^{ほうじ}笑わず。幽王乃ち其の笑を欲して万端すれども故に笑わず。幽王、熒燧太鼓^{ていこ}を為り、寇^{あだ}至るあれば則ち挙ぐ。諸侯悉く至るも而も冠なし。褒姒乃ち大に笑う。幽王之を悦ばしめんと欲し、数々^{しばしば}為に燧火を挙ぐ。其の後は信ぜられず、諸侯至らず。忠諫の者誅せられ、唯褒姒が言是從わる。……

——劉向「古列女伝」卷七

前章で桀王の妃、末喜のことに言及した。そのついでに、史上に数多く見られる傾国の美姫への君主の性的隷属現象について解説しておく。

便宜上、本書第三章のネンダ王の説話を回顧して話をそこから始めよう。ネンダ王は王妃の言うがままに馬の真似をした。異常な行

沼 正 三

動であるには違いない。然し、だからすぐマゾヒストだったとは言えない。彼の妃への愛情の強さが彼の正常人としての慎しみを破らせたに過ぎない。こんな場合、性科学者は「性的隷属」の概念を用いて説明する。

これは、マゾヒズムを学問的に理解する上には非常に大切な区別であるが、よく混同される。この区別を最初に指摘したクラフト・エビングの説くところを聴こう——

性的隷属 (geschlechtliche Hörigkeit, sexual bondage) は本来は病的なものではない。その成立要素たる愛情と意志薄弱とは倒錯そのものではなく、唯相手方の強さに負けて、利害関係や道徳や法律に背くこと甚だしい異常の結果を生じるに過ぎない。敗者の行動及び圧制受忍の動機は正常な性欲であって、隷属の対価としてその満足が得られるのだ。隷属から生じる敗者の行為は勝者の所有欲その他からする命令に基くもので、敗者独自の目的

を持たぬ。即ち、勝者の所有を獲得したり維持したりする終局目的の爲の手段に過ぎぬ。最後に、隷属はある特定人への愛情の結果であり、この愛情に目覚めてこそ隷属状態に入る。

マゾヒズムでは全く事情が異なる。これは病的であり、倒錯である。行動及び圧制受忍の動機は、圧制そのものに魅力を感じることにある。併せて勝者との交接を希求することもあるが、いずれにせよ、彼の欲求は、性的満足の直接の対象によりも、圧制の表現に役立つ諸行為に向けられている。マゾヒズムにおいて見られる諸行為は、隷属の場合と異り、敗者にとって単なる手段でなく終局目的そのものである。最後に、マゾヒズムにおいては、屈従願望が、特定の恋愛対象への惚れ込み以前に現れているものである。(病的性心理モル補訂十七版)

この様に両概念を区別すると、例えばネンダ王の場合などは明らかに性的隷属である。王は特定人(王妃)への愛情から、圧制を受忍したのであって、圧制の表現に役立つ行為(愛の馬)そのものを希求したのではないからである。彼は要するに、情痴の虜になつて、分別を失つた痴人に過ぎないのだ。「ナナ」のミユッファ伯爵、「女と人形」のマテオなどの狂態が一読マゾ的昂奮を惹起するが、彼等自身は本来マゾヒストではないのと同様である。(第三章のアリストテレスとフィリスの場合も、これに近いが、一回きりの関係であるので、「性的隷属」の言葉を用いるのは強過ぎるであろう。)この認識は、いわゆる女色に惑溺して国を亡ぼし、身を喪つた古来の諸王侯についての考察に益するところがある。玄宗皇帝やアントニウスの場合は、前半生の明君たり英雄たる事蹟が赫々としてゐるから、晩年に楊貴妃やクレオパトラに迷つたからといって別に

マゾヒスト視する人もないが、ベリサリウスなどは、武略においても経綸においてもアントニウスを凌ぐ英雄であるに拘らず、彼をマゾヒストと見ている人が多いし、フランス王ルイ十五世、バヴァリア王ルトヴィヒ一世、セルビア王アレクサンドル一世など比較的近代の諸王達になると、資料から、彼等を生来のマゾヒストだつたと断言する研究者がある。然し、私はこれに疑問を持っている。

ベリサリウスは東ローマ帝国ユスチニアヌス帝の功臣たる大諸侯であり、中世最大の天才的武將であるが、家庭内では淫乱な妻アントニナに屈従し、姦通の現場を目撃しながら男らしい態度に出なかつた。皇后が「アントニナの爲に」と恩に着せて彼の貶黜を赦した時など、家に戻つて妻の足下に平伏し、脚を抱き、足を舐め、今後は自分はもう夫としてでなく、恩を蒙つた従順な奴隷として生きる

と誓約した。まことに驚嘆に値する卑屈さである。
ルイ十五世のデュバリ伯爵夫人に対するや、奴僕同然だつた。フックスは、彼女がベッドからスリッパを蹴投げて「ほら、国王や、拾つていであ」と犬に対する様に命令しているヴィレット筆の諷刺画を示しているし(「女天下」にある)、キントは、彼が彼女のベッドに朝の飲物を運んで給仕した時、コーヒーを煮過ぎ、「そら、注意しなきゃ駄目よ、国王。こんなの飲めると思つて!」と口汚く罵られたという当代の資料を引用している。

ルトヴィヒ一世は、スペインの舞姫ローラ・モンテスの深淵の様な明眸に迷つた。その言いなり放題になつて、尊貴な家門ランツフェルト伯爵家を嗣がせ、この俄か造りの女伯爵から名前を呼び捨てにされながら、彼女の美しい足を手入したり、その靴を盃にして酒を飲んだり、彼女の臥ている寝台を支えたりするマゾ行為に及んだ。



蔭では王は「ローラの犬」と渾名され、彼女が王冠を戴いた狹ころを鞭で仕込んでいる諷刺画さえ描かれた（これも「女天下」にある。フックスにはこのテーマを扱った一書「Eidormäseliches Jauzidyll」があるときくが、未見である。）

（附記第一）

アレキサンドル一世がドラガ王と共に弑逆にあったのは、今世紀初頭のことである。運河掘鑿の為の予算を王妃用ヨット購入費用に流用するなど、彼女の驕奢の為、血税を浪費し、皇太子として彼女の兄弟を立てた等等「彼女の前には彼の意志の自由は殆ど失われていた」と史家は言っている。

私は、これら王侯は、（一部研究家の説に反し）、生来のマゾヒストではなく、ある特定女性への極端な性的隷属の下にあったのだと解したいのである。

ただ、ここに無視できぬのは、性的隷属からマゾヒズムへの移行という現象があることだ。クラフト・エビングは又曰く――

誰でも性的隷属状態に長い間生活すると軽度のマゾヒズムを獲得し易い。愛人の専制を喜んで受け容れようとする愛情は、直接専制されるのを喜ぶ愛情に転化する。専制を耐え忍ぶ時の気持が愛人を慕う楽しさと結合することが長く続くと、この楽しさが終には専制そのものに結び附いてしまう。こうして倒錯への移行が完成する。この様にマゾヒズムが訓練教化によって獲得されることもあるのだ。

（前掲書第十二版）

この場合、その愛人たる女性の嗜虐性が強ければ強いほ

ど、男がマゾヒストに形成される度合も大きくなることは見易い道理であろう（附記第二）。

東ローマの大將軍は私生活において妻の奴隷であつた様に公生活においても、皇帝皇后から武勲に酬いるに貶黜を以てせられつつ、（そして報復を試みるに足る大軍団を握りながら）終始その忠実な奴隷たるに止まつた。「その忍従と忠義は一人間の性格以上か以下かどちらかである」（ギボン）。彼が晩年、盲目の乞食になつたといふのは單なる伝説としても、少くともそれにふさわしい性格的な被虐性^{ヒズム}が彼の生涯に見られるのだ。然し、果して生得の被虐性^{ヒズム}だつたらうか。彼の妻アントニナは、その親友テオドラ皇后と共に——二人とも前身はサーカスの不見転踊子である——権力に渴えた嗜虐女性^{サジステン}だつた。將軍の秘書プロコピウスの伝える所を読むと、この二人が協力して、將軍を次第々々に深い屈辱状態に追い落とし、理想的マゾヒストに仕込んで行つた有様がよく分る。彼のマゾヒズムは後天的に獲得したものだ。

フランス王の場合は、デュバリ伯夫人の前にポンパドゥール侯夫人（彼女の嗜虐性については手帖旧第九二項参照）の長い間の訓練で、マゾヒストへの馴致が完成してゐた。ロシアで女帝達が公然と女性支配政治を布いてゐた頃、フランスでは、彼女らが奥向きから国王を人形にしてガッチリ政權を操つてゐたのである。この二人の女性の権力欲の犠牲として、王はマゾ化され、「朕の後に洪水あらん」と、死床に大革命を予見した程の明敏な頭腦を持ちながら、生前、彼女らの専制をどうすることもできぬほど骨抜きにされてゐたのだ。

バヴァリア王やセルビア王も同じで、ローラとかドラガとかいう

強い性格の権力女性の感化力で、倒錯へと移行したものと見ることでできよう。特にローラは嗜虐的傾向が濃かつた様で、高位高官の者でも氣に入らないことがあると乗馬鞭で撲ることが珍らしくなく当時「ローラの鞭」ということばさえあつた。アルベルト・モルガ「性科学大系」中で紹介してゐる当時の嘲笑詩にも、「一人には Feige（いちじくの意とビンタの意あり）を一人には Stüber（貨幣の意と指で鼻先を輝くことの意あり）をと、皆に贈物を与える」とか「お客は皆鞭うたれて……」とかいふ行が見受けられる。王はその被害者だつたのだ。

そこで、こう言える。主権者の女色において、一国の命運に關係してくるのは、女が嗜虐的権力的であるかどうかが第一義であつて、男がマゾヒストであるかどうかはそれほど問題でないと。嗜虐女性への性的隷属は結局は男をマゾヒストに化するからだ。

その点では、桀王に対する末喜^{ぼつき}、及び紂王に対する妲己^{だつぎ}（森本氏訳「残虐なる女性」第一章「支配者としての女性」に引例12としてター・キア妃とあるのは妲己のことである。）の古伝が、歴史的には真実たるを保し難いに拘らず、両女性（同一人の異伝ともいわれるが）の嗜虐性^{サジステン}だけは明確に語つてゐるのは、心理的、真実を伝える古代中国人の歴史の智慧と言えよう。末喜は酒池を作つて三千人に牛飲せしめるのに、本物の牛の様に頭に羈^きをさせ、酔つて溺死するのを見て笑い楽しんだ。妲己は肉を懸けて林とし、中に畜類並に裸にした人を放つたり、炮烙^{ほうらく}の刑とて、膏を塗つた銅柱を炭火の上に構え、上を歩かされた男が炭火中に墮ちるの眺めたりして喜んだ。どちらも残酷無比な嗜虐女性^{サジステン}だが、桀は「末喜を膝上に置いて、その言を聴き用」いたし、紂は「妲己の誉むる所は之を貴うし、妲

夢への縛

— (わ な) —

児健渡佐

私は一セールスマンだが、所謂アブノーマルな嗜好性があるので27才になる今日、まだ恋愛関係に這入ったこともない。と、云つても全然、無関心ではなく、親兄弟から奨められて見合いをしたこともあるし、会社の先輩から話を持ちかけられたことも度々あるが、

一度も話の成立した試しがない。自分で言うのもおかしいものだが顔だちも十人並みだと自認し別に肉体的にも欠陥がある訳でもない。しかし何となく結婚がわずらわしいものに考えられ、出来かけた話も何彼と難クセをついたり、余裕がないから、と逃げを打った



妃の憎む所は之を誅した。典型的な性的隷属であり、二人ともこれによって社稷を失ったのである。題辭に引いた褒姒についても同じことがいえよう。彼女は伝説では金毛九尾の古狐である。性的隷属は、概念としては、マゾヒズムと区別すべきであるが、現象形態は両者酷似しているし、殊にこの様な移行も可能だとすれば、あまりその区別に拘泥するのも問題だろう。そこで今後、手帖の稿を進めるに当っては、私はかなりルーズに性的隷属の諸例を引用してゆくが、読者諸君も、この区別があるということだけは承知しておいて戴きたい。

して社交界の貴公子や大学生達をも夢中にさせた。彼女の靴下留めの切端でさえも秘蔵されたという。手帖旧第一九順（二八年八月号）及び原氏時評復第二項（三一年六月号）にも彼女のことがあるから、参照されたい。

附記第一 ローラ・モンテスの名は、先年、封切られた映画「歴史は女で作られる」のヒロイン（マルチヌ・キャロル演）として記憶しておられる方があろう。王のみでなく、当代一の美人と

附記第二 洗髪お妻は朝鮮奉行の令嬢で広島師範校長岡野の夫人だったが、学生藤沢と通じて出奔し、京橋花の家の女将となり、嬌名一代に轟いた。校長の職を捨てた岡野を帳場に坐らせ、庭番代りの下男に藤沢を使う。二人とも彼女の召使になり「花の家」の絆纏を着るのに生甲斐を感じる。元の夫であり、愛人でありながら、今は純然たる使用人として酷使され、叱罵される。：火野葦平「洗髪お妻」(雑報一二二)に見るこの実録は、二人の男の性的隷属からのマゾヒスト化を語っているといえよう。

美少年

畏

りしているので最近は何も構わないようになってしまった。

異性に対して無関心でない証拠に、と云うのは一寸おかしいが、同僚に誘われれば、それも費用を奢って呉れる時に限って南の盛り場のストリップホールなどにも行くこともある。ビジネスの間に上役の目を盗んでコーヒを飲みに行く喫茶店の女の子の品定めにも参加するし、聖談の合の手を入れて喝采を浴びることもある。

だから、私のことを典型的な二重人格者のように評する人もあれば、人づき合いのよい働き者と賞める人もあるが、残念ながら、前

者の方だろうと考えている。

ストリップを見たりY談を話したりB・Gの品定めをやるのは全部、勿論、縁談謝絶も、いわばジェイギル氏の方のなせるわざで、怪人ハイド氏は、私をして、およそ奇怪至極なる行動に走らせているのである。

仮面を自らの手で剥ぎ去るジェイギル氏は、殆んどの場合、深夜である。時折、一年のうちに三回か四、五回、ハイド氏の祭礼の夜は、日没と共に始められるのだ。

ジェイギル氏はその日、少く共三回は会社のデスクを脱れてうす暗い横丁の喫茶店に入り、濃厚なブラジルの薬液^{コホビイ}を生^キの儘で咽喉の奥に流し込む。店のカウンターで勘定をすませる時にカウンターのココアチョコレートも三本程包ませて上着のポケットに収め、席にもどると同僚たちに気附かれないうちに二本だけカバンの中に滑り込ませてしまう。

早退届はすでに部長の印があり、堂々と社を出ると私は人混みを避けて横町にある公衆電話のボックスに入りダイヤルを回す。51人殺ろし0564(子一人殺し)物騒なナンバーだから忘れない。

若い男が電話口に出て「ハイハイ明治工房です」「私は大川ですがネ、若いモデルを至

急に頼みたい」

「ハイ、有難うございます。すぐに伺わせましょう。お宅への道順をお聞かせ下さいませんか？」

「いや、ややこしい所なので、何処かで落ち合って一緒にゆきたい」

「私どもはどちらでも結構でございます。それでは……」

「一人でいいよ。なるべく体の丈夫な可愛い子がいいね。丸刈りじゃなくて坊ちゃん刈りの方が……」

途端に明るい男の声は変って

「モシモシ、ああ旦那ですか。又、お楽しみでやすね……」

「近くに人が居るといけないから玄関から申し込んだんだぜ。お前一人かい？」

「へえ、男が一匹、足の下でサカナの骨をナメていやすよ」

電話口からは男にけとばされたらしい猫の鳴き声が聞えた。

「今日は来てくれるだろうね」

「旦那、じつはそれが……」

「駄目なのかい？ 折角、用意したのに……」

「いえ、そうじゃありません。此の前程の玉じゃねえんで……」



「いいよ、幾つ位いだ」

「満十六才と三カ月、もう一人は小学校の六年坊主でさ。背は十六才の方が低いよ。悲しき十六才ってね」

「バカ野郎、ふざけるなよ。それなら十六才がいい。坊っちゃん刈りだね」

「ええ」

「本人は承知だろうね」

「大丈夫ですよ。近頃の若い奴は割り切ってますね。報酬をくれるんならアルバイトだから何んでもやりますよ。だってね」

「それなら六年生はどうだ」

「こいつはダメでさ。ウチの、そら、旦那の写したこの前の写真を見せて、こんなモデルだよ、って云ったら泣きそうになりやしてね、ボクは罪人じゃありませんだってサ。大笑いだよ」

電話口からは男の遠慮のない高笑いの声が

響いた。

「その点ね、前もって申し上げて置きやすが、十六才の方は手強いよ。ソレ、旦那がカラーで写された奴ね、ええ何とかの雑誌の告白記事の通りにやるンだって丸裸に剥いで海老責めにやった奴サ。アレを見せて、アルバイトの職種はこんなモデルだよ、って宣告してやったら、ナワで縛られるのも仕事の裡だから構わない。而しそれでケガでもしたら労災保障は出るだろうね、だってサ。旦那も注意した方がよさそうですね」

「一体どんな所から、そいつを探して来たんだ。え？」

「サア？ 何処だと思います？」

「判らんね！」

「新聞広告で見つけたんでさ。求人広告ね。」

ホレあるでしょ。ボーイ求む、なんての。応募組がキャバレーの裏口でウロウロしてる中

からスカウトするんでね。労基法なんて便利なのがあるんで中学校中退ぐらいのがあのボーイの制服にアコガレてやって来る。勿論、アッサリ断られてシオシオ出て来る奴を連れてくるんでさ。メシ喰わせて運動させて若い絵描きさんが来た時にポーズとらしてりゃ、結構どこへもゆきやしませんよ」

「そのうちに一時間千円がとこ稼いで来るって訳か」

「旦那にそいつを言われちゃあ。でもねえ、これで随分、苦勞してるんですよ。イキナリ縛り上げちゃあ、まるで人さらいで、サツヘでも駆け込みやがったら、こちとらメシの食い上げでさあね。ソコを旨く説き伏せて、始めのうちは腕を上げさせてポーズさせる。勿論、疲れて来りゃだんだん腕は下りやす。ソコで両手首を縛って宙吊り、ソレからオールヌードにさせる呼吸ってのは流石、商売えがら旨えもんだよ」

「ところで、この前の少年だが、まだ居るのかい？」

「ええ鱈夫って子ね。すっかりプロになっちゃまいやがって。ああなるともうミリキはありやせんよ。矢張り、厭がるのを無理に縛るのがタノシミでね。モヒ打ってミナトへ放り出

してやりますよ。もうすぐ」

「お前もずい分とがめつくプロ化したもんだな。あまり悪どいことをやると、後でサツが怖いぜ」

「旦那はそうなると、いよいよ狂い死にだね。いや、そればかりじゃない。ほかの紳士淑女諸君がお嘆きですぜ」

「成程よく判った。ところで十六才の生れはどこだ」

「判らねエんでサ。奴、云いやがらねエんです。でも学校に居る時分、水泳が得意だったなんて言ってるやがったから、多分、日本でしょ。うね。冗談、云ってすみませんが兎に角、すごいポリウムですぜ、運動はサイクルばかりやらせやしたから。それにオリブ油を一かん塗り込ませやしたから、まるで首から下だけ彫刻みたいですぜ。アア、それからもう一言、申し上げて置きやしょう。兎に角、

若いんでね、特別製のワイヤー入りのサポーターを全部の子に締めさせてありやす。服を剥いでもらえば判りやすが、汚れの目立たねえように全部オリブ色でね。前に入れてある数字はその子の満年齢でさ。サポーターと云ってもアノ尻の方が二本に岐れる奴じゃねえんで、恰度、海水パンツと同じ式の総ゴム

の奴。そうそう、プロレスやボディビルダーの締めてる奴、腰がグッと引き締って見える

奴、そいつの太股のつけ根の所と胴周りに細いピアノ線を入れやしてね、そいつの端を股下に一カ所に集めて錠をぶら下げやした。錠前破りは天下の重罪、用を足す時だけ外してやりやす。こいつは旦那もお含み頂きてエんでね。ナニ錠は子供に持たせてやりやすよ」

「それじゃあ、すぐに寄越して呉れ。あまり長話しをしないと肝心の時間がなくなるよ。場所は大阪駅の0番フォーム西の端のベンチ、目じるしはどうだ？」

「よろしうがす。人目につかねエようにやりやしょう。学生服で白い運動グツ、帽子も被らせやすが、鞆の代りに朝日ジャーナルを丸めて持たせやす」

「なかなか考えたもんだな。インテリィはだ

しだよ。それなら早速に頼む。時間は四時四十分、丁度だ」

「旦那！　あまり手ヒドく扱わねエで下さいよ。いつだかみてエに背中に大きなみみずばれなんか拵らえられちゃ、料金なんか膏薬代でふっとんじまいやすからね。それから、なるだけ休ませてやって下さい。いや、二日かかって構わねエす。旦那のことだから、マケときやしょう。場所は……マサカ、この間のように下宿じゃねエでしような」

「当り前さ。下のバアさんが目をまわすよ。今日は別荘だよ。場所はヒミツだが、鉄筋ビル地階だからね、灯の洩れる心配もないし、家のキシむ心配も無用だ。一階は倉庫で二百米四方は無人の倉庫だ」

「そいつは凄い。あつしもお伴しても好いでしょう？、料金はタダで結構。とっておきの





子連れてゆきやす。」

「ダレだい、とっておきの子と云うのは？」

「ジローですよ。二回程、旦那にも可愛いがつて貰ったあの白人の子でさ」

「白人の子はダメだ。それにあの子ならもう大人だぜ」

「それがそうじゃねえんです。とてもキレイになりやしたよ。昨夜もそうなんです。丸裸に剥いでネ逆吊りにして、絵の具を塗ってやたらね、何しろ肌が白いもんだから実にキレイなデッサンが出来ちまいましたよ。顔が真赤に充血した時に床に下ろして、白いナワでグルグル巻きに縛ってやって、解いたあと、カラーで全身を撮影しやしたが、あんな美事な生人形なんてルーブル芸術館にもありやしませんよ。髪の毛が金色なのと瞳が真ッ青でしよう、顔だけはその儘だが首から下は

泥絵具を塗りたくった上に新縄で縛ったもんだから、すごい紺模様に^{わすり}なっちまいやした。総天然色のね」

「それは面白い責め方だね。どうだい、もっと他に変わった責め方はないかね」

「ありますとも、旦那。今日の十六才なら、こんな風な拷問遊びがピッタリでさ。実は今日、旦那の電話が無かったら、試してみようと思って居りやしたが、布団が五、六枚、要りやす。なるたけ広い、綿の沢山、入った布団を五、六枚、重ねて、その上に分厚いビニール布を広げやす。ボーイは丸裸、サポウターは一応、外して中へオシメカバーを当ててやって下さい。錠は危いから外して、サポウターに使うような広巾のゴムバンドで縛りやす。足首を各々の太股のつけ根にね、両手首は深い位に頭の後で組ませて、こいつも縛

りやす。一寸、重てえがこいつをビニール布の真中に置いてやりやあ、自分の重みで布団の中へ好い具合にめり込みやすからね。その上からオリブ油を一合か二、三合、ふりかけてやるんです。一寸、身体にさわってごらんない、独楽のように廻りやすよ。判りましたかい？アトはムチで引っぱたくなり、筆の穂先でくすぐってやるなり……」

私はそのとき、男の声が何時もと異なるのにフト気附いた。いつもはこんなに長くしゃべる筈はない。おかしいぞ、不吉な予感が頭に閃めいた。私は男の次の声を待った。

「旦那……」

その声ははっきりとは聞き取れないほどのものだった。

「どうしたんだ！一体！」

と云いさして、私はボックスの外を見て思わず息を呑んだ。ドアの外にはそれと判る黒い背広の男と制服姿の警官が。

「——ご苦労さん、大分しゃべり疲れたろう。だが奴の公衆電話の位置が判ったのはお手柄だ。今頃は捉ってるだろう。」

男の声に代って、職業的臭みのある声が受話器から流れ出た。私の右手の中でチョコレートが音を立てて砕けた。

浣腸短篇

たそがれ

瀬川良三

東京大手町の万世ビルの七階、大東物産の経理課では、来年度予算編成を間近にひかえて、課員一同、猫の手も借りたい程であった。東洋一のマンモス・ビルと誇るだけあって、総延坪、一万坪、二重ガラス窓に冷暖房も完備して、大都会の一室にもかかわらず、ここでは一切の騒音も入らず、算盤の音と書類をめくる音だけが、不思議な調和音をかなでていた。

今年三月、十倍の競争を経て入社した初見啓子も、ようやく社風にも馴れ、今では算盤二級の腕を買われ、経理ではなくてはならな

い一員であった。而も背こそ一米五十五糎で、さして高くはなかったが、色白でやや下ぶくれの愛らしい顔立ち、大正型美人として、その気立の優しさと共に、課内、いや社内で注目をひかないわけにはゆかなかった。でも、身体こそ完全な大人であつても、チョコレートとチューインガム

に喜びの眼をかがやかせる可憐さが、社員一同に珠玉といった感じをいだかせていた。



午前十時半、九時きっかりから算盤に追いまくられていた課員達にも、あくびの一つも出ようというもの。お茶汲みは女子社員の仕事という不文律は、とかく労組の女子組合員から文句の出るところではあるが、やはり長年の習慣は何となく打破されないでいた。

啓子はチラと腕時計をながめ、今朝からの頭痛を癒すよい機会とばかりに席を立つと、ふらふらと眩暈を感じて、そのまま再び腰を下してしまった。でも大したこともなく、再び腰を上げようとした時――

「啓ちゃん、どうかしたの？ 顔色が悪いわ。お茶、私がいれてあげる。休養室へでもいったら？」

「いえ、大丈夫、お姉様。今朝から一寸、頭痛がするの。下を向いて算盤ばかり入れていたでしょう。急に立ち上ったから、一寸ふらつとしたんだわ。もう大丈夫、息ぬきにお茶入れますわ」

「そう、じゃ私、手伝ったげる」

「嬉しいわ。では、お願い」

隣席の松原由美は二十二才。入社以来、四年。高校時代バレーのキャプテンを勤めただけあって、筋肉質の張ち切れるような肢体を黄色のセーターに包んだ、その胸元などは、思わず目をそらす程の見事さであった。労組の女子部長としての統率力と共に、仕事の面でも課長の信任あつく、男子社員の内では早くから未来のとの夢を託している者も少なかった。初見啓子が入社以来、何くれとなく面倒をみてもらっている由美に、同僚として

以上の感情をいなくようになったのは、昨日今日の事でないのは勿論である。先程も思わず啓子の口から出た「お姉様」という言葉は、その辺の事情を物語って充分であろう。偶然の一致か、二人とも男兄弟の間に育って、姉妹をもたないだけに、姉と妹といった感情が育ったのも当然であった。

湯沸場は二人の絶好な息ぬきの場でもあった。廊下を右に折れた一角、ガス湯沸器とガスレンジの装置されたここは、都内のビルでも一寸、見られないデラックス版である。

「啓ちゃん、顔色よくないけど、今、あれ？」

「ううん、もう十日前にすんじやった。違うのよ」

「じゃ、何よ。どっか具合、悪いの？」

「ええ、一寸、でも――」

「何がでもよ。診療所へ行つた方がよくない？」

「だって、いやだもの」

「いやな事ないでしょ。どうしたの、相談にのってあげるわ。啓ちゃんのことだもの、話してごらんさいよ」

「だって恥ずかしいもの。誰にも言っちゃ、いやよ。お姉様にだけ。あのね。――」

「早くおっしゃいよ。気をもたせるわね」

「あの――お通じがないの。いやだわ」

「なあんだ、そうなの」

耳までも真赤にした啓子の顔を、いとほしげに両手ではさんだ由美の眼が、なにかきりと光るのを、啓子は気が付く筈もなかった。折しも掃除の小母さんの入ってくる気はいに、

「さあ、早くお茶を入れましょう。皆が待ってるわ」

「お姉様、誰にも言わないでよ、お願い。私時々こうなの」

「大丈夫よ。後でいいことを教えてあげる」

啓子は恥ずかしいことを言ってしまった気安さからか、南国土佐を口ずさみつつ、茶器をもつてついて来た。足どりも軽そうに。

一日の勤めも終りに近づいた午後四時半。

午後の光は斜に部屋の三分の一位を照らしていた。課員も、びっしりつまった一日の仕事に飽いて、退社後の予定を、或は麻雀の、或はなわのれんの味を、お互いにさそい合う時、

「啓ちゃん、今晚、一寸うちへ寄ってゆかない？ お宅で心配するといけないから、電話しておいたら」

「そうね。では、お言葉に甘えまして」

「まあ、お上品なお言葉づかいですこと」
退社のベルがなった。課長、次席、その他、
一、二の男子社員を残して、皆は後片づけも
もどかしく、三三伍々、鞆をかかえて席を立
っていった。

連れだって夕方の丸の内街をゆく啓子と由

美に、足早の秋の陽が淡い夕暮の影を投げか
けていた。

夕方ラッシュの中央線は相変らずの混み
方。でも始発駅東京では、一、二台、見送れ
ば何とか坐ってゆける。中野迄三十分、若い
二人にとって三十分の話題に困ることはなか



った。駅を右に出て三分、商店街の尽きる所
を左に曲ってすぐのところに由美のアパート
はあった。都下八王子の素封家の娘である由
美にふさわしい可成り立派なこのアパートは
所謂、貸家式というのか、各戸の出入口は全
部別個であり、一室一室が完全に独立、今を
はやりのブロックで固められた各室の防音効
果もよく、正に隣は何をする人ぞというわけ
であった。

「さあ、遠慮なくお入んなさいよ。狭いとこ
だけど、ここは我が城。誰にわずらわされる
こともなく、全くホッとするわ、ここに帰っ
てくると。八王子から通うんじゃ体が参って
しまうもの。父にねだって一室あてがっても
らったわけなの。どう、お嬢さんに来てもら
ってもよさそうね。ウフフ」

「まあ、きれい。いいお部屋ね。私もこんな
お部屋、ほしいわア」

半畳程の玄関を入ると、右手に台所、ガス
水道は勿論のこと、小型電気冷蔵庫、ステン
レスの食器棚、排気扇と、電気三種の神器と
まではいかなくても一通り文化的に揃った台
所は、啓子をうらやましがるに充分であ
った。

左手はトイレ、総タイル水洗。広さこそ半

坪に満たないが、一人暮らしにはこれで充分。掃除がゆきとどいて、一輪差しの萩の風情が、やはり女性の心づかいを感じさせる。

居室は八畳、三つ重ね、洋服、整理ダンスに三面鏡、最低必要限度にとどめたとは言いがた。年若い由美には欲しいものばかりであった。タンスの上のオールウェーブラジオはまだ買ったばかりか、紙のほうたいをまいたまま、フランス人形のケースにほこりがたまっているのが何か似つかわしくなかった。窓にそってシングルベッド、これはよく病院で見かける鉄のパイプの簡単なものであったが、ライトグリーンに塗装され、真白いシートとともに清潔な感じをただよわしていた。「ところで、先ずお茶でも入れて、夕食は何にしよう。面倒だから天井でもとりましようか。」

「ええ、でも、あんまり喰べたくないの。何だか——」

「お腹が張るようでしょ。お馬鹿さんね、ためとくからですよ。じゃあね、いいこととしてあげる。さあ、浣腸しましょう」

「エッ、カンチョウ！まあ、いやだ」

「何がいやなことあるもんですか。お通じがない時には、これが一番。さあ、いい子だから、浣腸しましょうね」

「いや、いや、恥ずかしいわ。あたし帰る」
「お待ち」

あわててハンドバッグをつかんで立ち上ろうとした啓子をグッとにらんだ由美は、さっきまであんなに優しくかったお姉様とは打って違って、往年バレエコート上で味方を叱咤激励した時の精悍な姿であった。

「いい？ 啓ちゃん。あなたの為を思っているんだから、一寸痛い目に合わせるけど、許してね」

というが早い、サッと足払いをかけたからたまらない。ドウとばかり啓子はくずれ落ち、驚きに立ち上る勇氣も失って口ばかりもぐもぐさせるのであった。

やっとなにに還った啓子が、

「お姉様、いや、帰らせ——」大声で叫ぼうとして、「帰らせ」までで由美の手にしたタオルが品のよい可愛い口を押さえていた。

丁度、柔道の押さえ込みの形で自由を奪った由美は、手足をバタつかせる啓子を軽く押さえながら、先ずさるぐつわをはめにかかる。両足はバタつかせたまま、今度は素早く馬の形になって両手を膝の下に押さえ、思いきり形のよい鼻をつまみ上げると、啓子が息苦し

さに思わず口をあけた瞬間、タオルは容赦なく口一杯につめ込まれ、もう一本のタオルでしっかりと後頭部でゆわえられた。

「ウウ、ウウ」

軽いうめき声と共に、啓子の眼からは早くも涙が一滴、二滴と……。

なおも手足を懸命にバタつかせてもがく啓子を、声さえ立てなければ、あとは簡単とばかり、ゆっくり両手両足を縛りにかかる。体力の相違と、機先を制せられたばかりに、啓子の自由は今や完全に失われてしまった。

「さあ、もうあきらめて頂戴。大人しくしていればいいのに、あばれるからこんなにされちゃうのよ。涙ふいてあげましょう。もう一寸の我慢よ。いいわね」

赤子をあやすように独りごちつつ、由美は軽々と啓子をだき上げてベッドに仰臥させる。

「じゃ、浣腸器の用意するから一寸、待ってね」

戸棚をゴトゴトさぐる音を啓子はどんな氣持で聞いた事であろう。やがてベッドのそばに現れた由美の手には、五〇〇C入りのグリセリン浣腸器と、グリセリン五〇〇C入りのピンが握られていた。ピンから液が吸い上

げられる。二十五CC、台所に水を二十五CC加えに行った由美は、ワセリンの小ビンと脱脂綿を持って帰って来た。

「さあ、啓ちゃん、長らくお待ちどうさまでした。準備が出来ました。大人しく浣腸しましょうね。いい子だから分ったわね」

なみなみとグリセリンを吸いこんだ浣腸器は二倍の長さになって、螢光燈の光を受けてあやしく光る。今や啓子も観念の眼を閉じた。

「さあ、終わりましたよ。痛くも何ともないでしょう。今、七時四分。十四分迄、我慢しましょうね」

一分、二分、突き上げてくるような排便感、はやがて猛烈な腹痛と変る。啓子は刻一刻と地獄のような苦しみにさらされていった。五日にわたる便秘に、直腸内に充満していたものが、グリセリンの脱水作用に刺戟されて直腸全体が猛烈な蠕動運動を起したのだ。

「ウウウ、ウウウ」

苦しそうな呻きが断続する。その瞬間、由美の手がのびて、いやという程ふくよかな真白い腕をつねり上げた。その激痛が、思わず排便感を制御する。

「ウウウッ」

一きわ高く啓子は呻いて、身もだえする。

「まだ六分しかたってないのよ。便器は、あててありませんよ。シーツ一寸でもよごしてごらんない、あなたどうなるか分る」

非情と言おうか、どうしても十分間、我慢させようとする由美の愛情からか。もう啓子は地獄の苦しさに我と羞恥を忘れ、ただ我が身が連続する苦しみに耐えるしかなかった。又、一しきり起る排便感。今夜は反対側の腕がいやという程つねり上げられる。もう涙も出ず、喉はからからに乾いて、額には脂汗がじっとりとにじみ出る。

「あと二分、我慢なさい。我慢出来ないとお腹の中が本当にきれいにならないから、もっと強いお薬で、もう一度、浣腸しますよ。分った？ いやだったら我慢なさい」

啓子は遂に耐えた。いや巧みな由美の誘導に耐えさせられたといった方が妥当であろう。十分、悪魔の様に長い長い十分が過ぎた。「さあ、よく我慢出来たわね。えらいえらい。ご褒美、何あげようかな」

差込便器の冷い触覚を感じると同時に、啓子は軽い下痢症状となって、五日間の宿便は半流動体となって一気に下っていった。その爽快感、じっと注目する由美の眼も忘れ、全身の力が抜けて、思わず啓子は、うとうとするのであった。我が姿のあられもなさも忘

れて。

静かに手足、口のいましめを取られ、我に返った啓子は、一度にせきを切ったように涙があふれ、ワツとばかりに由美にだきついた。

「お姉様。お姉様……」

あとは声にならなかった。

「苦しかった？ ごめんなさいね。あなた、頭痛がする、めまいがするなんていうんだもの、あたし本当に心配したのよ。だから騙して浣腸してあげようとしたの。でも本当によく我慢したわね。えらいえらい。これからなるべく果物や野菜を食べて便秘しないようにしなくちゃ。ね、分った？」

「でも、どうしても便秘したら——又こうして……」

「浣腸してほしいの？」

「ううん、知らない！……」

「そう、可愛い人ね——」

折しも、由美が何時、注文したのであろうか。

「天井二ちょう、毎度ありー」

玄関の外に出前の声。

「さあ、お食事してお帰りなさい。お家で心配してるといけないわ。今夜はあたし、タクシーおごるわよ」

何時もの二人に返って、夕食の天井が常にもましておいしかった。

(完)



マゾヒズム天国

田沼 醜男

神と奴隷との距離

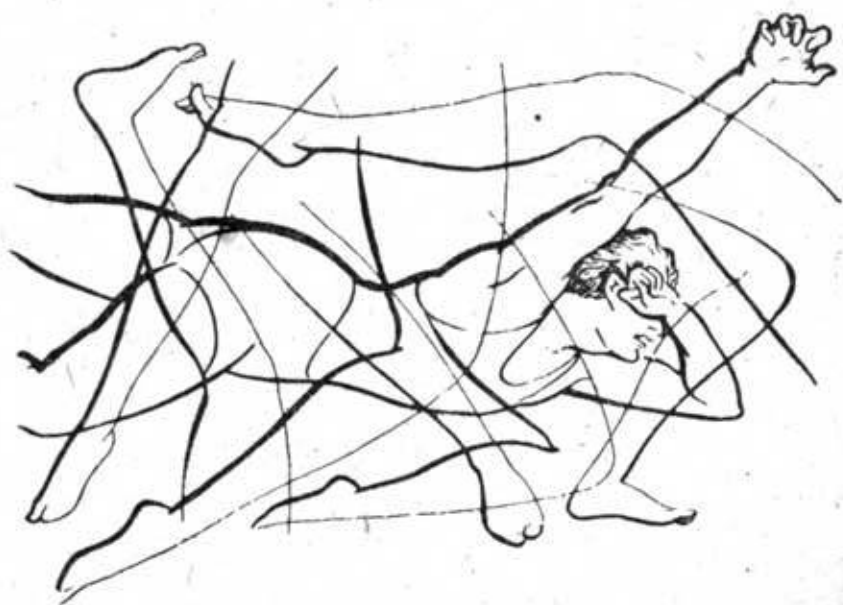
アダ・エクバークが責めてくれると聞けばマゾヒストなら誰だって尻尾を振ってついて行くに決まっている。私の場合もそうだった。サン・ジェルマン・プレの薄暗い酒場でベルナルがその話を持ちだしたとき私は首を振った。

「あの映画女優がかい？ まさか」

「信用しなけりゃいいぜ。よそへ廻すから」

「待てよ、詳しく聞かしてみろ」

「A・Eはリベラで羽根をのばしている。離婚訴訟を起したんだ。気晴しに有色人種のマゾがお望みらしい」



「ジャップでもいいのか？」

「知らんね。行ってみりゃ判るだろう」

ベルナルは私にフランス人のドミナを世話してくれたことがある。好みを訊かれてA・Eに似た女と頼んだことを思いだし私は苦笑した。

「それで幾ら要るんだ？」

「相手はA・Eだぞ。お前の端タ金なんぞ出してみろ、唾でもひっかけられるのが落ちさ」

「ロハだって云うのかい」

「幸運を祈るよ。俺のメルセデスに乗って行け。但し責め殺されないようにしな」



小型のスーツ・ケースを持って私はメルセデスを飛ばした。リベラへは夕方近くに着いた。海の見渡せる部屋を借りると、教えられた通りホテル「リッツ」に電話を入れた。

「ハロウ……どなたですか？」

ニグロ訛りのある女の声がした。私はベルナルの紹介だと答えた。

「明晩十時においで下さい。部屋代その他、諸経費はその際お払います」

こいつは頭に來たが、ニグロ女相手に喧嘩したって始まらない。私は電話を切り、ブランドーを運ばせてグデングデンになるまで酔っぱらった。そして明け方になってベッドにもぐりこんだ。

屋過ぎに眼をさました。冷めたいビールでサンドイッチを流してみながら窓外を見ると、無数のビーチ・パラソルに彩られたリベラの海があった。シャワーを浴びて海に出た。リベラは品がいい。上流階級の遊び場だ。私はA・Eとの出会いを想いながら半日、歩き廻った。約束通り夜の十時にリッツへ出向いた。

「A・E様は七階を全部、借切っておられるのです」とハンサムなエレベーター・ボーイが云った。「——まったく素的な方ですね」

電話の主と思われる黒人女が奥の部屋へ案内した。そこで一時間余りも待たされた。待ちくたびれていると女は顎髯を生やした中年男を連れて戻って來た。男は私の顔をジロジロ眺め廻した後、胡散臭そうに訊ねた。

「年令は？」

「三十四です」

「既往疾患はないだろうね」

私はないと答え、その無礼な男をみつめた。男は落着きはらって私の腕をつかみ、懐中時計に眼を落した。脈搏を測っているのだと私は気付いた。

「服を脱ぎたまえ」

と男が云った。私がためらうのを見て、黒人女が、そっとささやいた。

「云われた通りなさらなければいけません。何しろA・E様のお相手をなさるのですから」

私はそれもそうだと思い、黙って服を脱いだ。男は、ひどく慎重に調べた。そしてカルテに何か書きこむと、急ぎ足で部屋を出て行った。

「合格したのかな」

私は幾分、皮肉な調子で黒人女に訊いた。

「さア判りません。あの方も前はA・E様のお相手だったのです。強度のマゾヒストでした。でも、いまでは落ちぶれてしまっ、お情けでお側に置いて貰っているのです」

「道理で俺に反感を持っている様だった」

「ところで経費をお払いしましょう。とりあえず五〇〇ドルでは？」

私が要らないと答えると黒人女は頭を振りながら云った。

「必要の際はお電話下されば届けてさしあげます。当分、御自分のホテルで待機して下さい」



私は海のみえる部屋へ帰り、ブランデーを浴びるほど飲んで、ぶっ倒れた。次の日も、その次の日も連絡はなかった。

五日目に我慢しきれなくなってリッツへ出掛けた。黒人女が咎めるように云った。

「前以て電話下さらないければ困ります」

「診察の結果は判らないのか」

「健康状態はよろしいそうです。目下あなたの履歴を調べておりますので」

「俺はパリへ帰っちまうぜ」

「御随意に：でもチャンスを失うことになりましたが。世界中のマゾヒストが乞い願っているチャンスです」

「A・Eは俺のことを知っているのか」

黒人女は驚いたように云った。

「どうしてそんなこまかい事までお耳に入れる必要があるでしょう。A・E様は休暇を愉しんでおられるのです」

私は、なるほどと思つてうなずいた。

「小切手をお用立ていたしましたようか」

「そうして貰おう」

夜はリベラの街を飲み歩いた。正体を失いかけたとき日本人の女に肩を揺すられた。

「お酒、奢ってくれない？」

「勝手に飲みな」

女は媚を示して誘いをかけて来たが、私ははっきりと拒絶した。

「俺はナ、いまA・Eに首ったけなんだ。そんな真似が出来

るかい」

「あんたA・Eの恋人？」

「馬鹿、ジャップが彼女の恋人になれる筈があるか」

しかし、私は彼女のアパルトマンに行った。趣味の悪い浮世絵が壁に貼りつけてあった。女は訊きもしない身の上話をしゃべりだした。

翌日ホテルに帰ると、ボーイがリッツから連絡があったと告げた。私は急いでダイアルを廻した。

「変な女と交際なさったそうですね」と、黒人女は憤ったように云った。「——検診をやり直さなければなりません」

私は暗然として、ブツブツ訳の判らぬことをつぶやいた。

黒人女は、明後日の夜リッツへ来るようにと云つて電話を切った。私は、またブランデーを飲み、正体を失ってベッドにぶっ倒れた。

医者は前よりも入念に診察した。私は品物のように検査されなければならなかった。

「小切手をまた貰いたいんだが」

診察が終ったとき私は云った。黒人女は重々しくうなづいた。小切手を貰って出て行こうとしたとき靴音がして女がはいって来た。

A・Eだった：私の胸が凄く速さで打ちはじめた。豊かに波打つ金髪、幅広い肩、長身にまとったドレスにバラ色の肌が眩いばかりに映えていた。彼女は酔っているように見受けられた。黒人女に身をもたせかけると青い眼で私をみつめた。こうして間近かにいると、A・Eは怖い位、精力的に



見えた。私の背丈は、彼女のそそりたつ胸のあたりまでしかない。私の本能はありありと彼女にドミナを嗅ぎつけた。そして、いきなり床にひれ伏した。

A・Eは嗜虐的な青い眼で、じっと私を見つづけていた。そして黒人女に何か云うと、サッと私の頭をまたぎ、大股に部屋を出て行った。

「あのひとは何と云ったんだ」

私は、せきこんで訊ねた。

「眠いからもう休むとおっしゃいました」

「それだけか」

「そうです。あなたは跪拝されたようですが、少し早過ぎましたね」

「挨拶もしちゃいけないのか」

「A・E様は、あなたのマゾをお許しになるかどうかまだ判りません」

「しかし俺の頭をまたいでくれたぜ」

「あなたの頭が其処にあったからです。石ころがあれば石ころをまたがれたでしょう」

「そう云われればそうだな」

「連絡があるまで待機を続けて下さい」

次の日の午後、電話がかかって来たとき、私は宿酔いでベッドの中にいた。受話器から黒人女の声が流れて来た。

「残念ですがチャンスは失われました。小切手をお送りしますからパリへお帰り下さい」

「何故だ。健康診断の結果がよくなかったのか？」

私は、せきこんで訊ねた。相手はためらっているようだったが、やがて低い声で云った。

「A・E様は、こうおっしゃいました。弱そうな男ね。一時間ともつかしら」

「耐えてみせる！チャンスを与えてくれ。殺されたって構わないんだ」

「A・E様は白人の男でさえ殺したことがあります。散々に痛めつけた上で顔の上にお腰掛けになったのです」

「そ、それでいいんだよッ。俺は、そうやって殺されたら本望なんだ！」

「その男は無国籍の浮浪者でした。あなたはに国籍がありません」

私はボーイを呼びつけると、ブランデーを運ばせて浴びるほど飲んだ。夜になるまで飲み続けたが、眠れそうになかった。パンツ一枚になって海へ降りた。

沖へでると、ところどころヨットが浮かんでいるだけだった。私は波間にただよって、リッツの七階の灯を見、そして

A・Eの精力的な肢体を想った。

そのとき爆音が聞え、モーターボートが波を蹴散らして突進して来た。私はボートの上にA・Eの姿をみとみた。金髪を海風に靡かせ、純白の水着をつけた彼女は、ギリシャ神話の女神のようだった。その脚の下から黒人の男の顔が見え、A・Eは身体をのけぞらばかりにして笑っていた。

私は咄嗟にボートの進路にむかって泳ぎだしていた。ボートが私の肉体を粉碎する瞬間、私は近々と見る事が出来た



A・Eの強靱な脚を：それはニグロの頭をグイグイとしめあげていた。遠くなつて行く意識の中で私はA・Eの高い笑声を聞いたように思った。

A・ヘップバーン

二年ばかり前の資料になるが、オードリー・ヘップバーンが一本の映画から得る出演料は一億三千万円であった。いまでは、もっと高額に達しているかも知れない。

さて二万円の月給とりは五五〇年かからなければ一億三千万円の金を手にすることが出来ない。ということは彼は一生かかってそれだけの金を稼いだことが出来ないのだ。

更に二万円の月給とりは六、五〇〇人集まらなければ、一億三千万円の金を積むことが出来ない。A・ヘップバーン一人の労働は六、五〇〇人のそれに優に匹敵するのであって、此処に次のような問題が起きた場合：太平洋のまん中で汽船が難破して、A・ヘップバーンと六、四九九人の月給とりが救いを求めているような場合、六、四九九人を見殺しにしてもA・ヘップバーンを救うことが、資本主義的観点からすれば正しいのである。六、四九九人がいかに抗議してみたところで、A・ヘップバーン一人の働きに劣っているのだから仕方があるまい。

しかしマゾヒストの見方からするならば、あの美しいヘップバーンと醜い黄色人種六、五〇〇人とが等値だというのはまだ不足なのであって、彼女はもっと高い出演料をとってよいのではないかと思われるのだ。日本国民全部を寄せ集

めたところでヘップバーン一人に値するかどうか、私としては勿論、日本国民全部を貰うよりも、ヘップバーン一人を頂戴した方が有難いし、たとえ彼女のはき古したパンティー一枚でも、黄色い九千万人よりは尊く思われるのだ。

下剋上について

マゾヒストにとって甘美なテーマの一つが此処にある。現在の社会構成からみて何と云ってもまだ女性に男性にくらべて低い位置に置かれていることは事実だから、マゾヒズムにとってこのテーマは必然的なものである。しかし、かかる基本的設定のみならずマゾヒズムの様々な開花の至る処にこのモチーフが顕現していることを指摘する人は案外少い。

谷崎潤一郎初期の作品には、金持の坊ちゃんが下層階級の凄艶な娘に誘惑され利用され、袖にされるといふ筋のものがかなり多い。これは主に階級的な下剋上と云えるだろう。

真砂十四郎氏の高名な「ヴィナスの重石」では課長と新米の女事務員を対置させることによって、階級の下剋上を表現していることのほかに、年令的な下剋上のモチーフがはっきりと見てとれる。年上の女性に凌辱されたいと願うマゾヒストの存在することは事実であるけれども、マゾヒズム小説全体を通じてみれば、年下の女性を対象とした例の方が量的には圧倒的に多い。くたびれた中年男と潑刺たるティーン・エイジャー娘という、何度も繰返されたマゾ小説の設定は、いずれも明かにこの年令的な下剋上が意識されている。

鬼山絢策氏の数多い傑作では、比較的教養の高い男が、粗



野な無教養な娘に凌辱されるというモチーフが執拗に現れて来る。この点は谷崎潤一郎の「金と銀」や「永遠の偶像」などにも既に見られる処で、知能的下剋上とでも呼ぶべきであろうか。青白き知性にたいする荒々しき野性の勝利だ。

私には巨体狂崇の傾向があつて、映画を見てもストリップを見ても、いちばん大柄の女性の何人かの中にしかドミナを感じることが出来ない。元来、小柄であるべき女性が自分より大きいときに感ずるこの倒錯は、体位的下剋上と云うことが出来よう。古くは日本文古六氏の「あわれ誠一郎」に比較的、最近では真木不二夫氏の「黄色オラミ誕生」にこのモチーフが現れている。

体位的下剋上は直接に暴力的下剋上に結びつく。前記二作品にも、当然そのモチーフは鳴っているのだが、大分以前、本誌に掲載された鬼山絢策氏の「異色美人句」は出色のものであつた。恐怖と酔いで動けない四十男を洋服がズタズタに裂ける程、撲ったり蹴ったりした二十二才の女性の話は、それが事実にもとずいていただけにマゾヒストを感動させた。

さて最後に白人崇拜の問題があるが、これは下剋上と結びつくか、たしかに白人女性は体位的な下剋上を日本人男性に感じさせることが出来る。しかし白色人種は元来、黄色人種に優越した存在だつたではないか。

たしかに現実はその通りであつた。しかし日本人の意識の中では、必ずしもそうではなかつたのだ。鎖国日本は日本人を世界に冠たる民族と僭称し白人を南蛮、夷狄と呼ぶことによって日本人の意識の中に誤まれる優越感を植えつけた。こ

の信仰は明治大正となつて谷崎潤一郎が出現した後もまだ十分には拭い切れぬものがあつたのであり、太平洋戦争に突入した頃から再び優越民族意識の教育宣伝が行われたので、日本人全体がこの迷信から目覚めたのは、ようやく敗戦という現実に向直してからだと云つてよい。彼等は白色人種が精神的にも体力的にも美的にも経済的にも遙かに優秀な人種であることを眼のあたり見せつけられたのである。適応能力は高崎山の猿でも若猿がいちばん早い。敗戦直後の日本人では、若い娘たちがいちばん早く適応し、大量的にパンパン・ガールとなつた。アメリカ兵と腕を組んだ榮養のいいパンパン・ガールたちが、黄色くしなびた日本の男を男とも思わないマゾ的風景がたつぷりと展開された。私の知人は小声で「パンパン・ガール」とつぶやいたのを彼女たちに聞きつけられ、告げ口されて、アメリカ兵に叩きのめされたことがある。このお仕置きを眺めながらチューインガムを噛んでいたパンパン嬢の美しさを私は忘れることが出来ない。白色人種と日本人の間に現実的な下剋上はなかつた。白人は今も昔も永遠に我々より優れた存在に違いない。しかし意識内部の価値系列では明かに下剋上が行われたのである。この微妙な倒錯を表現した文章は多くはない。私の知る範囲では沼正三氏の「日の丸ブローズ」がこの種モチーフの顕現と云えるのではないかと思う。これを観念的下剋上と呼ぼう。

マゾッホの作品には特殊な下剋上のモチーフは認められない。むしろ其処には女性対男性という形で未分化な一般的な下剋上のモチーフが先駆者の誇りに輝いて鳴りわたっていると考えるが妥当であろうと思う。